森庵遺跡発掘調査報告

～伊賀市大谷所在～

2008（平成 20）年 2 月

三重県埋蔵文化財センター

調査区遠景（北から）

巻頭写真 2

調査区完掘状況（垂直）

ＳＸ32遺物出土状況（西から）

ＳＨ31完掘状況（南西から）

F

序

三重県伊賀市は、平成１６年１１月１日に上野市、阿山郡伊賀町、島ヶ原村、阿山町、大山田村、名賀郡青山町の６市町村が合併して誕生しました。それによって伊賀市は、古代律令制下の旧伊賀国におよぶほどの広大な新市になりました。

そのため伊賀市は、旧上野市の1000を超える埋蔵文化財包蔵地に加え、各町村の包蔵地が含まれるようになりました。多数の包蔵地があるということは、昔から人々が居住し、歴史と文化を築いてきた証拠です。

今回発掘調査しました森庵遺跡は、伊賀市北部の柘植川右岸に所在する遺跡です。本遺跡の成果は、古墳時代から室町時代にかけての人々が生活してきた足跡の一端を解明しました。

私どもは、これらの貴重な文化財を祖先の残した歴史遺産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上と発展の基礎として活用し、公開していかなければなりません。

今回の国道整備事業に伴い、遺跡の一部が道路となることになり、記録保存を図ることになりましたが、これを契機に本書が伊賀市における郷土史研究並びに三重県の歴史研究の一助となるとともに、文化財保護の啓蒙にお役立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に当たりましてご協力を賜りました地元の皆様方をはじめ三重県県土整備部、伊賀建設事務所、伊賀市教育委員会などの関係各位に厚く感謝申し上げます。

２００８年２月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は、三重県伊賀市大谷字森庵に所在する森庵（もりあん）遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、次の体制により実施した。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

　　調査研究Ｉ課　　技　師　萩原義彦

調査作業受託　株式会社　埋蔵文化財サポートシステム

自然科学分析　株式会社　パリノ・サーヴェイ

3　本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ｉ課が行った。なお、遺物の実測・トレースについては、支援研究課が行い。遺物の写真は、小濵学、石井智大、山本達也が撮影した。執筆及び編集は、萩原が行った。

4　図版における方位は、世界測地系の座標を基準とし、方位は座標北を用いた。

5　本書で用いた遺構表示記号は、下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＫ：土坑　　ＳＨ：竪穴住居、竪穴建物

Ｐｉｔ：柱穴　　ＳＴ：水田跡　　ＳＸ：墳墓　　ＳＺ：その他

6　当発掘調査による図面・写真等の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

7　発掘調査は、三重県教育委員会が三重県県土整備部から経費の執行委任を受けて、平成18年度改良事業（国）422号（三田坂ＢＰ）に伴って実施した。

8　調査にあたっては、三重県県土整備部、伊賀建設事務所、伊賀市教育委員会ならびに地元各位の協力を得た。

本 文 目 次

Ⅰ　前言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1　調査契機 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2　調査方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
3　調査経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
4　調査日誌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
5　文化財保護法等による諸通知 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ　位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
1　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
2　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅲ　遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
1　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2　検出遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅳ　遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

Ⅴ　自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

Ⅵ　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
1　古墳時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
2　平安時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
3　鎌倉時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
4　室町時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
5　小結 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

考察編　竪穴建物の示す可能性について ・・・・・・・・・・・・・・・・・50
1　竪穴住居から竪穴建物へ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
2　竪穴建物の分類 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
3　竪穴建物の性格 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
4　竪穴建物が有する政治性について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
5　竪穴建物への転換 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
6　竪穴建物への転換要素 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
7　家と船の構造変化が示す可能性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
8　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図（1／25,000）
第２図　遺跡地形図（1／5,000）
第３図　調査区位置図（1／2,000）
第４図　調査区地区割図（１／400）
第５図　上地区下層遺構平面図（1／200）
第６図　下地区上層遺構平面図（1／200）
第７図　調査区断面図（1／100）
第８図　ＳＸ32平面図（1／100）
第９図　ＳＸ32平面図・断面図（1／20・1／50）
第10図　下地区下層遺構平面図（１／200）
第11図　ＳＨ120平面図・断面図（１／50）
第12図　ＳＺ90平面図・断面図（１／50）
第13図　ＳＢ115平面図・断面図（１／100）
第14図　ＳＨ40平面図・断面図（１／50）
第15図　ＳＨ41平面図・断面図（１／100）
第16図　ＳＫ37・39・112・116平面図・断面図（１／50，ＳＫ112は１／40）
第17図　ＳＫ44・118平面図・断面図（１／50）
第18図　ＳＫ86・110・111平面図・断面図（１／50）
第19図　ＳＤ69・Ｃ６Pit３・Ｃ２Pit５・Ｅ９Pit４・Ｅ10Pit２平面図・断面図（１／20）
第20図　ＳＤ65遺物出土状況図（１／20）
第21図　ＳＤ65遺物出土状況図（１／20）
第22図　ＳＨ31平面図・断面図（１／100）
第23図　ＳＢ122・ＳＤ65・69平面図（１／150）
第24図　ＳＢ122・ＳＤ65・69断面図（１／50・１／100）
第25図　ＳＤ63平面図・断面図（１／150・１／50）
第26図　上地区上層遺構平面図（１／200）
第27図　上地区下層確認状況図（１／200）
第28図　出土遺物実測図（１）
第29図　出土遺物実測図（２）
第30図　出土遺物実測図（３）
第31図　出土遺物実測図（４）
第32図　出土遺物実測図（５）

表 目 次

第１表　遺構一覧表（１）
第２表　遺構一覧表（２）
第３表　遺構一覧表（３）
第４表　出土遺物観察表（１）
第５表　出土遺物観察表（２）
第６表　出土遺物観察表（３）
第７表　出土遺物観察表（４）
第８表　樹種同定結果

図 版 目 次

巻頭写真１
　　調査区遠景（北から）
巻頭写真２
　　調査区完掘状況（真上）
巻頭写真３
　　ＳＸ32遺物出土状況（西から）
　　ＳＨ31完掘状況（南西から）
図版１　調査前風景（南から）
　　調査前風景（北から）
図版２　ＳＸ32遺物出土状況（西から）
　　ＳＸ32遺物出土状況（東から）
図版３　上地区完掘状況（南から）
　　ＳＨ31完掘状況（西から）
図版４　ＳＨ40完掘状況（南から）
　　ＳＨ41断割状況（東南から）
図版５　下地区完掘状況（北西から）
　　下地区遺構掘削状況（南西から）
図版６　下地区下層完掘状況（北西から）
　　ＳＨ120完掘状況（西から）
図版７　ＳＺ90礫層出土状況（北から）
　　ＳＺ90完掘状況（北から）
図版８　ＳＤ65遺物出土状況（南から）
　　ＳＤ65遺物出土状況（西から）
図版９　ＳＤ65遺物出土状況（西から）
　　ＳＫ86遺物出土状況（西から）
図版10　ＳＫ86遺物出土状況（南から）
　　ＳＫ86遺物出土状況（南から）
図版11　箱状木製品（ＳＤ63）出土状況
　　（南から）
　　漆器椀（ＳＤ63）出土状況
　　（北から）
図版12　ＳＺ110完掘状況（南から）
　　ピット遺物出土状況（南から）
図版13　水田跡検出状況（北から）
　　水田跡検出状況（北西から）
図版14　出土遺物（１）
図版15　出土遺物（２）
図版16　出土遺物（３）
図版17　出土遺物（４）
図版18　出土遺物（５）（デジタルデータ）
図版19　木材（１）
図版20　木材（２）・種実遺体

Ⅰ　前　言

１　調査契機

今回の発掘調査は、道路改良事業（国）422号（三田坂ＢＰ）に伴うものである。このバイパスは、伊賀市街地から北西側に位置し、伊賀市三田を経由して柘植川及びＪＲ関西本線を高架で越えて伊賀市大谷を通過するものである。このルートを建設するにあたって計画上で確認されたのが本遺跡である。当遺跡は同バイパス建設上、発掘調査が不可避であるため実施の運びとなった。

なお、当調査は道路建設に伴う工事に係る部分だけでなく調査地東側にある民有地も行うこととなった。民有地については、土地所有者の承諾を得て発掘調査を実施した。なお、民有地では、工事計画高に応じて遺構を掘削した。そのため遺構の一部しか掘削していない。

２　調査方法

発掘調査地は河岸段丘上に位置しており、調査区は上地区と下地区に分かれている。上地区と下地区の比高差は３～４ｍである。調査は排土の都合上、上地区から行った。表土掘削は、上地区の北側から重機によって行った。地区設定は北西隅から行い北から南にかけての方向に数字を付し（１・２・３・～)、西から東にかけての方向にアルファベットを付した（Ａ・Ｂ・Ｃ・～)。各地区杭は、世界測地系座標に則って設定した。調査区内に設定された北西隅の杭は、Ａ１からである。なお、遺物の取り上げについては北西隅の杭の地区名に拠った。また、遺構番号については調査区の上・下地区、遺構の種類、内容如何にかかわらず、１から通し番号を付した。実測については、全体の平面・断面図（１／20)、個別実測図（１／10）をそれぞれ各縮尺で行った。全体平面図は、トータルステーションにて行った。写真撮影については、全景写真をラジコンヘリコプターで６×６㎝、個別遺構写真を４×５インチ、35㎜のフィルムにより行った。

３　調査経過

現地における発掘調査は、平成18年５月31日から開始し、６月５日から重機によって表土掘削を行った。人力掘削は、６月14日から上地区の表土掘削後に実施した。表土掘削は、上地区の調査途中から下地区に移動した。下地区の一部は、重機の仮設道路部分を残して掘削した。７月10日から仮設道路の撤去を行った。また、下地区の下層遺構の調査のため８月７日から重機によって掘削を行った。遺構掘削終了後、遺跡の撮影は、ラジコンヘリコプターにより８月19日に行った。

現地説明会は８月20日に実施し、約80名の参加者を得ることができた。上地区の確認調査のトレンチを含め、発掘調査は８月23日に終了した。

４　調査日誌

５月18日（木）

現地にて伊賀建設事務所、埋蔵文化財サポートシステム株式会社（喜多、広瀬、大西）と事前協議(伊賀建設事務所：松本、稲垣、服部、埋蔵文化財センター：所長吉水、竹内、穂積、小濵、萩原)。

５月31日（水）

発掘調査前風景の撮影（南北方向から)。

６月５日（月）

重機が上地区に登るための仮設道路の設置、重機による表土掘削開始。上・下地区それぞれの遺構面の確認を行う。

６月７日（水）

上地区の表土掘削開始。調査区の南側から行う。整地土層とみられる面まで表土掘削。

６月８日（木）

引き続き表土掘削。範囲確認調査における試掘坑の確認。東壁側を中心に水田跡とみられる畦畔状の痕跡を確認した。

６月９日（金）

雨のため、作業中止。

６月12・13日（月・火）

先週に引き続き、上地区の表土掘削を行う。

６月14日（水）

上地区の地区設定を行った後に遺構検出にとり掛かる。

６月15日（木）

雨のため、作業中止。

６月16日（金）

排水作業後、上地区遺構検出。耕作溝を確認した。

６月19～23日（月～金）

上地区水田跡の検出、各水田跡及び溝等遺構掘削後記録作成。下地区の重機による表土掘削。

６月27日（火）

下地区遺構検出。現代暗渠確認。

６月28日（水）

上地区遺構掘削（ＳＺ31）及び重機による下層遺構面への掘削。

６月29・30日（木・金）

上地区溝等遺構掘削。

７月３・４日（月・火）

上地区溝等遺構掘削、下地区排水作業。

７月５日（水）

雨のため、作業中止。

７月６日（木）

上地区遺構掘削。竪穴状遺構（ＳＺ31）の掘削（竪穴住居か掘立柱建物に付随する東南隅土坑か迷う）。この遺構から土塊が出土した。下地区排水溝の掘削。

７月７日（金）

上地区遺構掘削。古墳の埋葬主体部？（ＳＸ32）とみられる遺構を掘削。下地区重機による掘削（仮設道路部分について）。

７月10～12日（月～水）

上地区土坑等遺構掘削（ＳＫ44・ＳＤ30）、個別遺構撮影。下地区は、10日から仮設道路部分を重機によって表土掘削。排土を搬出し道路敷へ。

７月13・14日（木・金）

上・下地区共に溝等遺構掘削。下地区排水溝掘削。

７月18・19日（火・水）

下地区の調査区の東南部壁崩落、コンパネ等によって壁補強をする。水抜き作業及び図化作業。

７月20・21日（木・金）

雨のため作業中止。上・下地区共に調査区の壁等崩れる。防止作業を実施する。

７月24～26日（月～水）

下地区、土坑等遺構掘削（ＳＤ78・ＳＫ72、82、83）。

７月27日（木）

職場安全巡視。吉水所長以下来訪。下地区の溝（ＳＤ63）など遺構掘削。

７月28・31日（金・月）

上・下地区共にピットや掘り残し部分の遺構掘削。

８月１～４日（火～金）

上・下地区共にピット等遺構掘削。個別遺構写真撮影。

８月７～11・14～17日（月～金）

上・下地区共に溝等遺構掘削。下地区上層遺構の記録作成後下層遺構面まで重機による掘削。下層遺構の土坑・竪穴住居を掘削する。

８月18日（金）

上・下地区共に各遺構掘削後ラジコンヘリコプターによる写真撮影のため遺構清掃。

８月19日（土）

ラジコンヘリコプターによる全景写真撮影。個別遺構写真撮影。

８月20日（日）

現地説明会の開催。午前10：00から開催し、約80名の参加者を得た。

８月21～23日（月～水）

上・下地区、個別遺構の写真撮影。22日に上地区をトレンチにて下層状況を確認、古墳の埋葬主体部の墓壙掘削後、記録作成。調査終了。

５　文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下のとおり行っている。

・三重県県条例第48条第１項に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知

平成18年４月10日付け賀建第78号（県教育長宛）

平成18年４月10日付け教委第12-2-7号（県教育長通知）

・法第99条に基づく発掘調査（県教育長宛）

平成18年５月23日付け教埋第96号（県教育長宛）

・文化財保護法第100条第２項に基づく出土品の発見認定

平成18年９月４日付け教埋第３－９号（県教育長宛）

・遺失物法に基づく出土品の提出（伊賀警察署長宛）

平成18年９月11日付け教委第12-４-９号（伊賀警察署長宛）

（萩原義彦）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

今回の発掘調査対象地である森庵遺跡（１）は、三重県伊賀市大谷字森庵に所在する。本遺跡の所在する伊賀市は三重県の北西部に位置し、行政区分で北は滋賀県に、北西は京都府に、西は奈良県に接している。

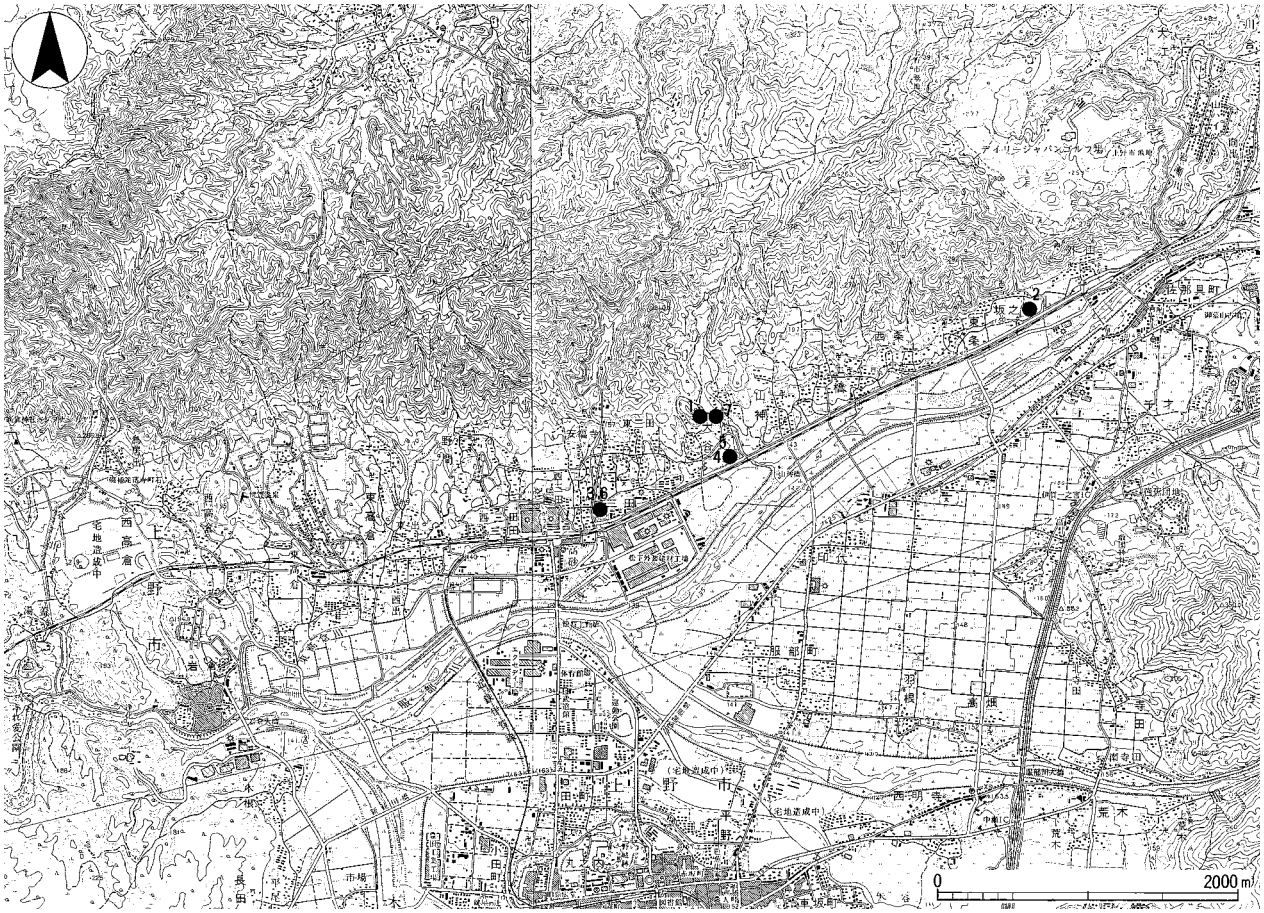
地形的に上野盆地は北部に信楽高原、北東部に鈴鹿山系、南西部は大和高原、南東部は布引山系に囲まれた地域で、低地や台地は少なく丘陵地や河岸段丘が多い。また、中小河川が盆地周辺部から集まり、ほぼ盆地の南北を縦断する木津川に合流し、最終的には大阪湾に注ぐ淀川に流れ込む。

現在の交通網は、名阪国道（国道25号線）が盆地北部をほぼ北東方向から西方向にかけて横断し、奈良・大阪方面の関西圏と三重・愛知方面の中部圏を結んでいる。津方面からは、国道163号線が長野峠を越えるルート、久居方面からは、国道165号線が青山峠を越えるルートによって構成されている。

2　歴史的環境

伊賀地域は、古来より伊勢と都（飛鳥・奈良・京都）を結ぶルート上の交通の要衝であった。江戸時代の有名な鍵屋ノ辻で知られる場所は、街道の合流地である。また、現在の伊賀市街地はかつて藤堂氏の城下町である一方、伊勢神宮への参宮者の宿場町としても栄えてきた。調査対象地の周辺遺跡について柘植川河岸段丘上の右岸域を主に、発掘調査の成果をもとに時代毎に概観しておきたい。

旧石器時代から縄文時代ついてみてみると、ほとんど調査例がなく確認されている遺跡は少ない。調



第１図　遺跡位置図(1/50,000)

査対象地から北東2.5kmの伊賀国府跡　（２）では平成２年・７年の発掘調査で縄文時代中期から晩期にかけての遺物が出土している。

弥生時代では、南西1.2kmに三田遺跡　（３）が所在している。昭和36年に調査が行われ中期から後期にかけての遺物が出土している。伊賀国府跡においても中期から後期の遺物が出土している。

古墳時代では、調査が行われている遺跡がある。調査地の南側の北門遺跡　（４）、北門古墳　（５）が平成２・３年、平成14年に発掘調査されている。集落の様相は、一部判明しており環濠とみられる溝や竪穴住居が確認されている。北門古墳は、円墳で直径25mを測る。古墳の時期は、出土遺物から５世紀後半頃の築造と想定されている。

奈良時代から平安時代で旧伊賀国は、阿拝郡・山田郡・伊賀郡・名張郡によって構成された。伊賀国府跡が昭和63年の範囲確認調査によって掘立柱建物が検出され正殿・前殿・脇殿といった中心建物の変

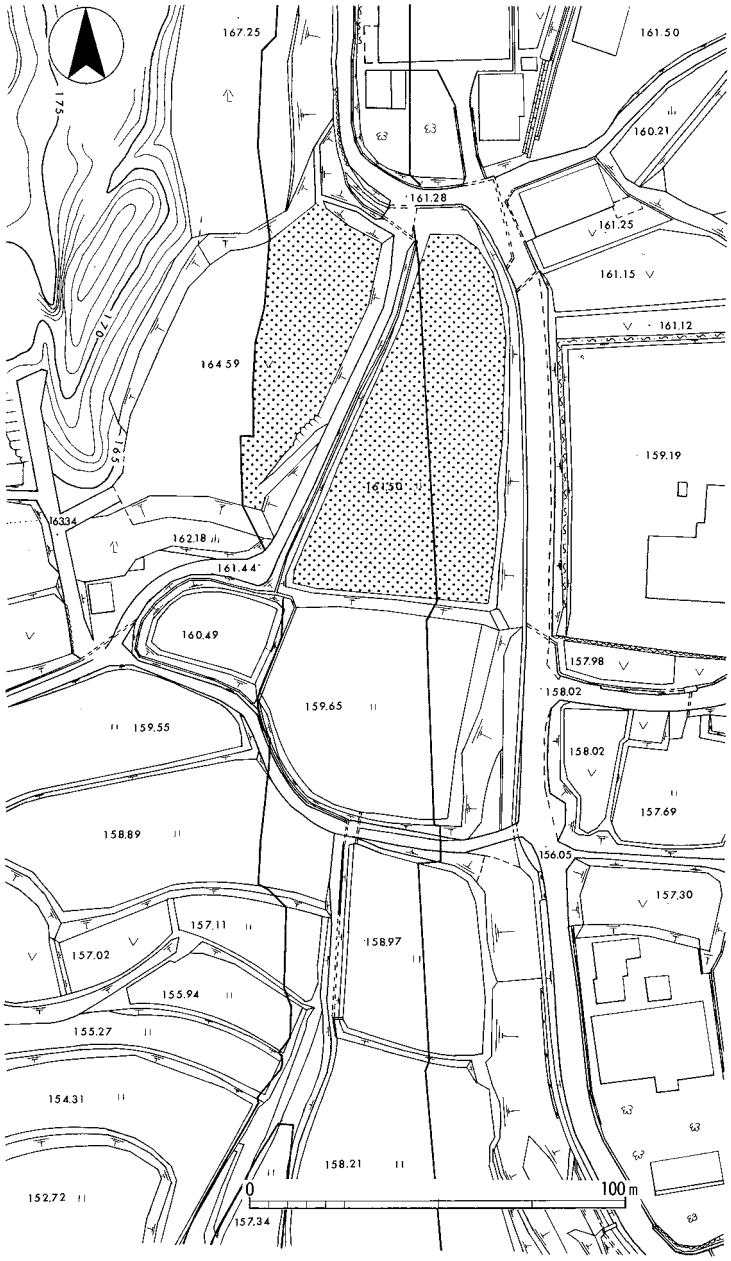
第２図　遺跡地形図(1/5,000)

遷が判明している。北門遺跡では、掘立柱建物・竪穴住居が確認されている。また、寺院跡については、三田遺跡の直近に三田廃寺跡　（６）があり、瓦が出土している。

鎌倉時代から室町時代においては、旧伊賀国内で城館跡が600箇所を超えて残っており、当調査区の直ぐ東側に50m×60mの範囲内で土塁や空堀が残る宇津賀大谷氏館跡（７）が存在する。また、柘植川河岸段丘上には城館跡が現在も多く残っている。この時期の集落跡には、北門遺跡で掘立柱建物等が確認されている。　（萩原義彦）

［註］

①三重県埋蔵文化財センター「伊賀国府跡（第１～４次）発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財調査報告99-4　1992年）
　竹内英昭「伊賀国府跡（第６次）」（『研究紀要第13号－弥生時代小特集・伊賀国府跡（第６次）』三重県埋蔵文化財センター　2003年）
②伊賀市「上野市史　考古編」（伊賀市　2005年）
③上野市教育委員会「北門遺跡（第１次）発掘調査報告」（上野市文化財調査報告31　2004年）
　三重県埋蔵文化財センター「北門遺跡（第３次）発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財調査報告237　2004年）
④註２と同
⑤註２と同
⑥三重県教育委員会「三重の中世城館」1980年



第３図　調査区位置図(1/2,000)

Ⅲ　遺　　構

1　基本層序

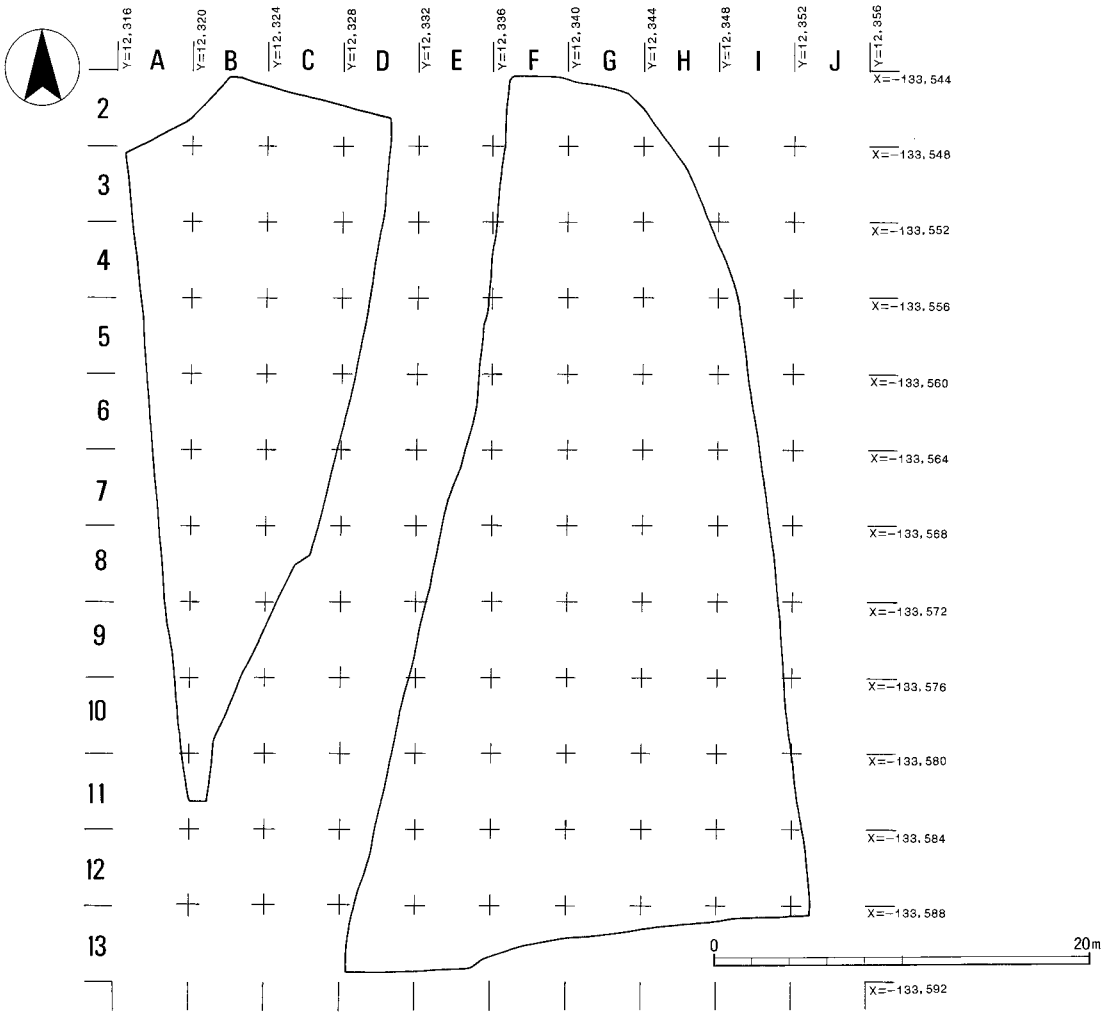
調査区は、上地区と下地区に分かれている。それぞれの現況は、上地区が畑地で、下地区が水田である。調査面積は、全体が1,020㎡で上地区が318㎡、下地区が702㎡で下層調査（380㎡）を含めて1,400㎡である。

次に上・下地区の基本層序についてみていく。

上地区は、調査区西側が北から南にかけて現耕作土直下で遺構検出面とみられる黄橙色粘質土を確認できる箇所と東南側に向かって斜面に沿って整地されている土層、東側に向かって旧耕作土層がある。整地土層は、調査区南側に向かって厚く盛土がなされている。整地土層は、褐灰色砂質土層、灰黄褐色砂質土層などである。下地区では、調査区北側から南側に向かって大きく傾斜していたとみられる。現水田耕作土直下で遺構検出面とみられる黄橙色粘質土層が斜面になっていたとみられる。この斜面上層においても遺構が確認できた。そのため、上下層の調査によるものとなった。

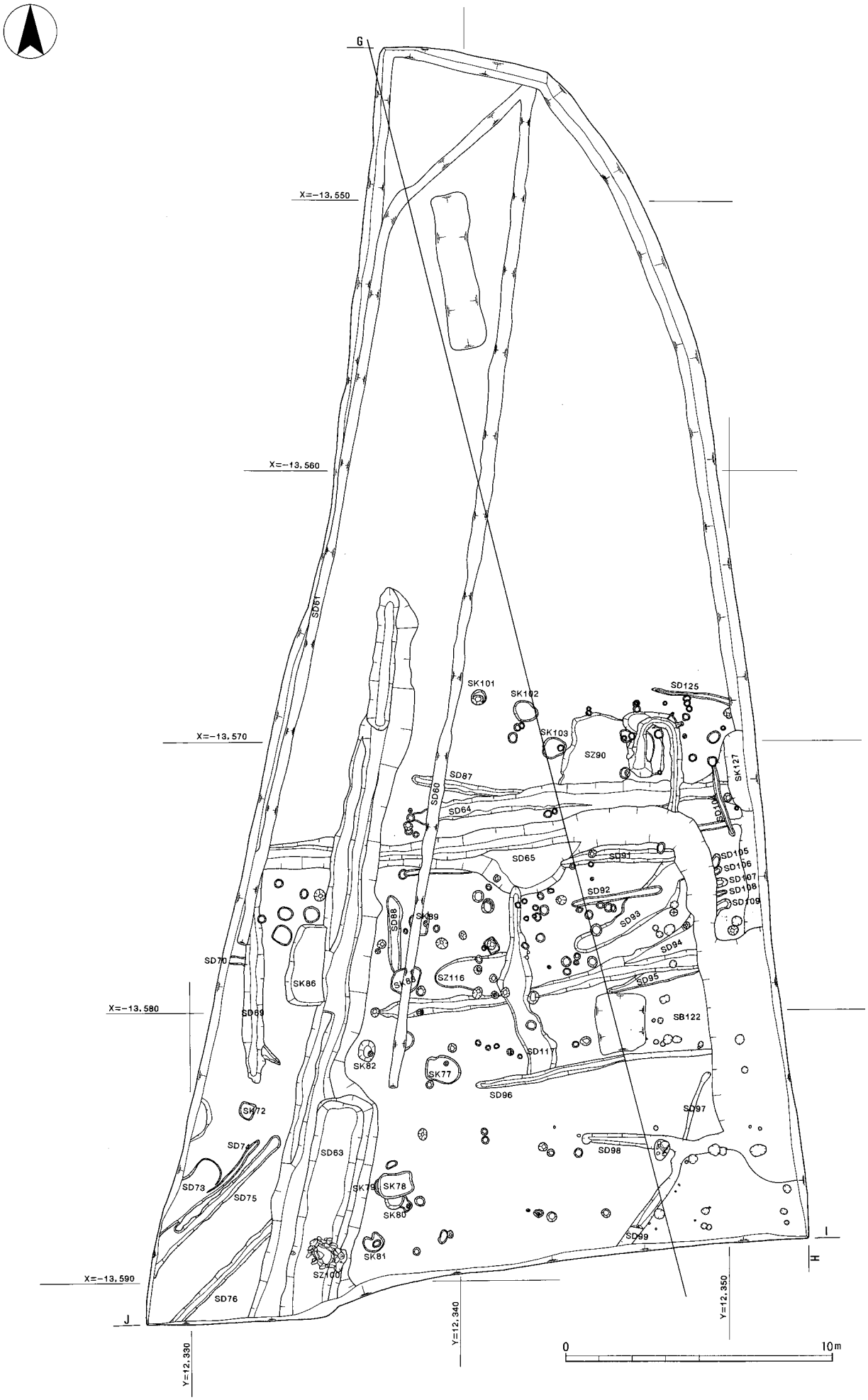
2　検出遺構

検出した遺構は、古墳時代の古墳１基、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物、竪穴住居、溝がある。鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建



第４図　調査区地区割図(1/400)

第５図　上地区下層遺構平面図(1/200)



第６図　下地区上層遺構平面図(1/200)

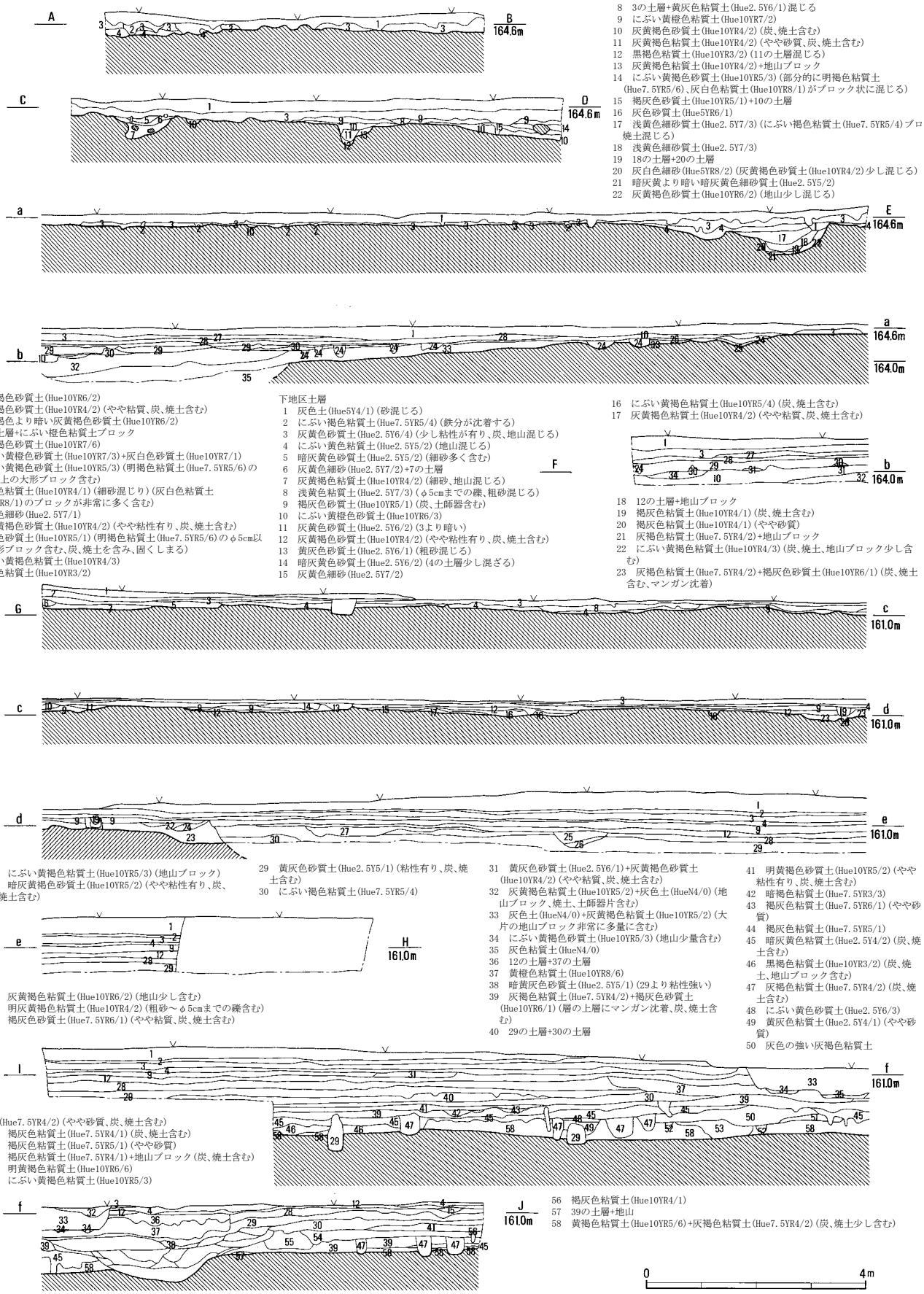
上地区土層
1　灰色土(Hue5Y4/1)(砂混じる)
2　黄灰色砂質土(Hue2.5Y5/1)(粘性有り)
3　灰黄色砂質土(Hue2.5Y6/2)(少し粘性有り、炭含む)
4　にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR6/4)(粘性有り、地山混じる)
5　灰黄色砂質土(Hue2.5Y6/2)(地山ブロック、黄灰色土(Hue2.5Y5/1)含む)
6　黄灰色砂質土(Hue2.5Y5/1)(やや粘性有り)
7　灰黄褐色粘質土(Hue10YR5/2)+にぶい黄橙色粘質土(Hue10YR6/4)(粗砂、地山ブロック含む)
8　3の土層+黄灰色粘質土(Hue2.5Y6/1)混じる
9　にぶい黄橙色粘質土(Hue10YR7/2)
10　灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(炭、焼土含む)
11　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(やや砂質、炭、焼土含む)
12　黒褐色粘質土(Hue10YR3/2)(11の土層混じる)
13　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)+地山ブロック
14　にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR5/3)(部分的に明褐色粘質土(Hue7.5YR5/6)、灰白色粘質土(Hue10YR8/1)がブロック状に混じる)
15　褐灰色砂質土(Hue10YR5/1)+10の土層
16　灰色砂質土(Hue5YR6/1)
17　浅黄色細砂質土(Hue2.5Y7/3)(にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/4)ブロック、焼土混じる)
18　浅黄色細砂質土(Hue2.5Y7/3)
19　18の土層+20の土層
20　灰白色細砂(Hue5YR8/2)(灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)少し混じる)
21　暗灰黄より暗い暗灰黄色細砂質土(Hue2.5Y5/2)
22　灰黄褐色砂質土(Hue10YR6/2)(地山少し混じる)

23　灰黄褐色砂質土(Hue10YR6/2)
24　灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(やや粘質、炭、焼土含む)
25　灰黄褐色より暗い灰黄褐色砂質土(Hue10YR6/2)
26　10の土層+にぶい橙色粘質土ブロック
27　明黄褐色砂質土(Hue10YR7/6)
28　にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR7/3)+灰白色砂質土(Hue10YR7/1)
29　にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR5/3)(明褐色粘質土(Hue7.5YR5/6)のφ5cm以上の大形ブロック含む)
30　褐灰色粘質土(Hue10YR4/1)(細砂混じり)(灰白色粘質土(Hue10YR8/1)のブロックが非常に多く含む)
31　灰白色細砂(Hue2.5Y7/1)
32　暗灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(やや粘性有り、炭、焼土含む)
33　褐灰色砂質土(Hue10YR5/1)(明褐色粘質土(Hue7.5YR5/6)のφ5cm以上の大形ブロック含む、炭、焼土を含み、固くしまる)
34　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR4/3)
35　黒褐色粘質土(Hue10YR3/2)

下地区土層
1　灰色土(Hue5Y4/1)(砂混じる)
2　にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/4)(鉄分が沈着する)
3　灰黄色砂質土(Hue2.5Y6/4)(少し粘性が有り、炭、地山混じる)
4　にぶい黄色粘質土(Hue2.5Y5/2)(地山混じる)
5　暗灰黄色砂質土(Hue2.5Y5/2)(細砂多く含む)
6　灰黄色細砂(Hue2.5Y7/2)+7の土層
7　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(細砂、地山混じる)
8　浅黄色粘質土(Hue2.5Y7/3)(φ5cmまでの礫、粗砂混じる)
9　褐灰色砂質土(Hue10YR5/1)(炭、土師器含む)
10　にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR6/3)
11　灰黄色砂質土(Hue2.5Y6/2)(3より暗い)
12　灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(やや粘性有り、炭、焼土含む)
13　黄灰色砂質土(Hue2.5Y6/1)(粗砂混じる)
14　暗灰黄色砂質土(Hue2.5Y6/2)(4の土層少し混ざる)
15　灰黄色細砂(Hue2.5Y7/2)
16　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR5/4)(炭、焼土含む)
17　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(やや粘質、炭、焼土含む)
18　12の土層+地山ブロック
19　褐灰色粘質土(Hue10YR4/1)(炭、焼土含む)
20　褐灰色粘質土(Hue10YR4/1)(やや砂質)
21　灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)+地山ブロック
22　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR4/3)(炭、焼土、地山ブロック少し含む)
23　灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)+褐灰色砂質土(Hue10YR6/1)(炭、焼土含む、マンガン沈着)

24　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR5/3)(地山ブロック)
25　暗灰黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)(やや粘性有り、炭、焼土含む)
29　黄灰色砂質土(Hue2.5Y5/1)(粘性有り、炭、焼土含む)
30　にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/4)
31　黄灰色砂質土(Hue2.5Y6/1)+灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(やや粘質、炭、焼土含む)
32　灰黄褐色粘質土(Hue10YR5/2)+灰色土(HueN4/0)(地山ブロック、焼土、土師器片含む)
33　灰色土(HueN4/0)+灰黄褐色粘質土(Hue10YR5/2)(大片の地山ブロック非常に多量に含む)
34　にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR5/3)(地山少量含む)
35　灰色粘質土(HueN4/0)
36　12の土層+37の土層
37　黄橙色粘質土(Hue10YR8/6)
38　暗黄灰色砂質土(Hue2.5Y5/1)(29より粘性強い)
39　灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)+褐灰色砂質土(Hue10YR6/1)(層の上層にマンガン沈着、炭、焼土含む)
40　29の土層+30の土層
41　明黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)(やや粘性有り、炭、焼土含む)
42　暗褐色粘質土(Hue7.5YR3/3)
43　褐灰色粘質土(Hue7.5YR6/1)(やや砂質)
44　褐灰色粘質土(Hue7.5YR5/1)
45　暗灰黄色粘質土(Hue2.5Y4/2)(炭、焼土含む)
46　黒褐色粘質土(Hue10YR3/2)(炭、焼土、地山ブロック含む)
47　灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)(炭、焼土含む)
48　にぶい黄色砂質土(Hue2.5Y6/3)
49　黄灰色粘質土(Hue2.5Y4/1)(やや砂質)
50　灰色の強い灰褐色粘質土

26　灰黄褐色粘質土(Hue10YR6/2)(地山少し含む)
27　明灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(粗砂～φ5cmまでの礫含む)
28　褐灰色砂質土(Hue7.5YR6/1)(やや粘質、炭、焼土含む)
(Hue7.5YR4/2)(やや砂質、炭、焼土含む)
51　褐灰色粘質土(Hue7.5YR4/1)(炭、焼土含む)
52　褐灰色粘質土(Hue7.5YR5/1)(やや砂質)
53　褐灰色粘質土(Hue7.5YR4/1)+地山ブロック(炭、焼土含む)
54　明黄褐色粘質土(Hue10YR6/6)
55　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR5/3)
56　褐灰色粘質土(Hue10YR4/1)
57　39の土層+地山
58　黄褐色粘質土(Hue10YR5/6)+灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)(炭、焼土少し含む)



第７図　調査区断面図(1/100)

物、竪穴建物、竪穴住居、溝、土坑などがある。主な遺構については、時代毎に記述した。その他の遺構の詳細については、遺構一覧表を参照されたい。（第１～３表　遺構一覧表）

（１）古墳時代

ＳＸ32（第８・９図）

上地区北側において検出した古墳である。古墳は、周溝（ＳＤ33）を伴うものとみられ推定径約10mである。周溝は、埋葬主体部の南側に残る溝である。周溝の規模は、長さ4.11m、幅0.64m、深さ0.2mである。周溝は、全体的に弧を描いており、埋土は黒色土である。墓壙の規模は、長さ4.62m、幅1.7m、深さ0.42mである。木棺部分が長さ3.56m、幅0.56m、深さ0.28mである。遺物は、木棺部分から

武具である鉄剣（１）、鉄鉾（２）、工具である槍鉋（３）、砥石（４～６）、不明鉄製品（７）、自然石（８）、祭祀具である勾玉（９）が出土している。古墳の造営時期は、５世紀前葉と思われる。

（２）平安時代

ＳＢ115（第13図）

上地区中央西側において検出した掘立柱建物である。掘立柱建物は、桁行２間（2.4m）、梁行２間以上（2.84m）の側柱建物の東西棟である。建物は、東西で南北に０度の振りである。調査区西側に続いているとみられる。

建物の規模は、それぞれ桁行１＋1.4m、梁行1.6＋1.25mである。柱間寸法は、桁行3.3＋4.5尺、梁行5.5＋４尺と推定される。したがって建物の推定規模は、桁行2.34m以上、梁行2.85m以上となる。

掘立柱建物の時期は、平安時代と推測される。

ＳＨ120（第11図）

下地区南端において検出した竪穴住居である。調査時に検出した規模は、東西2.62m、南北1.71m、深さ0.29mである。竪穴住居の全体の1/4程度を検出している。主柱穴は、１箇所確認した。竪穴住居の内側に壁周溝が巡る。竈跡とみられる赤化面について１箇所確認した。また床面は、貼床が施されるものの一部は地山面が見えており、貼床のない箇所も認められた。貼床には炭・焼土の多く含まれる箇所とそれ以外の箇所に分かれる。遺物は、床面直上からのものであり土師器杯（10・11）、皿（12）が出土している。炉跡とみられる箇所は、竪穴住居の北側中央付近とみられる。炉跡とみられる痕跡は、平面形が長径20㎝前後の長楕円形である。痕跡は赤色に変色し、被熱した後とみられる。竪穴住居の時期は、平安時代中期と推測される。

ＳＤ30

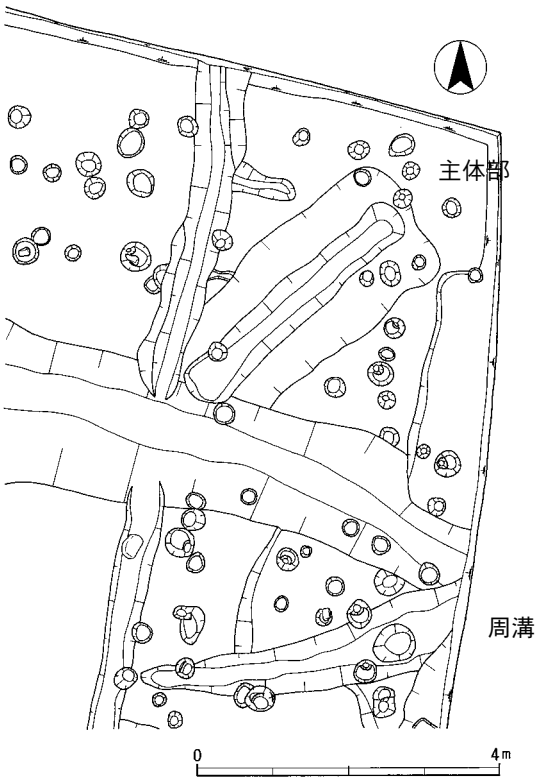
上地区中央を南北方向に縦断する溝である。調査区南側では、調査区自体が狭小になるため安全管理上、表土掘削を整地層面で止めたため、南側の溝の先は不明である。調査終了時、部分的に重機によって確認したところ南側に伸びていることが判明した。

溝の規模は、調査時の検出長11.64m、幅約0.47m、深さ約0.27mである。遺物は、出土していない。

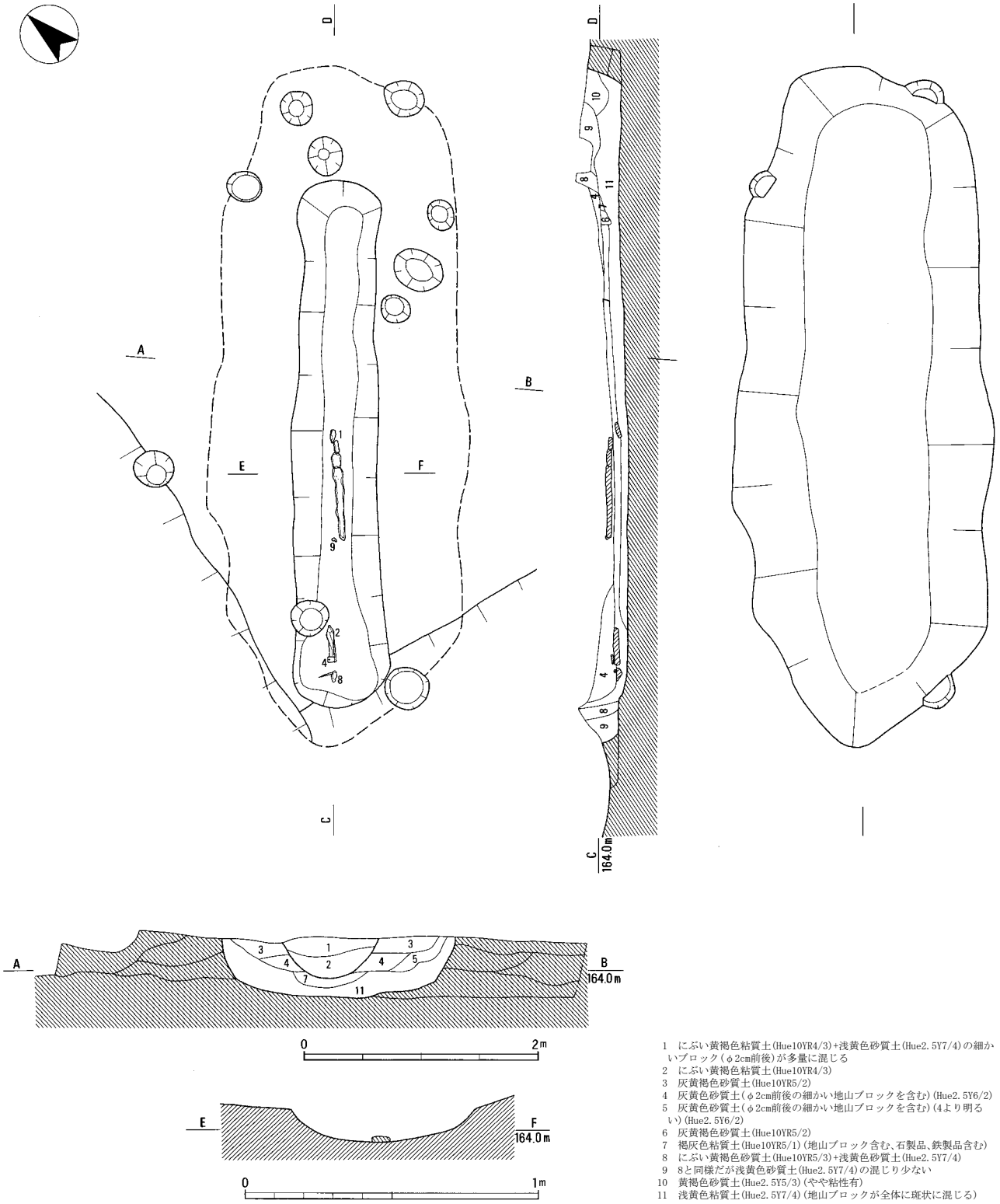
ＳＤ30の新旧関係は、ＳＨ41より古く、瓦器椀が出土している柱穴Ｃ２区Pit５より古いため平安時代の時期と推測した。

ＳＺ90（第12図）

下地区中央東側で検出した土坑状の遺構である。平面プランは、長方形である。遺構の規模は、長辺4.26m、幅2.76mである。遺構検出時、表面に炭が



第８図　ＳＸ32平面図(1/100)

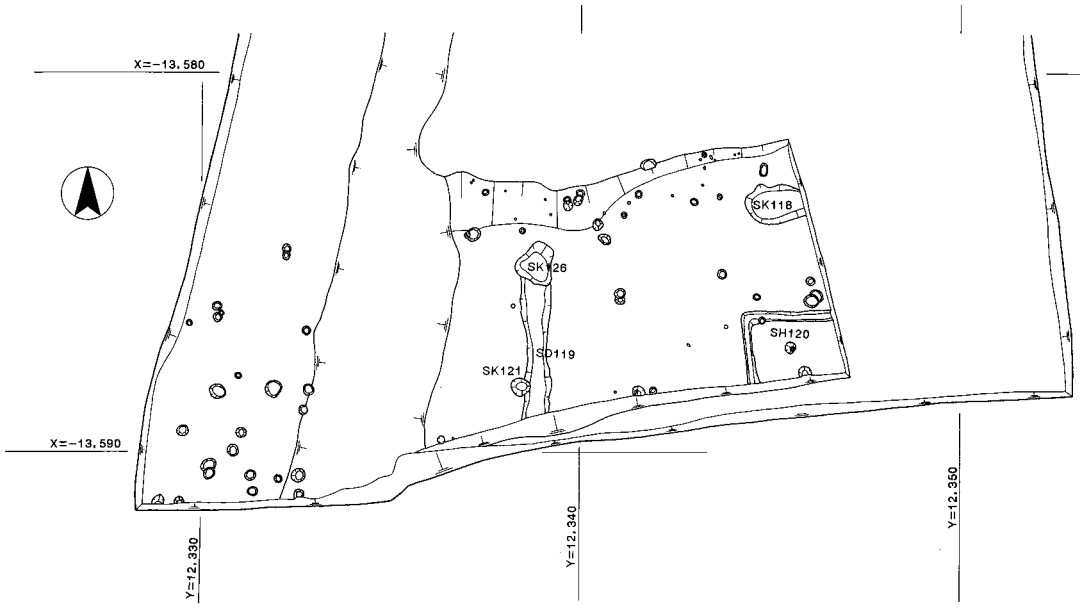


1　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR4/3)+浅黄色砂質土(Hue2.5Y7/4)の細かいブロック(φ2cm前後)が多量に混じる
2　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR4/3)
3　灰黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)
4　灰黄色砂質土(φ2cm前後の細かい地山ブロックを含む)(Hue2.5Y6/2)
5　灰黄色砂質土(φ2cm前後の細かい地山ブロックを含む)(4より明るい)(Hue2.5Y6/2)
6　灰黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)
7　褐灰色粘質土(Hue10YR5/1)(地山ブロック含む、石製品、鉄製品含む)
8　にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR5/3)+浅黄色砂質土(Hue2.5Y7/4)
9　8と同様だが浅黄色砂質土(Hue2.5Y7/4)の混じり少ない
10　黄褐色砂質土(Hue2.5Y5/3)(やや粘性有)
11　浅黄色粘質土(Hue2.5Y7/4)(地山ブロックが全体に斑状に混じる)

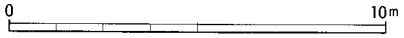
第９図　ＳＸ32平面図・断面図(1/20、1/50)

見えており、調査時は竪穴住居と考えていた。中央部に礫層が長楕円形状に堆積し、礫層のすぐ下に炭層が堆積していた。礫層・炭層部分直下から溝が北へ伸び、時計回りに外周部分にかけて雷文状に溝が巡る。礫層・炭層の四周部には柱穴が存在しており何らかの覆屋的なものか周囲を取り囲むようなものが存在していた可能性がある。礫層東側中央付近には、人頭大の石が置かれていた。

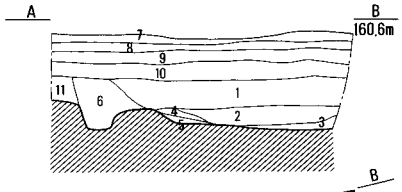
また、南側の東西方向の溝（ＳＤ91）は、中央部の溝から周る溝につながる可能性がある。溝の規模

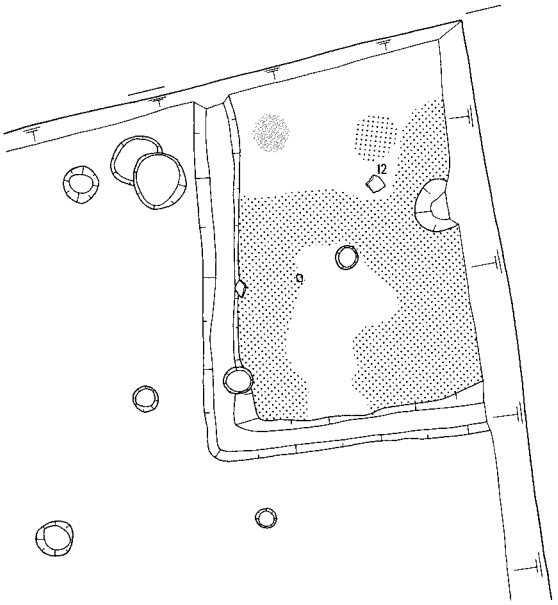


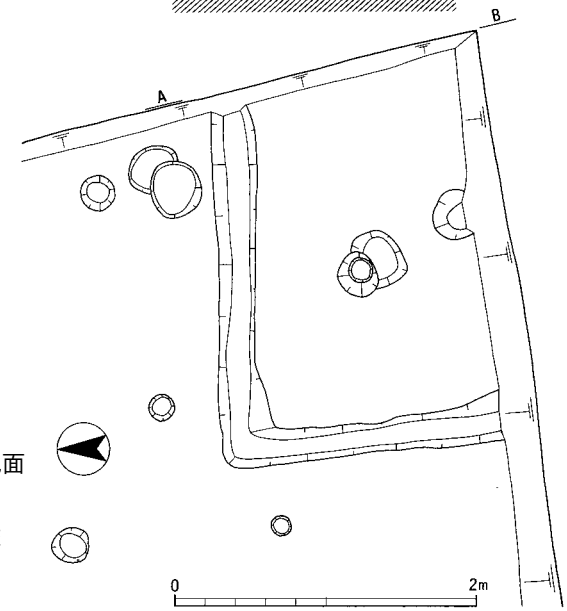
第10図　下地区下層遺構平面図(1/200)



1　暗灰黄色粘質土(Hue2.5YR4/2)(炭、焼土含む、やや砂質)
2　黒褐色粘質土(Hue10YR3/2)(炭、焼土、地山ブロック含む、ややしまっている)
3　黄褐色粘質土(Hue10YR5/6)(地山)+灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)(炭、焼土混じる)
4　暗灰黄粘質土(Hue2.5Y5/2)+褐灰色粘質土(Hue10YR5/1)(炭、焼土混じる)
5　灰黄褐色粘質土(Hue10YR6/2)(炭、焼土多量に含む)
6　灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)
7　黄灰色砂質土(Hue2.5Y5/1)(炭、焼土含む)+にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/4)
8　にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/4)
9　灰黄褐色よりやや明るい灰黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)(やや粘性有り、炭、焼土含む)
10　灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)+褐灰色砂質土(Hue10YR6/1)
11　黄褐色粘質土(Hue10YR5/6)(地山)+灰褐色粘質土(Hue7.5YR4/2)(炭、焼土含む)



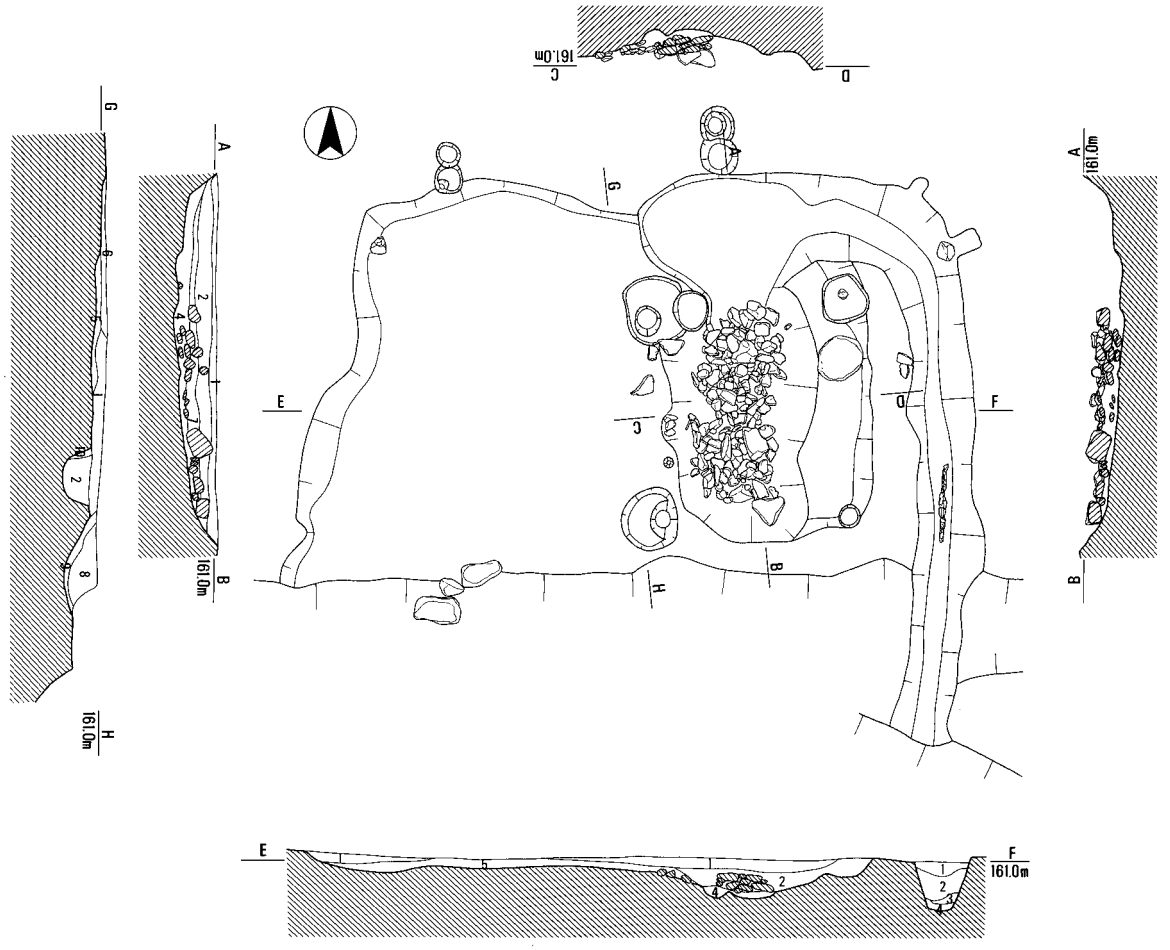




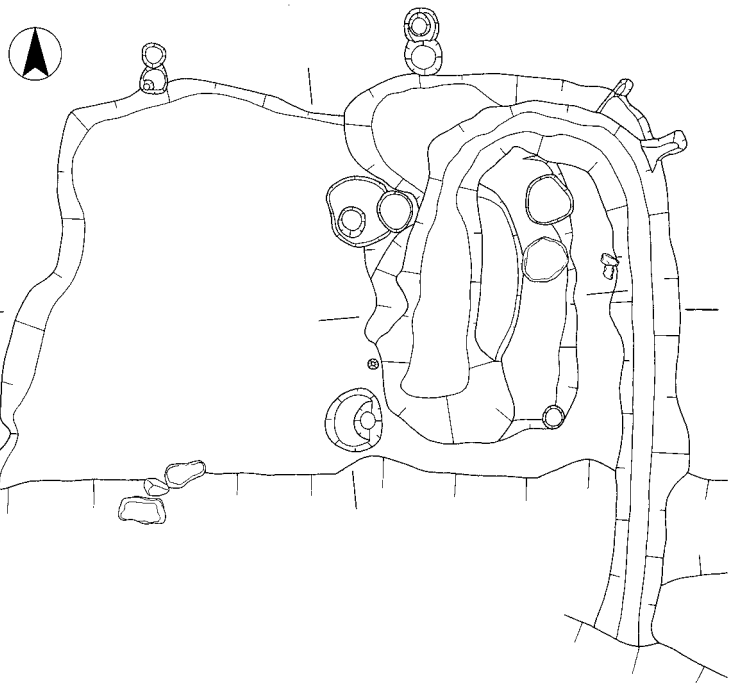
赤化面

貼床

第11図　ＳＨ120平面図・断面図(1/50)

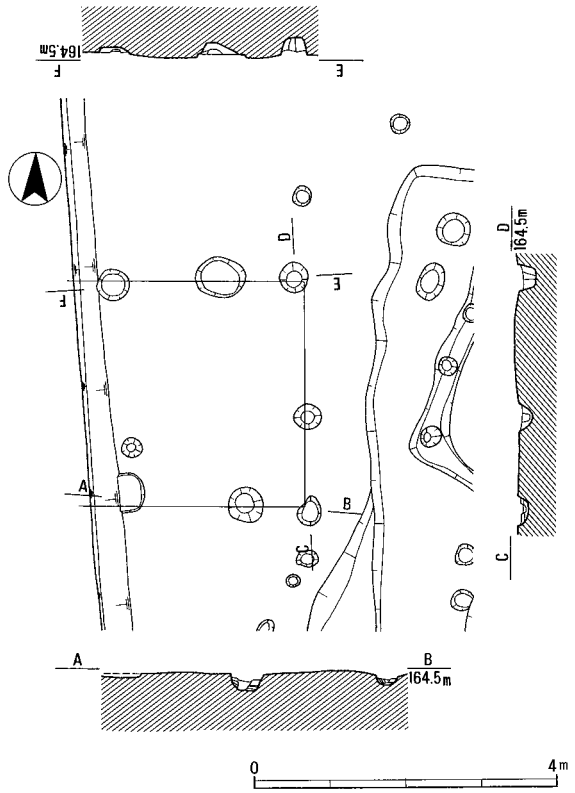


1　灰黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)
2　灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(炭、焼土含む)
3　灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(炭、焼土、地山ブロック含む)
4　黒色炭層(Hue10YR7/1)の集積層
5　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(大片の地山ブロック含む)
6　灰黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)(大片の炭の塊、焼土を多量に含む)
7　灰黄色粘質土(Hue2.5Y6/2)(粘性強い)
8　灰黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)(1よりも明るい)(炭、焼土含む)
9　褐灰色粘質土(Hue10YR5/1)
10　灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(2よりも暗く、粘性有り)

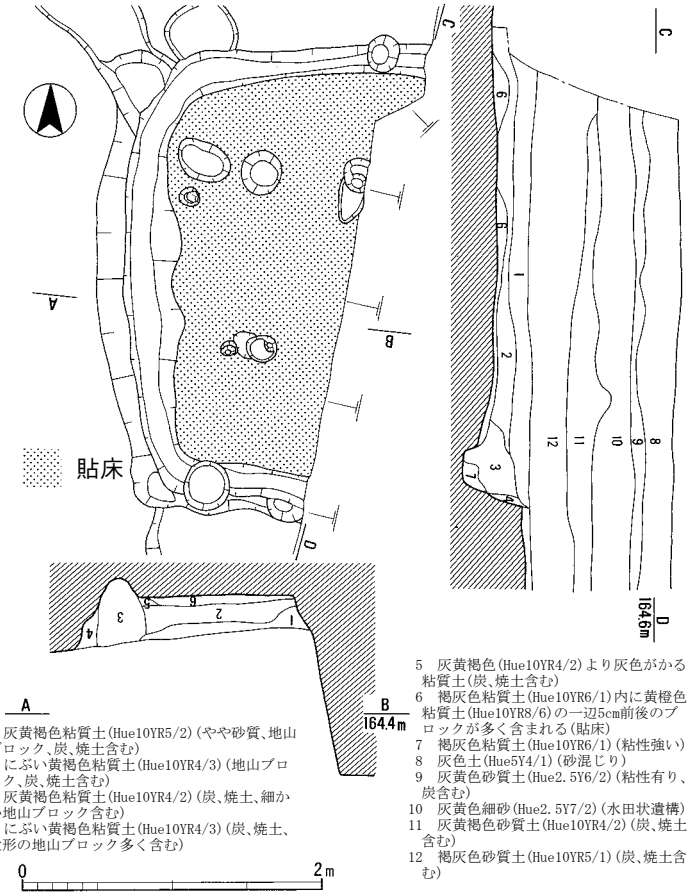


0　2m

第12図　ＳＺ90平面図・断面図(1/50)



第13図　ＳＢ115平面図・断面図(1/100)



第14図　ＳＨ40平面図・断面図(1/50)

は、長さ3.8m、幅0.46m、深さ0.15mである。この溝は、後世の削平を受け非常に浅い。遺物はＳＺ90から土師器皿（13）、鍋（15）が、ＳＤ91からは土師器皿細片などが出土している。

さらに、遺構の北側には東西方向に横断する溝があり、この遺構の外周を巡る溝とみられる。溝は東側の調査区外まで伸びている。溝の規模は、長さ３m、幅0.2m、深さ0.06mである。

この遺構は、昭和43～45年にかけて東名阪自動車道の発掘調査において東庄内Ｂ遺跡で確認された中世火葬場址と同様のケースか礫層の下に炭層があることとその下に南北方向の溝があることから、水の濾過のための施設とも想定される。遺構の時期は平安時代末から中世初頭にかけてと推測される。

（３）鎌倉～室町時代

ＳＨ40（第14図）

上地区中央東壁付近で検出した竪穴住居である。竪穴住居の規模は、長辺3.17m、短辺1.9m、深さ0.34mである。短辺側は、調査区東壁内である。竪穴住居の内側には、壁周溝が巡る。また、床面には地山土混じりの褐灰色粘質土層の硬化面とみられる痕跡を留める。北西側に溝の痕跡があり何らかの遺構が付属していたとみられる。遺物には、土師器皿（16～19）、瓦器椀（20）、瓦質土器鍋（21）、羽釜（22）が出土している。遺構の時期は、13世紀前半から中葉にかけてとみられる。

ＳＨ41（第15図）

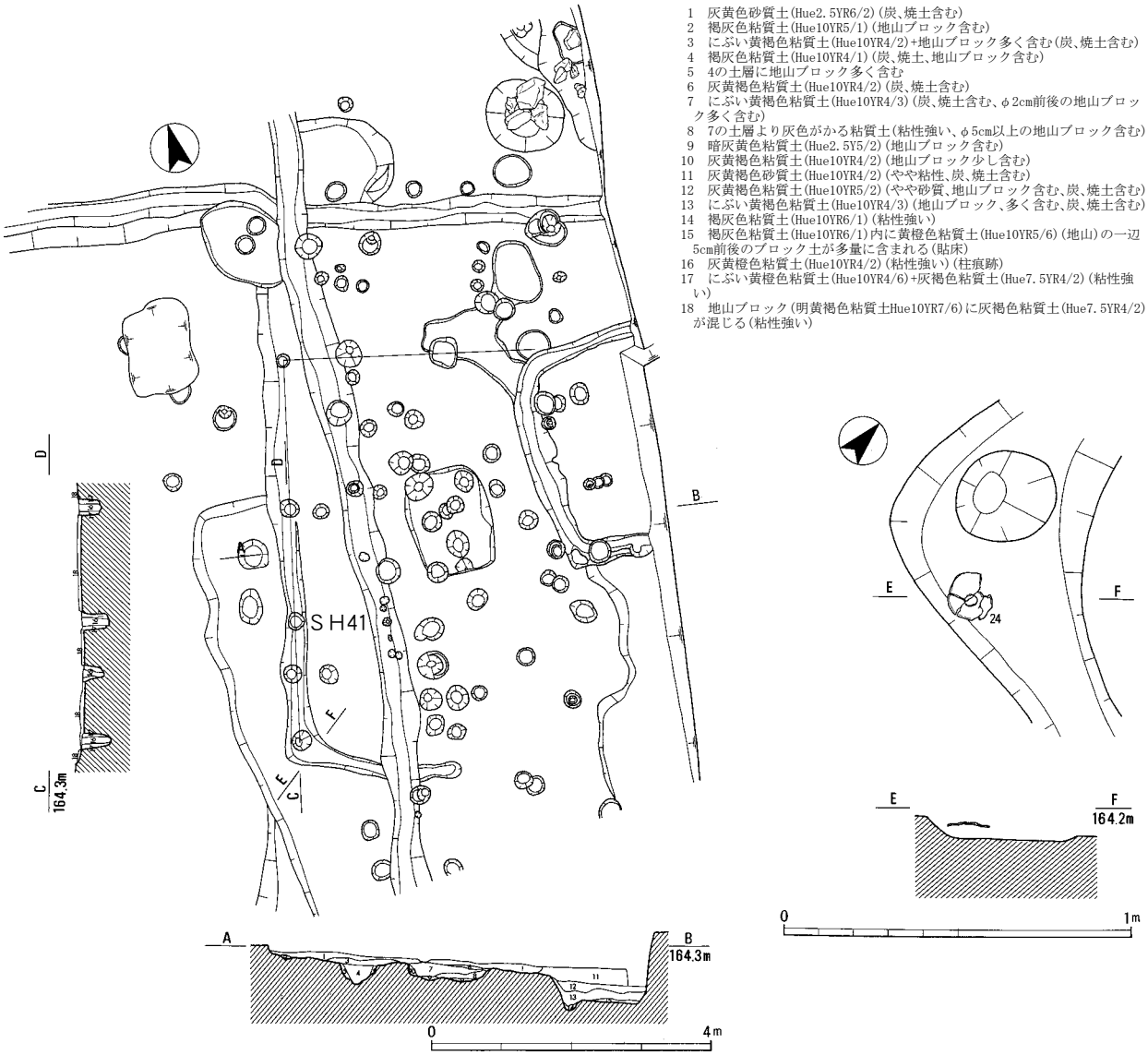
上地区中央付近で検出した竪穴建物である。平面プランは、ほぼ長方形である。遺構の規模は、長辺5.3

m、短辺3.2m、深さ0.15mである。前述したＳＺ31と同様の遺構とみられる。壁周溝（ＳＤ42）が巡っており、溝内にピットが確認できた。溝の規模は、東西部分で長さ2.38m、幅0.46m、深さ0.17m、南北方向で長さ3.65m、幅0.43m、深さ0.17mである。この建物も遺物に土塊が含まれているため土壁の建物である可能性が高い。竪穴建物か大壁造り建物と推定される。遺物は、瓦器椀（24）が出土しているため13世紀中頃とみられる。

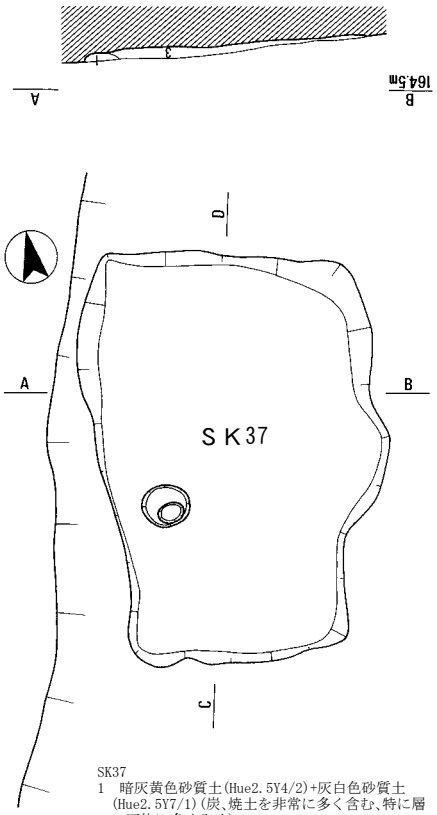
ＳＨ31（第22図）

上地区北側に位置している竪穴建物である。遺構の規模は、長辺8.48m・短辺3.87m・深さ0.25mである。平面プランは、長方形である。調査時は、竪穴住居の重複もしくは掘立柱建物の南東隅土坑ではないかと当初は想定した。

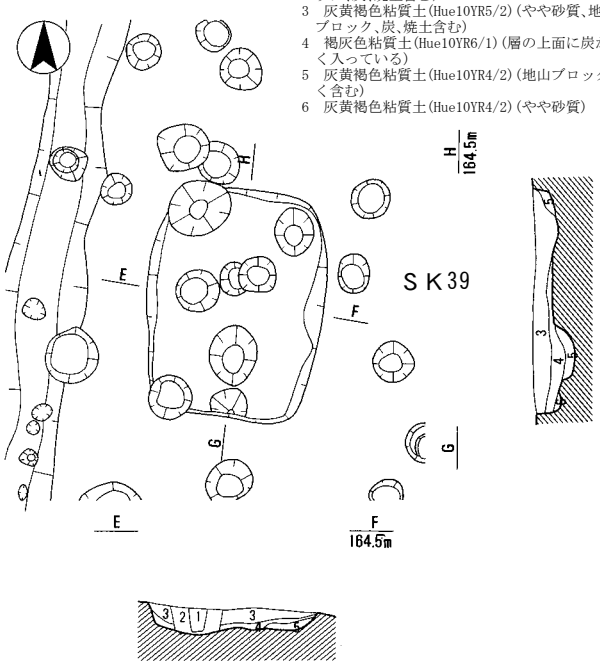
しかしながら、遺構の西壁付近には、石列が並んでいた。また西壁から東壁にかけて検出した遺構の肩に沿って凹凸面が認められ、本来は全周していた可能性が考えられる。石列の下には溝（SD34）が掘削されており壁周溝として遺構内を巡り、排水溝として遺構の外側（西側）に向かって掘削されている。床面は、遺構の南東隅部分で排水溝に向かって僅かながら掘り窪められた痕跡が認められる。住居内からの排水の役割を果たしていたとみられる。溝の規模は、東西部分が長さ14.9m、幅0.5m、深さ0.23m、南北部分が長さ3.35m、幅0.34m、深さ0.23m



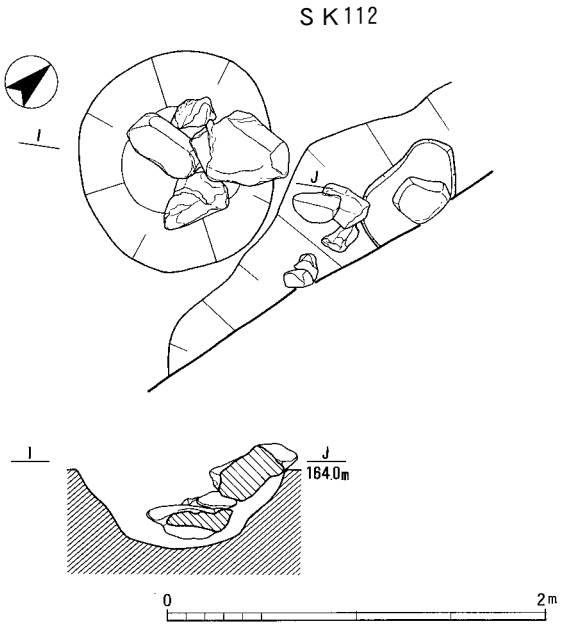
第15図　ＳＨ41平面図・断面図(1/100)・遺物出土状況図(1/20)

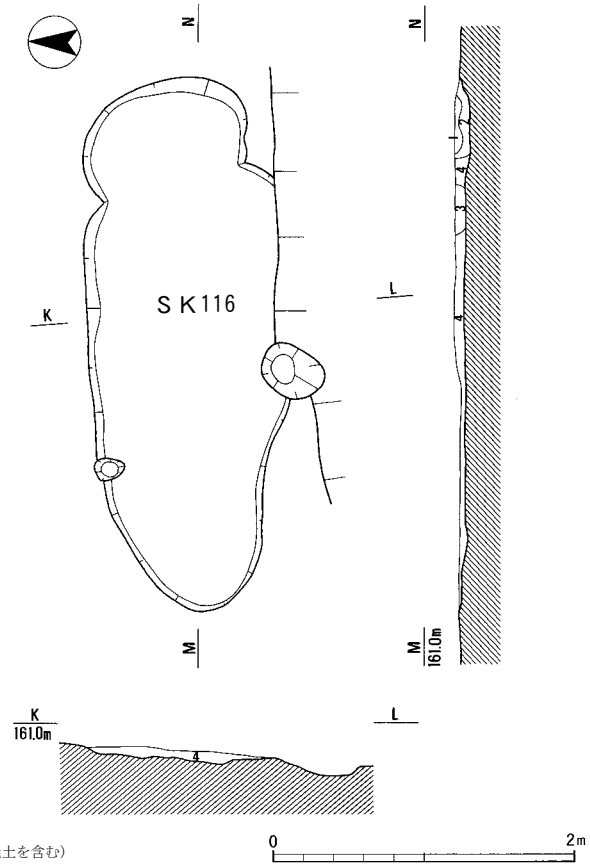


SK37
1　暗灰黄色砂質土(Hue2.5Y4/2)+灰白色砂質土(Hue2.5Y7/1)(炭、焼土を非常に多く含む、特に層の下位に多く入る)
2　黄灰色砂質土(Hue2.5Y6/2)(炭、焼土含む)
3　にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR5/3)(やや粘質、地山がブロック状に混じる)



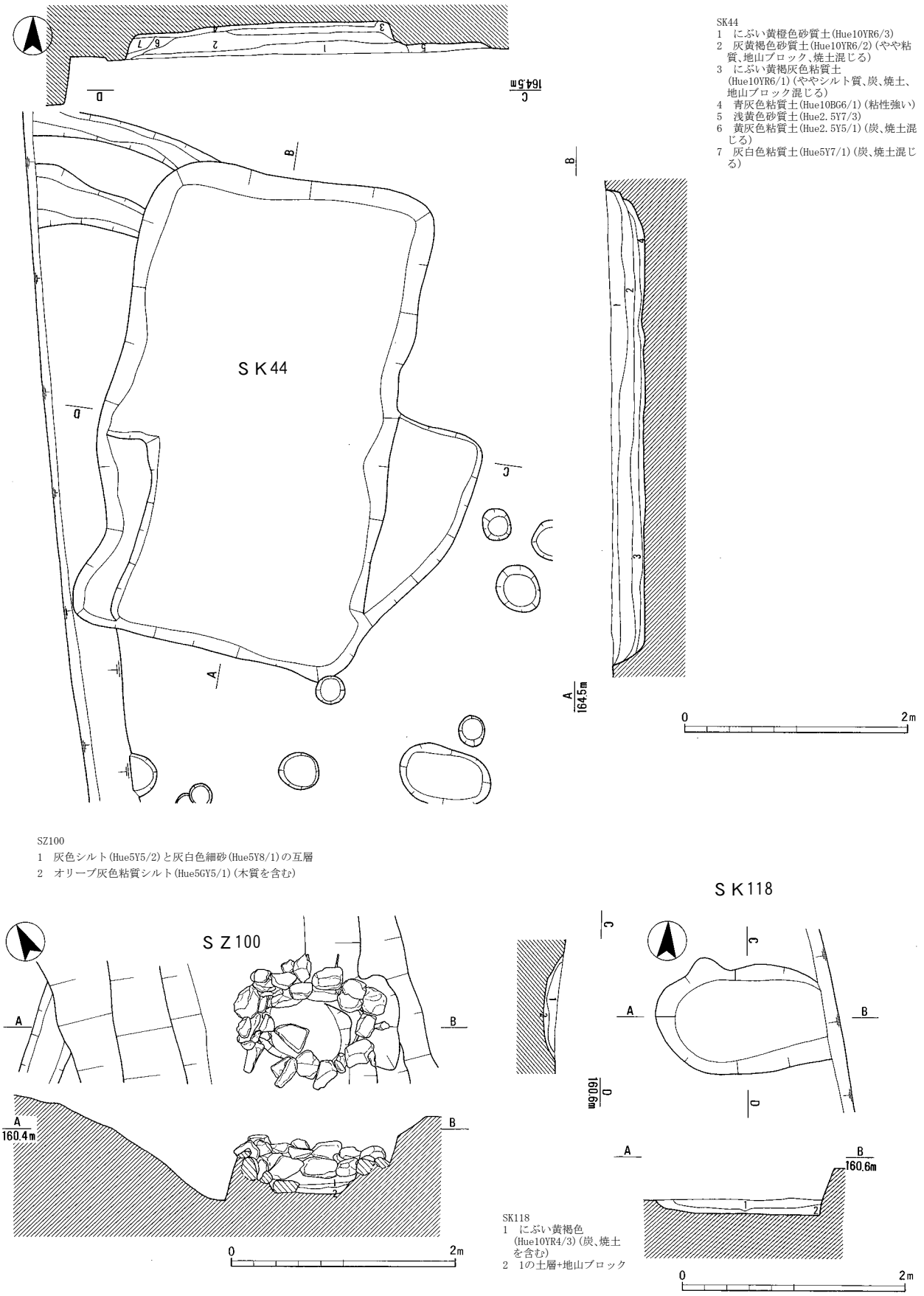
SK39
1　褐灰色粘質土(Hue10YR5/1)
2　灰黄褐色粘質土(Hue10YR5/2)(細かい地山ブロック、炭、焼土含む)
3　灰黄褐色粘質土(Hue10YR5/2)(やや砂質、地山ブロック、炭、焼土含む)
4　褐灰色粘質土(Hue10YR6/1)(層の上面に炭が多く入っている)
5　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(地山ブロック多く含む)
6　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(やや砂質)





SK116
1　にぶい黄色(Hue2.5Y6/3)(炭、焼土を含む)
2　黒色炭層(Hue2.5Y2/1)
3　灰黄褐色砂質土(Hue10YR5/2)(粘性少し有り、炭、焼土含む)
4　灰黄色砂質土(Hue2.5Y6/2)(炭、焼土、地山ブロック含む)

第16図　ＳＫ37・39・112・116平面図・断面図(1/50、ＳＫ112は1/40)



第17図　ＳＫ44・118、ＳＺ100平面図・断面図(1/50)

である。北側の壁周溝は、近世から近代の溝によって削平を受けて一部なくなっている。西側の壁周溝はＳＤ30と重複していたが平面及び断面観察の結果、存在を確認できなかった。そのため壁周溝は、全周していなかったと推測される。床面には、貼床とみられる硬化面が認められた。また、遺物に土塊が含まれているため土壁の建物である可能性が高い。建物は、竪穴建物か大壁造り建物と推定される。遺物は、陶器皿（25）、擂鉢（26）、釘（27）、刀子（28）、土塊などが出土している。遺構の時期は、遺物から室町時代末期頃と推測される。

ＳＢ122（第23・24図）

下地区中央から南端に位置している掘立柱建物である。掘立柱建物の規模は、桁行４間（9.09m）×梁行２間（4.24m）の建物で東西棟である。建物は、東西で南北に７度の振りである。

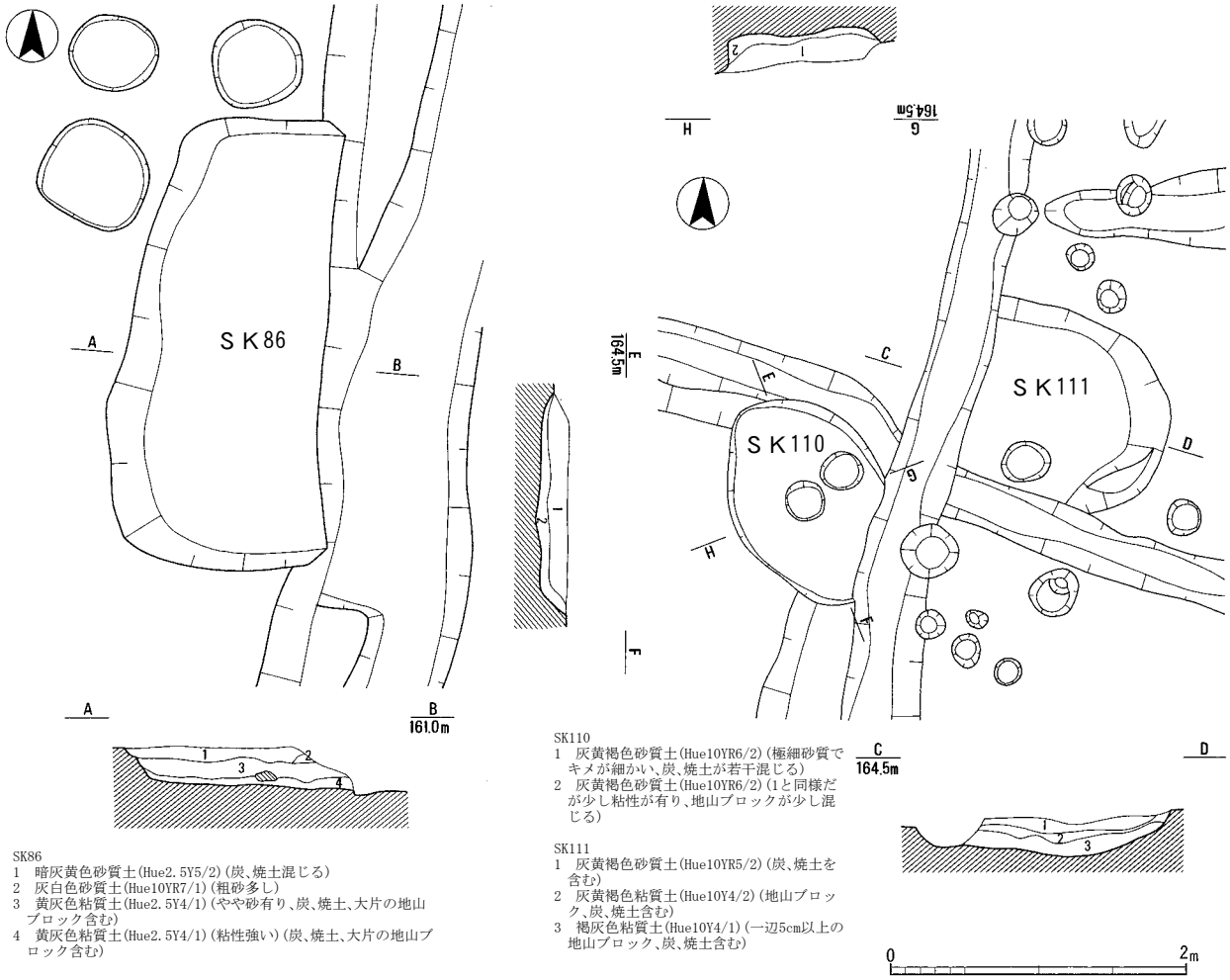
建物の規模は、桁行4.2＋2.1＋３m、梁行3.1＋1.2mで柱間寸法は、それぞれ桁行14、７、10尺、梁行10、４尺と推定される。したがって建物の推定規模は、桁行9.3m、梁行4.2mとなる。掘立柱建物として考慮したものの、やや歪であり疑問の残る余地もある。15世紀後葉であろうか。

ＳＺ100（第17図）

下地区南側のＳＤ63内で検出した石組状の遺構である。石組の規模は、長辺1.47m、短辺1.19m、高さ0.7mである。この遺構は、溝が埋没する前に組まれたものとみられる。集水用に組まれたものか井戸底にあたるものかと思われる。遺構の時期は、ＳＤ63と同時期もしくは古い時期とみられる。

ＳＫ37（第16図）

上地区北側において検出した土坑である。土坑の規模は、長辺2.21m、短辺1.76m、深さ0.16mである。平面プランは長方形である。埋土は、炭や焼土を多量に含んでいた。遺構の時期は、不明であるが



第18図　ＳＫ86・110・111平面図・断面図(1/50)

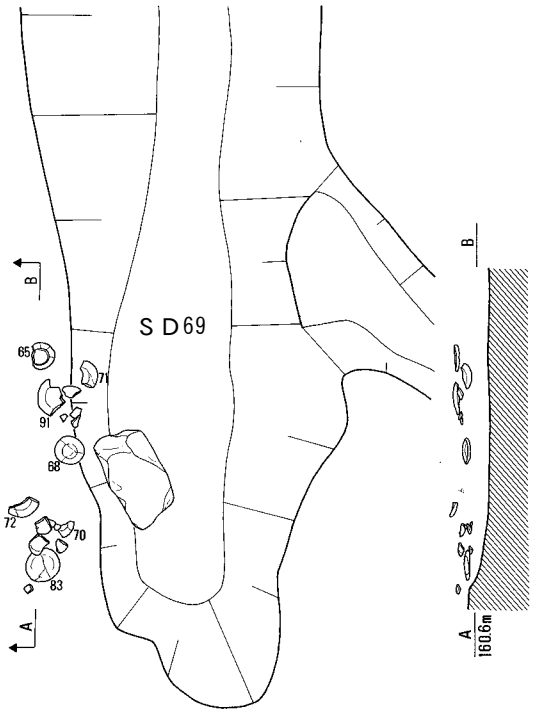
室町末期頃ではなかろうか。

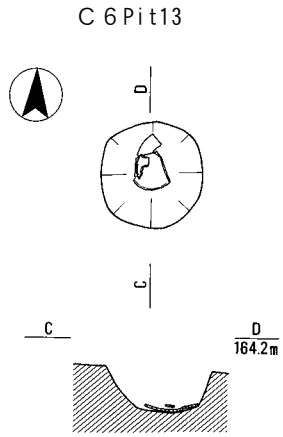
ＳＫ39（第16図）

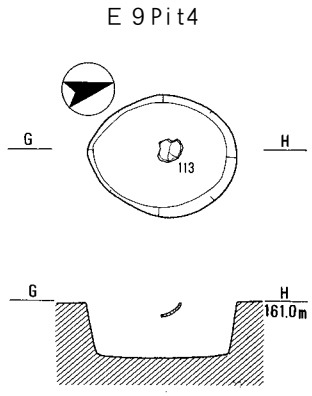
上地区中央付近において検出した土坑である。規模は、長さ13.7m、幅2.14m、深さ0.36mである。平面プランは、長方形である。埋土は、炭などが含まれている。土坑内には、ピットが確認されている。遺物はピットから出土しており、土師器皿（104～105）、瓦器椀（106・107）がある。遺構の時期は、13世紀代とみられる。

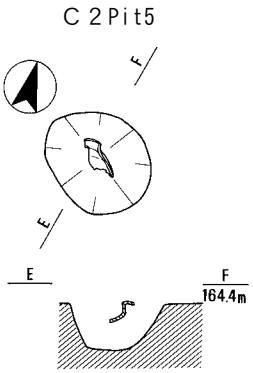
ＳＫ44（第17図）

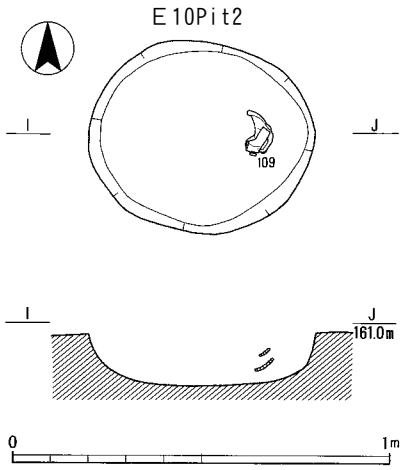
上地区南側において検出した土坑である。土坑の規模は、長辺4.25m、短辺3.46m、深さ0.39mである。平面プランが長方形で、浅い土坑である。埋土は、炭や焼土が多く含まれていた。遺物には、土師器皿（30）、羽釜（31）、白磁、青磁、土塊がある。土坑は、中世墓の可能性がある。遺物の時期から13世紀代と思われる。



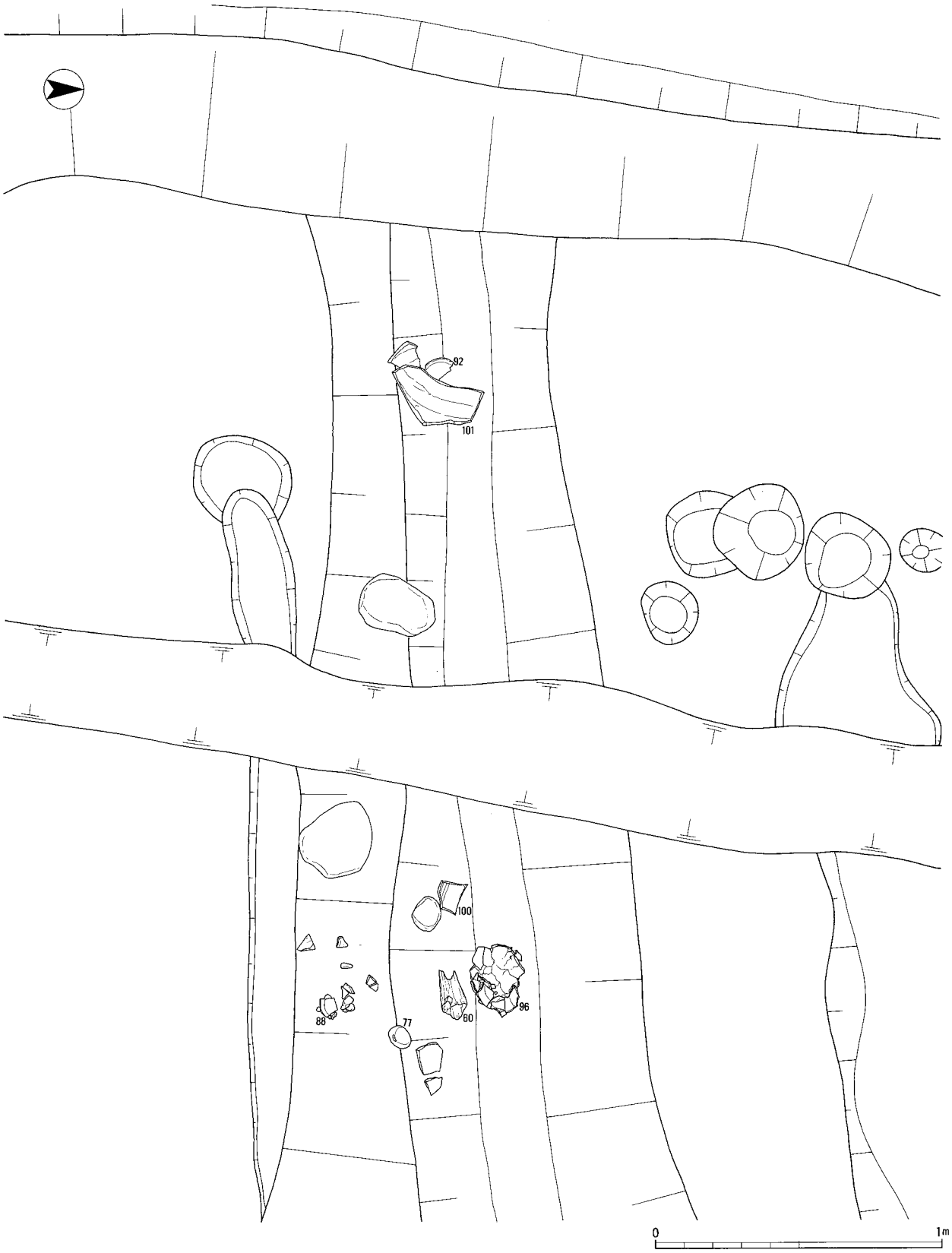




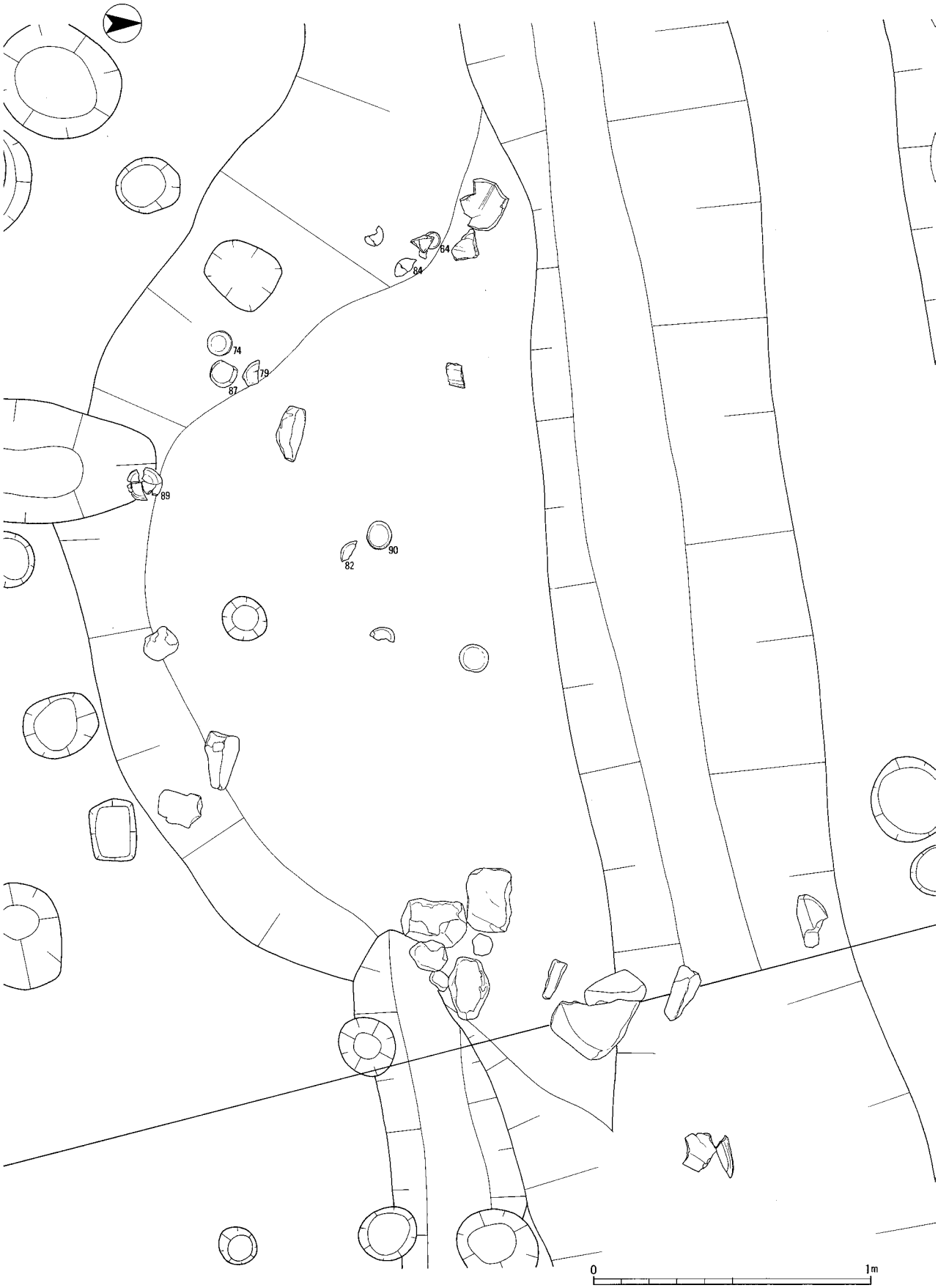




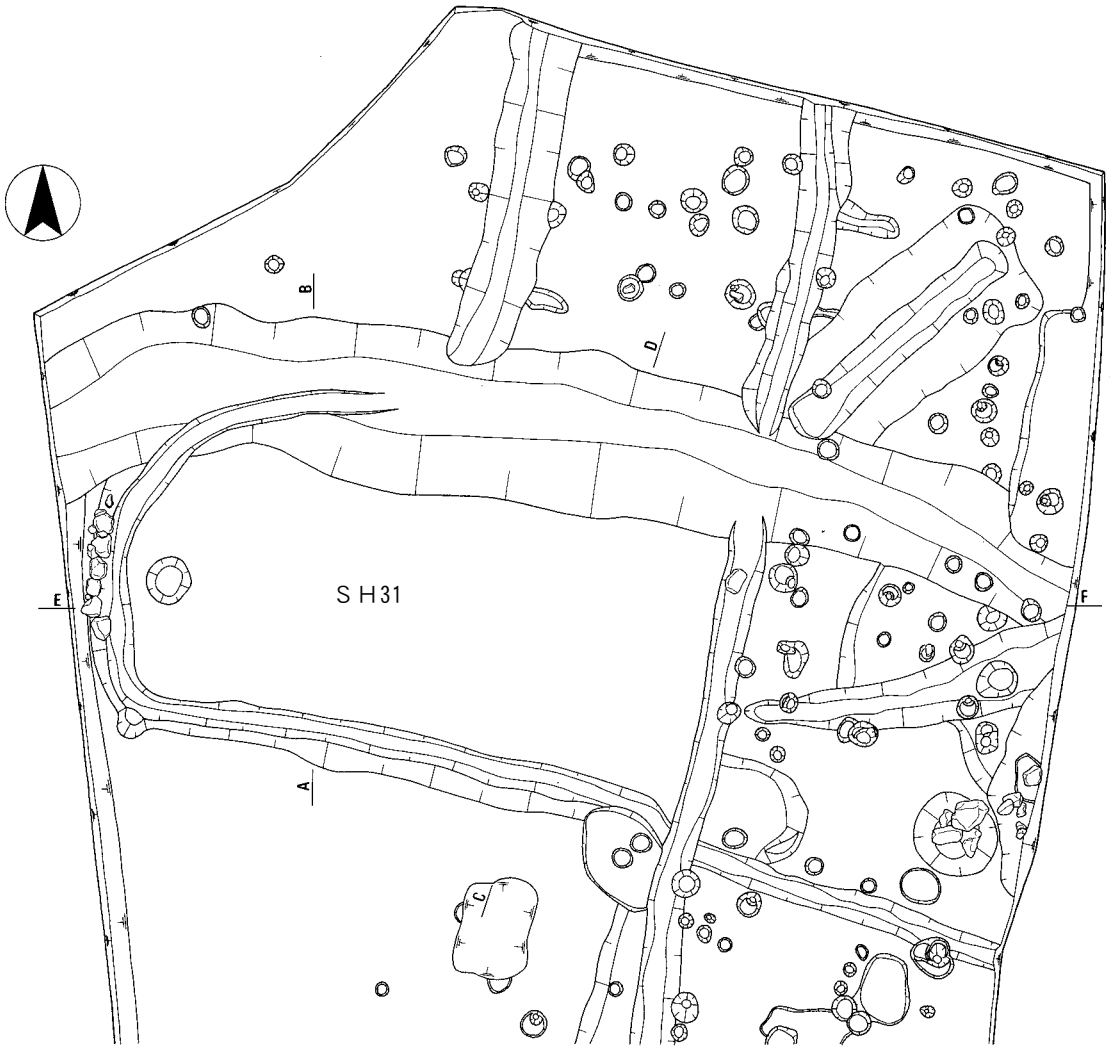
第19図　ＳＤ69、Ｃ６Pit13、Ｃ２Pit４、Ｅ９Pit４、Ｅ10Pit２平面図・断面図(1/20)

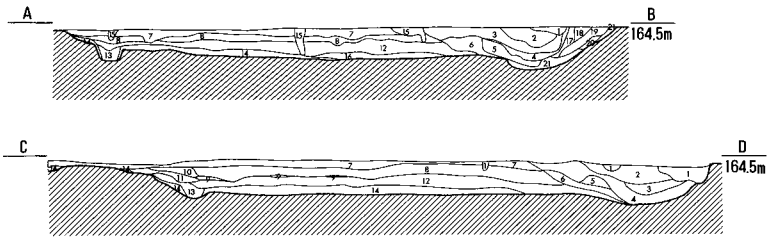


第20図　ＳＤ65遺物出土状況図(1/20)

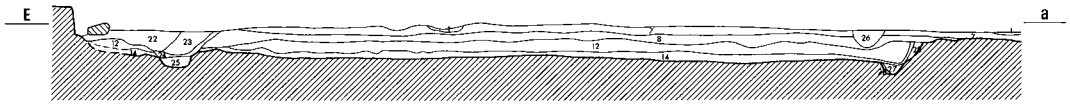


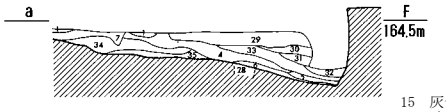
第21図　ＳＤ65遺物出土状況図(1/20)





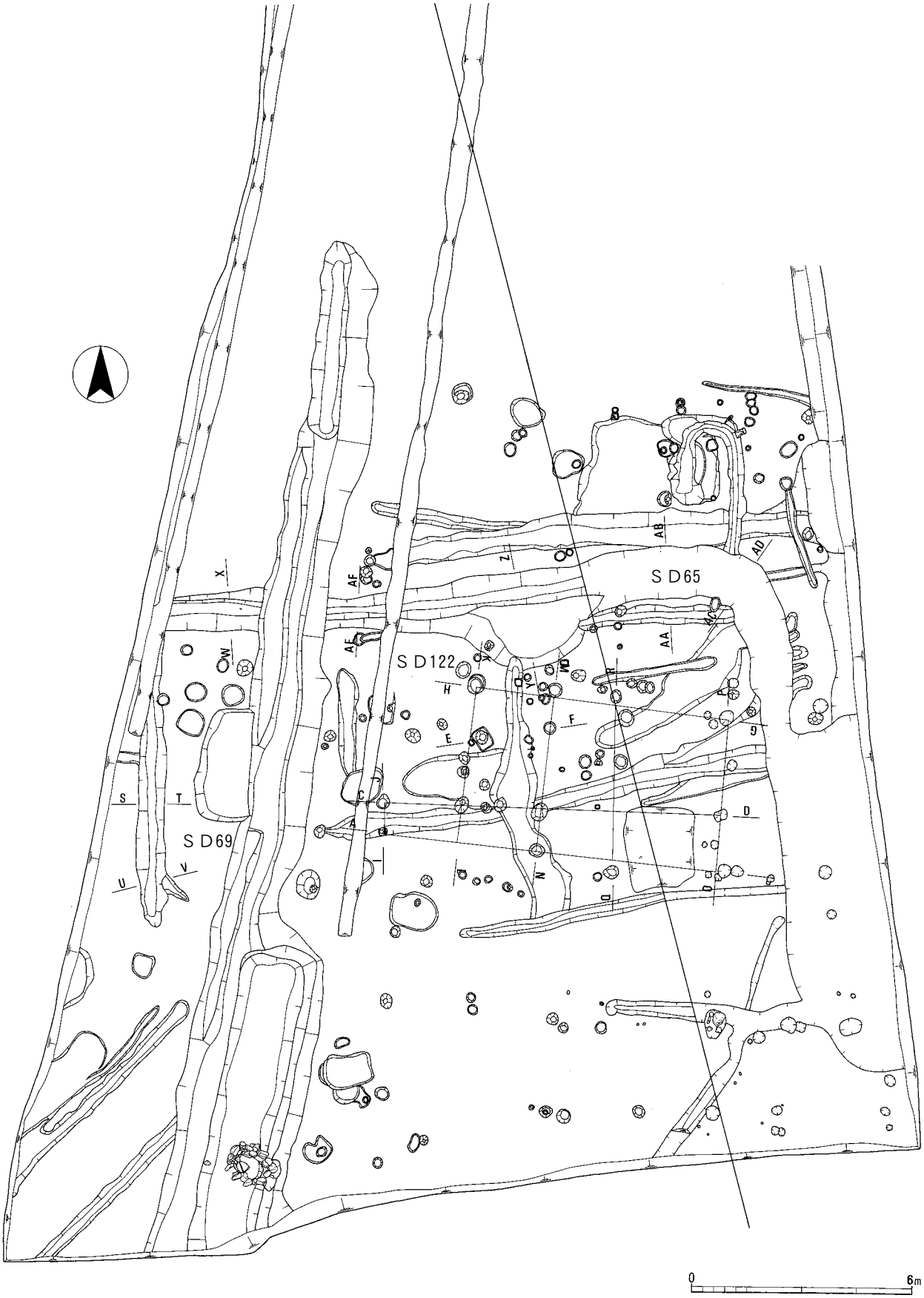
1　灰色砂質土(Hue5Y6/1)
2　淡黄色砂質土(Hue2.5YR8/4)(細砂質)(にぶい褐色粘質土(Hue7.5YR5/4)がブロック状に混じる、焼土含む)
3　浅黄色砂質土(Hue2.5Y7/3)(細砂質)
4　灰黄色砂質土(Hue2.5Y6/1)(粘性有り、灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)混じる)
5　4の土層+6の土層
6　灰白色細砂(Hue5Y8/2)(灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)混じる)
7　淡黄色砂質土(Hue2.5Y8/2)+黄灰色砂質土(Hue2.5Y6/1)(炭、焼土含む)





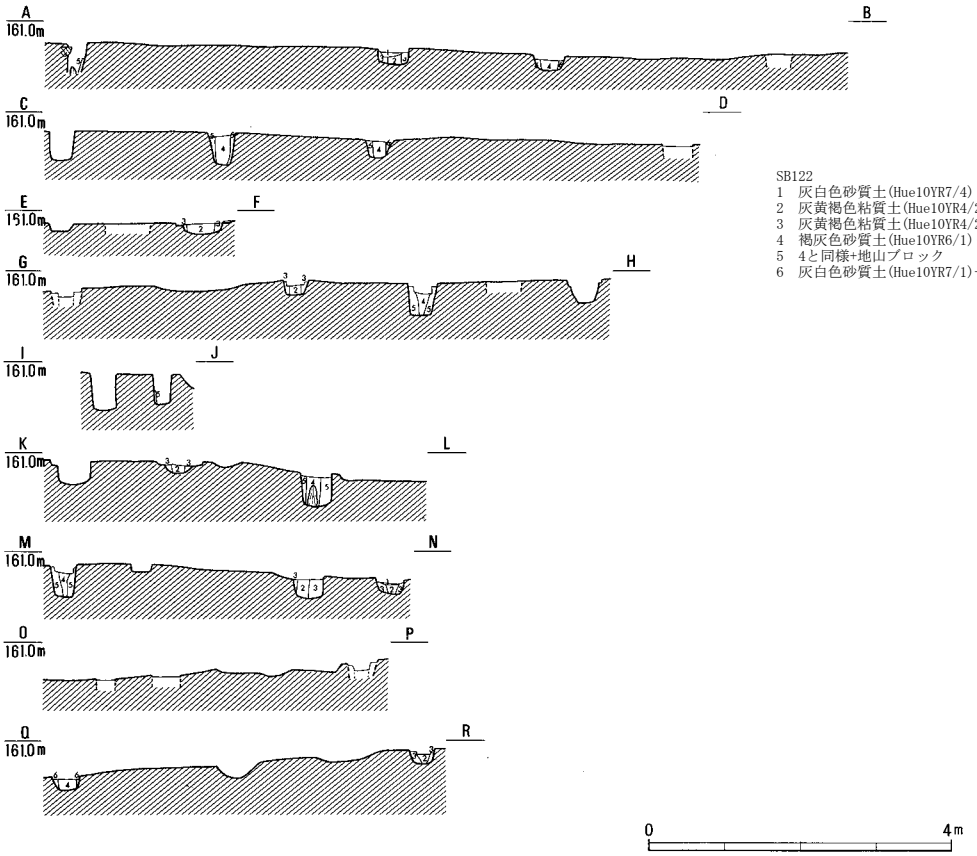
8　12の土層+黄灰色砂質土(Hue2.5Y6/1)
9　浅黄色細砂(Hue2.5Y7/3)
10　12の土層+黄灰色砂質土(Hue2.5Y6/1)(8より黄灰色砂質土の混じり多い)
11　黄灰砂質土(Hue10YR4/1)(炭、焼土含む)
12　暗灰黄色砂質土(Hue2.5YR5/2)(しまりがない、炭、焼土含む)
13　黒褐色粘質土(Hue10YR3/2)+地山ブロック(φ2cm以上の大きさのものを含む)
14　黒褐色粘質土(Hue10YR2/2)(粘性が強い、炭、焼土を多量に含む)(貼床)
15　灰色砂質土(Hue2.5Y8/2)
16　暗褐色砂質土(Hue10YR3/3)(地山混ざり、炭、焼土含む)
17　にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR7/2)(18より灰色がかる)
18　にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR7/3)
19　暗灰黄色砂質土(Hue2.5Y5/2)(少し粘性有り)
20　黄褐色砂質土(Hue2.5Y5/3)
21　にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR6/3)(少し粘性有り、地山ブロック多く含む)
22　褐灰色砂質土(Hue10YR4/1)+にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR4/1)(炭、焼土含む)
23　暗褐色砂質土(Hue10YR3/3)(やや粘質有り、炭、焼土含む)
24　暗褐色砂質土(Hue10YR3/3)+灰白色細砂(Hue7.5Y7/2)
25　灰白色細砂(Hue7.5Y7/2)
26　灰黄色砂質土(Hue2.5Y6/2)(地山ブロック、炭含む)
27　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(炭、焼土含む)
28　27の土層+地山ブロック
29　灰黄色細砂(Hue2.5Y7/2)(水田状遺構埋土)
30　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR4/3)+地山ブロック
31　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR4/3)+にぶい黄色砂質土(Hue2.5Y6/3)
32　33と同じ土色だが、にぶい黄色砂質土(Hue2.5Y6/3)の割合が高い、焼土含む
33　暗灰黄色砂質土(Hue2.5Y5/2)+にぶい黄色砂質土(Hue2.5Y6/3)(炭、焼土含む)
34　褐灰色砂質土(Hue10YR6/1)+にぶい黄橙色砂質土(Hue10YR6/4)(炭、焼土含む)
35　灰黄褐色砂質土(Hue10YR4/2)(炭、焼土含む)

第22図　ＳＨ31平面図・断面図(1/100)



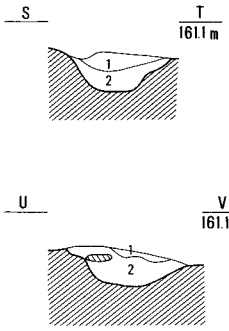
第23図　ＳＢ122・ＳＤ65・69平面図(1/150)

SB122

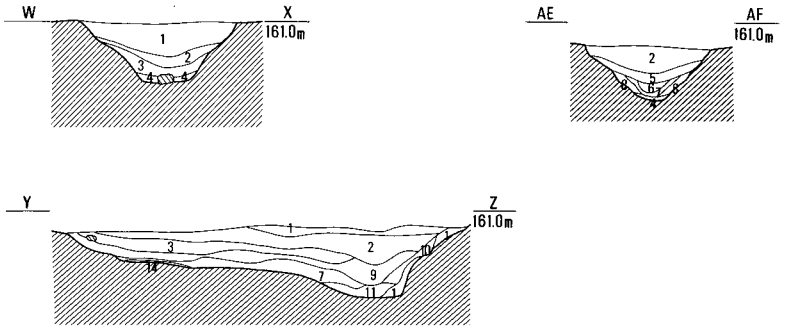


SB122
1　灰白色砂質土(Hue10YR7/4)
2　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(炭、焼土含む)
3　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)+地山ブロック
4　褐灰色砂質土(Hue10YR6/1)(粘性有り、粗砂混じる)
5　4と同様+地山ブロック
6　灰白色砂質土(Hue10YR7/1)+地山ブロック

SD69

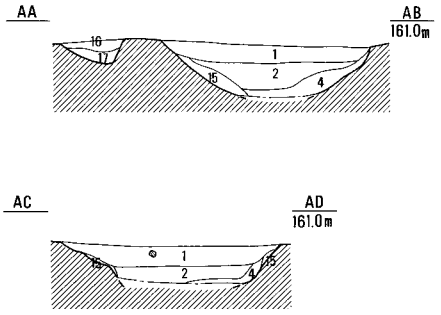


SD65



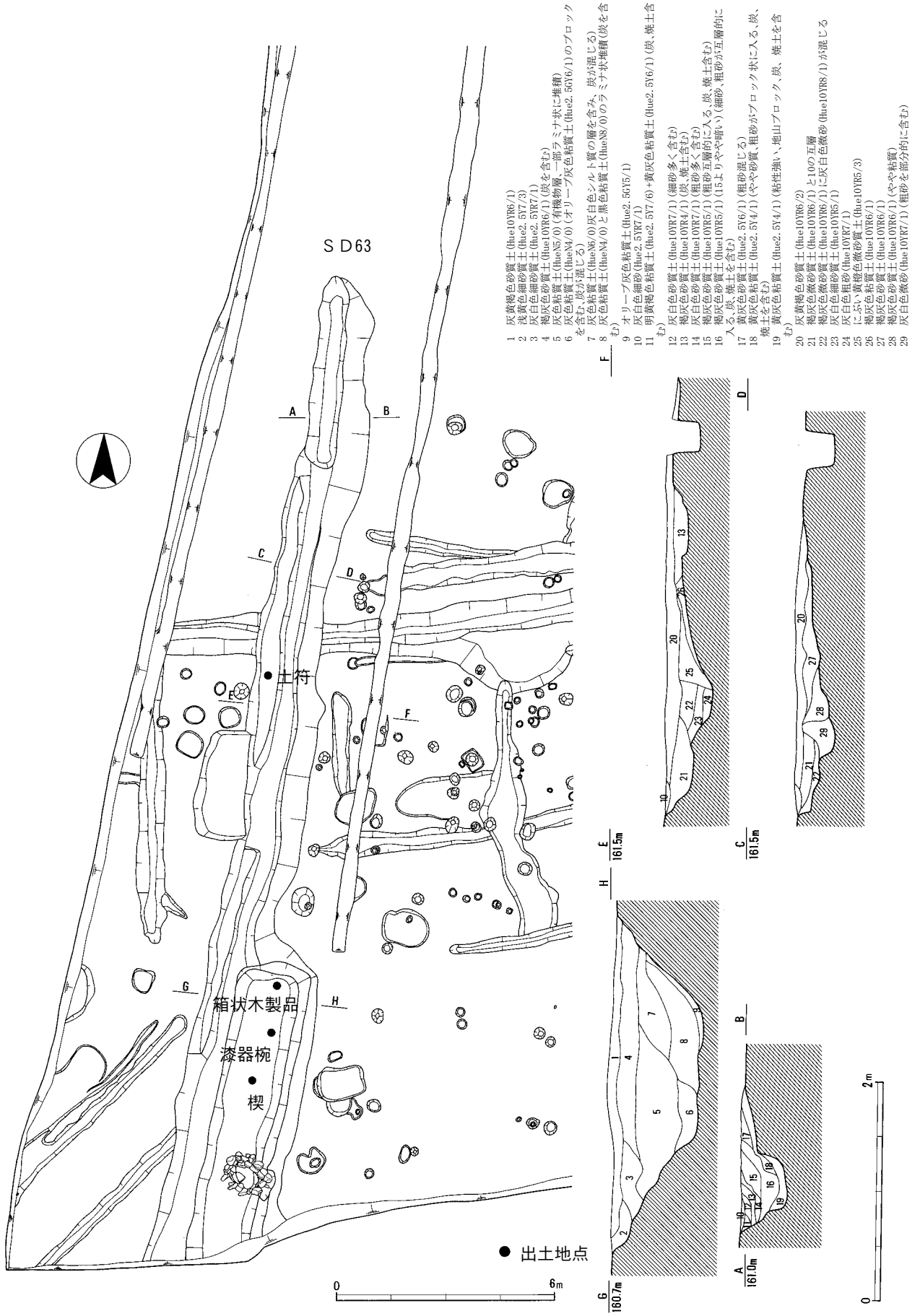
SD65
1　にぶい黄褐色砂質土(Hue10YR6/4)
2　褐灰色砂質土(Hue10YR5/1)

SD69
1　灰褐色砂質土(Hue10YR5/2)(炭、焼土少し含む)
2　褐灰色粘質土(Hue10YR5/1)(灰白色細砂(Hue2.5Y7/1)がブロック状に混じる)
3　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(炭、焼土、地山ブロック含む)
4　褐灰色粘質土(Hue10YR5/1)(粘性強い、細砂少し含む)
5　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)(炭、焼土、灰白色細砂(Hue2.5Y7/1)含む)
6　灰白色細砂(Hue2.5Y7/1)
7　黒色粘質土(Hue10YR2/1)(木質含む、有機物層)
8　灰白色細砂(Hue2.5Y7/1)+明黄褐色粘質土(Hue10YR7/6)ブロック
9　黄灰色粘質土(Hue2.5Y5/1)(粘性強い)
10　11よりも細砂多く含む砂質土
11　褐灰色粘質土(Hue10YR4/1)(炭、細砂少し含む)
12　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR4/3)(地山ブロック多く含む)
13　褐灰色より暗い粘質土(Hue10YR4/1)(粘性強い、炭、焼土、地山ブロック含む)
14　灰黄褐色細砂(Hue10YR6/2)
15　褐灰色粘質土(Hue10YR5/1)+地山ブロック
16　褐色砂質土(Hue10YR6/1)+地山ブロック
17　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)+地山ブロック

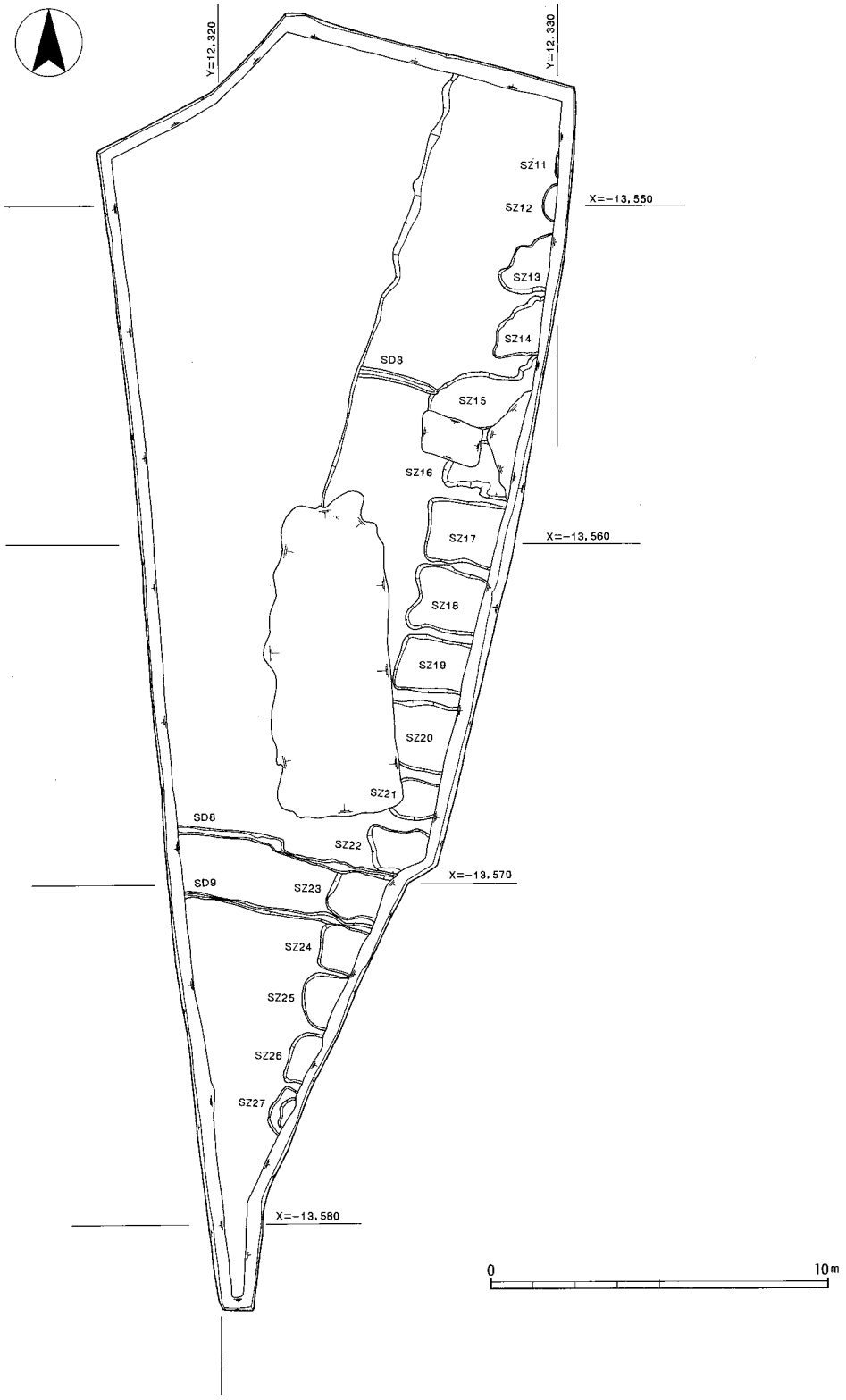


0　2m

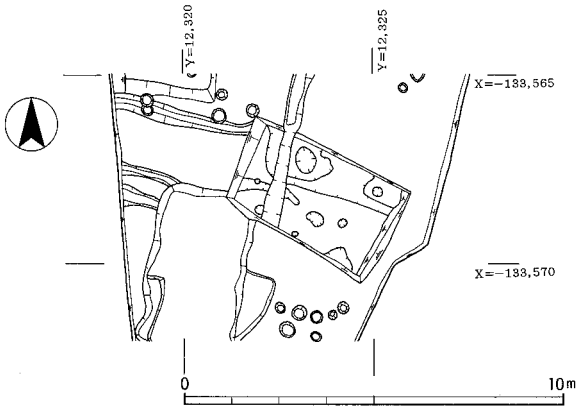
第24図　ＳＢ122・ＳＤ65・69断面図(1/50・1/100)



第25図　ＳＤ63平面図・断面図(1/150、1/50)



第26図　上地区上層遺構平面図(1/200)



第27図　上地区下層確認状況図(1/200)

ＳＫ72

下地区西側Ｅ11区において検出した土坑である。調査時では、独立した遺構として捉えたもののＳＤ69からの続きの可能性が高い。遺構検出時の平面プランは、台形状である。規模は、長辺0.65m、短辺0.58m、深さ0.04mである。遺物には、土師器皿（32～34）が出土している。遺構の時期は、15世紀後葉から16世紀初頭とみられる。

ＳＫ86（第18図）

下地区西側の南よりにおいて検出した土坑である。検出時での平面プランは長楕円形である。土坑の規模は、長さ3.38m、幅1.2m、深さ0.18mである。全体的に浅い皿状の状態を示す。ＳＤ63によって土坑の東半分が削平されたとみられる。遺物は、土師器皿（37～38）が出土している。中でも土師器皿の口縁部付近で炭化した痕跡が認められた。遺構の時期は、15世紀後葉から16世紀初頭とみられる。

ＳＫ112（第16図）

上地区北側東壁付近において検出した土坑である。土坑の規模は、径1.07～1.14m、深さ0.42mである。平面プランは、ほぼ円形である。土坑内には、人頭大以上の大形の石によって集石が認められた。遺物には、瓦器椀（41）が出土している。遺構の時期は、13世紀中葉と思われる。

ＳＫ116（第16図）

下地区南側中ほどにおいて検出した土坑である。土坑の規模は、長辺2.43m、短辺1.11m、深さ0.11mである。埋土には、炭や焼土が多く含まれた。遺構は、中世墓の可能性も考えられる。遺構の時期は、不明である。

ＳＫ124

上地区北東側ＳＨ40の北側で検出した土坑である。土坑の規模は、長辺0.92m、短辺0.7m、深さ0.1mである。平面形は、ほぼ長円形である。遺物には土師器皿（43）、鉄滓（42）がある。鉄生産に関わる土坑の可能性がある。遺構の時期は、15世紀後葉から16世紀初頭とみられる。

ＳＫ127

下地区Ｉ８～９区にかけて検出した土坑である。遺構の規模は、長辺約６m、短辺0.71m以上である。この遺構は、民有地内にあたるために掘削していない。また、ＳＤ65とほぼ平行して掘削されているものである。遺物は、遺構検出時に出土したものがあり土師器皿（44）がある。

また、ＳＤ65と接続していた溝に取り付いていた可能性が高いうえ、宇津賀大谷氏館跡と平行して存在していたと想定できる。掘削していないため断言は、できないが宇津賀大谷氏館の堀の可能性が高い。遺構の時期は、15世紀後葉から16世紀初頭とみられる。

ＳＤ65・69（第19・20・21・23・24図）

下地区中央東西、南北方向に検出した溝である。平面形状が「コ」の字形である。溝の規模は、東西方向の部分で長さ15.87m、幅1.52m、深さ0.5m、南北方向が西側で長さ13.52m、幅1.22m、深さ0.5m、東側で長さ6.65m、幅0.64m、深さ0.21mである。

東西方向のほぼ中央が南側に向かって幅広になっている。遺物は、この部分に集中しており土師器皿（64～92）、須恵器盤（93）、白磁角鉢（94）、土師器鍋（95）、土師器甕（96）、陶器擂鉢（99～101）、陶器甕（97～98）、瓦（103）、鉄滓（102）が出土している。また、東側の溝の南端は、平面形状が土坑状に膨らんでおり館跡の堀の一部ではないかと想定される。北側には、この東西溝と繋がる土坑がある。遺構の時期は、15世紀後葉から16世紀初頭とみられる。

ＳＤ63（第25図）

下地区西側において検出した溝である。北側において細く浅く、南側において溝幅が広くなり、急激

に深くなる。溝の規模は、検出長26.9m、幅1.2～1.75m、深さ約0.3～１mである。遺構の堆積状況は、北側において、灰色砂層である。南側の深くなる部分では、青灰色シルト、粘土層が堆積し、遺物には、自然木をはじめ、木製品、果実（クリ）などが出土しており、溜水していたことが判明した。

遺物には、土符（63）、土師器皿（48～50）、甕（53）、鍋（51）、信楽甕（52）、瓦質火鉢（55）、火打金（56）、火打石（57）、木製品〔箱状木製品（58）、下駄（60）、楔（61）、漆器椀（59）〕、動物骨（62）がある。この溝の時期は、ＳＤ65を南北方向に掘削しており、新しい時期であろうとみられ、16世紀初頭以降であろうと推測される。

（４）江戸時代以降

ＳＤ28

上地区北側において検出した溝である。溝は、途中で西から北へと約90°屈曲している。溝の規模は、南北方向が長さ4.76m、幅0.83m、深さ0.25m、東西方向が5.4m、幅0.65m、深さ0.25mである。後述するＳＤ29を削平して掘削している。溝の時期は、近世瓦が出土しており、近世のものであろう。

ＳＤ29

上地区北側を東西方向に走る溝である。溝の規模は、長さ13.7m、幅2.14m、深さ0.36mである。溝は、古墳主体部及び竪穴建物を掘削している。この溝もＳＤ28同様に近世とみられる。遺物には瓦質火鉢（46）がある。

ＳＴ11～27（第26図）

上地区東壁沿いに検出した水田跡である。調査区北側から南側にかけて東壁沿いに17枚の小区画の水田を確認した。それぞれの各水田の規模は、遺構一覧表に記載した。上地区東壁断面において各水田には地山の土がブロック状に入っており、何らかの理由で埋め立てられたものと推測される。水田の時期は、近世であろうか。　　（萩原義彦）

【参考文献】

三重県教育委員会・日本道路公団名古屋支社「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告５ 1970年）

報告遺構番号	調査時 遺構番号	地区	グリッド	遺構種類	長（m）	幅（m）	深（m）	時期	出土遺物	備　　考
ＳＤ01	－	上	A4.A5.B3.B4	旧耕作溝	11.30	1.05	0.10	近世以降	－	遺構カードのみに記録
ＳＤ02	－	上	B3～B6.C3	旧耕作溝	13.40	0.90	0.10	近世以降	－	遺構カードのみに記録
ＳＤ03	－	上	B4.C4	旧耕作溝	4.20	0.50	0.17	近世以降	－	遺構カードのみに記録
ＳＤ04	－	上	B4～B7.C3.C4	旧耕作溝	16.90	0.30	0.10	近世以降	－	遺構カードのみに記録
ＳＤ05	－	上	A3～D3	旧耕作溝	13.00	0.80	0.17	近世以降	－	遺構カードのみに記録
ＳＤ06	－	上	B4.C4	旧耕作溝	4.50	0.30	0.10	近世以降	－	遺構カードのみに記録
ＳＤ07	－	上	C4	旧耕作溝	1.40	0.40	0.10	近世以降	－	遺構カードのみに記録
ＳＤ08	－	上	A8～C8	旧耕作溝	6.60	0.30	0.04	近世以降	－	
ＳＤ09	－	上	A8.B8.C8	旧耕作溝	5.60	0.30	0.03	近世以降	擂鉢片	
ＳＴ11	ＳＸ11	上	D3	水田跡	0.74	0.09	0.12	近世以降	－	
ＳＴ12	ＳＸ12	上	D3	水田跡	1.09	0.40	0.21	近世以降	－	
ＳＴ13	ＳＸ13	上	D3.D4	水田跡	1.70	1.33	0.16	近世以降	－	
ＳＴ14	ＳＸ14	上	D4	水田跡	1.75	1.24	0.09	近世以降	－	
ＳＴ15	ＳＸ15	上	D4.D5 C4.C5	水田跡	1.57	2.50	0.15	近世以降	－	
ＳＴ16	ＳＸ16	上	C5.D5	水田跡	1.68	1.72	0.15	近世以降	－	
ＳＴ17	ＳＸ17	上	C5.C6 D5.D6	水田跡	1.78	2.06	0.20	近世以降	－	
ＳＴ18	ＳＸ18	上	C6	水田跡	1.94	1.84	0.13	近世以降	－	
ＳＴ19	ＳＸ19	上	C6.C7	水田跡	1.62	2.01	0.15	近世以降	－	
ＳＴ20	ＳＸ20	上	C7	水田跡	2.09	1.63	0.16	近世以降	－	
ＳＴ21	ＳＸ21	上	C7.C8	水田跡	1.17	1.00	0.10	近世以降	－	
ＳＴ22	ＳＸ22	上	C8	水田跡	1.20	1.65	0.15	近世以降	－	
ＳＴ23	ＳＸ23	上	B8.C8	水田跡	1.36	1.53	0.12	近世以降	－	
ＳＴ24	ＳＸ24	上	B8.C8 B9.C9	水田跡	1.33	1.16	0.09	近世以降	－	
ＳＴ25	ＳＸ25	上	B9	水田跡	1.64	1.03	0.07	近世以降	－	
ＳＴ26	ＳＸ26	上	B9	水田跡	1.56	0.79	0.05	近世以降	－	
ＳＴ27	ＳＸ27	上	B9.B10	水田跡	1.34	0.61	0.08	近世以降	－	
ＳＤ28	－	上	A3.B2.B3	溝	4.76 0.65	0.83 5.40	0.25	近世以降	石製品・土塊・瓦片	北から南、西へ屈曲する溝
ＳＤ29	－	上	A3～D3.D4	溝	2.14	13.70	0.36	近世以降	擂鉢片・土師器片	SX32・SZ31を切る溝
ＳＤ30	－	上	C5.C6.B6～B8	溝	11.64	0.47	0.27	古代	土師器片・須恵器片	地区を南北に縦断する溝
ＳＨ31	ＳＸ31	上	A3～C3.A4～C4	竪穴建物	3.87	8.48	0.25	中世	土師器片・須恵器片・擂鉢片・瓦器片・土塊	隅丸長方形プランで、床面周囲に溝が回る溝の外側に一部石列残存
ＳＸ32	－	上	C2.C3 D2.D3	古墳主体部	4.62 3.56	1.70 0.56	0.42 0.28	古墳	副葬品：勾玉、鉄剣、砥石等	割竹形木棺か
ＳＤ33	－	上	C4.D4	溝	0.64	4.11	0.20	古墳	－	古墳の周溝
ＳＤ34	－	上	A3.A4.B4.C4.C5.D5	溝	3.35 0.50	0.34 14.90	0.23	中世	擂鉢片・陶器片	SZ31内をめぐる側溝又は壁溝
ＳＤ35	－	上	C2	溝	0.32	0.85	0.10	？	－	
ＳＤ36	－	上	C3	溝	0.09	0.26	0.05	？	－	
ＳＫ37	－	上	B5.B6 C5.C6	土坑	2.21	1.76	0.16	中世	擂鉢片・瓦器片・土師器片	埋土に炭、焼土多量に含む
ＳＫ38	－	上	A6	柱穴	0.53	0.64	0.22	古代？	－	SB115のPit2
ＳＫ39	－	上	C6	土坑	1.53	1.17	0.25	中世	土師器片、瓦器片	

第１表　遺構一覧表(1)

報告遺構番号	調査時遺構番号	地区	グリッド	遺構種類	長（m）	幅（m）	深（m）	時期	出土遺物	備　考
ＳＨ40	ＳＸ40	上	C5.C6 D5.D6	竪穴住居	3.17	1.90	0.34	古代	土師器片・須恵器片・陶器鍋	壁溝内にピットあり　壁立の住居か
ＳＨ41	ＳＸ41	上	B5.B6 C5.C6	竪穴建物	5.30	3.20	0.15	中世	土師器片・須恵器片・瓦器片	壁溝内にピットあり　壁立の住居か 壁溝が一部浅く残存
ＳＤ42	－	上	B5.B6.C6	溝	3.65 0.46	0.43 2.38	0.17	中世	－	SZ41の壁溝
ＳＤ43	－	上	C6	溝	0.18	1.18	0.03	古代	－	竪穴住居の壁溝か
ＳＫ44	－	上	A8.B8 A9.B9	土坑	4.25	3.46	0.39	中世	土師器片・瓦器片・白磁片・青磁片・土塊	埋土に炭、焼土含む
ＳＤ45	－	上	A7.B7	溝	0.42	3.67	0.08	中世	土師器片・瓦器片	
ＳＤ46	－	上	A7	溝	0.23	1.43	0.08	？	－	
ＳＤ47	－	上	A7.A8	溝	0.35	1.03	0.13	？	－	
ＳＫ48	－	上	B9	土坑	0.54	0.85	0.27	中世	陶器片	
ＳＤ60	－	下	G2～G7.F8～F11	現代暗渠溝	37.50	0.40	0.40	現代	－	溝底に木枝が詰められていた
ＳＤ61	－	下	G2.F2～F5.E5～E9.D10	現代暗渠溝	33.70	0.50	0.30	現代	－	溝底に木枝が詰められていた
ＳＤ63	ＳＲ63	下	F7～F13.E8～E13	溝	26.90	1.75	最深部 0.98	中世	土師器皿・土師器片・土符・常滑甕	中世居館の堀？
ＳＤ64	－	下	E9～I9	溝	0.58	9.58	0.07	？	－	
ＳＤ65	－	下	E9～I9.I10～I12	溝	南北方向 13.52 東西方向	1.22 15.87	0.50	中世	陶器擂鉢・土師器皿・鍋・鉄滓	中世居館の堀
ＳＤ67	－	下	E10.E11	溝	5.13	0.32	0.02	中世	瓦器片、土師器片	
ＳＤ68	－	下	E10.E11	溝	4.57	0.22	0.06	？	－	
ＳＤ69	－	下	E9～E11.D11	溝	6.65	0.64	0.21	中世	瓦片・土師器皿	SD65が地区西隅で南に屈曲した同じ溝と考えられる
ＳＤ70	－	下	D10	溝	0.29	0.65	0.05	？	－	
ＳＺ72	ＳＸ72	下	D11.E11	不明	0.65	0.58	0.04	中世	土師器皿片	土坑か
ＳＤ73	－	下	D11.D12	溝	1.90	1.07	0.10	中世？	土師器片	耕作溝か
ＳＤ74	－	下	E12.D12.D13	溝	5.06	0.24	0.05	中世？	土師器片	耕作溝か
ＳＤ75	－	下	E12.D12.D13	溝	6.51	0.38	0.09	中世？	土師器片	耕作溝か
ＳＤ76	－	下	E12.E13.D13	溝	4.99	0.38	0.10	中世？	土師器片	耕作溝か
ＳＫ77	－	下	F11.G11	土坑	1.31	1.01	0.15	古代？	須恵器片	
ＳＫ78	－	下	F12	撹乱	0.85	1.31	0.15	不明	土師器皿・甕・須恵器片・灰釉陶器	撹乱
ＳＫ79	－	下	F12	土坑	0.56	0.14	0.03	？	－	
ＳＫ80	－	下	F12	土坑	0.43	0.68	0.12	？	－	
ＳＫ81	－	下	F13	土坑	0.76	0.50	0.08	中世	南伊勢系土師器鍋	
ＳＫ82	－	下	F11	土坑	0.76	0.60	0.28	近世以降	土師器皿片・近世陶器	ピットの重複？
ＳＫ83	－	下	F10	土坑	1.02	1.06	0.02	近世以降	近世陶器	
ＳＫ86	ＳＸ86	下	E10	土坑	3.38	1.20	0.18	中世	土師器皿片	
ＳＤ87	－	下	F8.G8.H8	溝	8.00	0.40	0.04	中世	瓦器片・土師器皿片	
ＳＤ88	－	下	F9.F10	溝	2.72	0.46	0.22	中世	瓦片	
ＳＫ89	－	下	F10	土坑	0.77	0.69	0.04	？	－	
ＳＺ90	ＳＨ90	下	G8～I8	不明	2.76	4.26	最深部 0.28	中世	土師器皿片・陶器片	炭・礫が集積される U字形の溝をもつ
ＳＤ91	－	下	H9	溝	0.46	3.80	0.15	中世	土師器片・瓦器片・常滑甕片	
ＳＤ92	－	下	H9.H10	溝	0.27	3.40	0.09	中世	南伊勢系土師器鍋	
ＳＤ93	－	下	H9.I9 H10.I10	溝	4.66	1.10	0.09	中世？	－	

第２表　遺構一覧表(2)

報告遺構番号	調査時遺構番号	地区	グリッド	遺構種類	長（m）	幅（m）	深（m）	時期	出土遺物	備　考
ＳＤ94	－	下	F10～H10.F11	溝	0.48	11.87	0.12	中世	土師器片・須恵器片・瓦器片・常滑甕片・南伊勢系土師器鍋	
ＳＤ95	－	下	H10.I10	溝	0.40	3.17	0.02	中世？	－	
ＳＤ96	－	下	G11～I11	溝	0.40	8.82	0.04	中世？	－	
ＳＤ97	－	下	I11.I12	溝	2.63	0.29	検出のみ	中世？	－	民有地内につき掘削せず
ＳＤ98	－	下	H12.I12	溝	0.55	5.47	0.06	中世	須恵器片・土師器片・瓦器片	
ＳＤ99	－	下	H12.I12.H13	溝	3.89	0.45	検出のみ	中世	須恵器片・土師器片・瓦器片	民有地内につき掘削せず
ＳＺ100	ＳＸ100	下	E13	石組遺構	1.47	1.19	0.70	中世	須恵器片・土師器片	SD63内に設置された、集水枡状の石組
ＳＫ101	－	下	G8	土坑	0.56	0.53	0.48	？	－	
ＳＫ102	－	下	G8	土坑	0.92	0.74	0.10	？	－	
ＳＫ103	－	下	G8	土坑	0.79	0.83	0.10	？	－	
ＳＤ104	－	下	I9	溝	2.70	0.20	0.07	中世	－	
ＳＤ105	－	下	I9	溝	0.50	0.33	0.01	中世	－	
ＳＤ106	－	下	I9	溝	0.27	0.27	0.05	中世	－	
ＳＤ107	－	下	I9	溝	0.35	0.41	0.11	中世	－	
ＳＤ108	－	下	I9	溝	0.21	0.44	0.05	中世	－	
ＳＤ109	－	下	I9.I10	溝	0.35	0.59	0.05	中世	－	
ＳＫ110	－	上	B4.C4 B5.C5	土坑	1.45	1.06	0.26	？	－	
ＳＫ111	－	上	C4	土坑	1.27	1.12	0.30	中世	瓦器片・擂鉢片	
ＳＫ112	－	上	D4	土坑	1.07	1.14	0.42	中世	瓦器片・土師器片	内部に集石
ＳＢ115	－	上	A6.B6	堀立柱建物	2.82	2.84	-	古代	－	検出した関連ピット7個　建物固有のPitナンバーあり
ＳＺ116	ＳＸ116	下	F10.G10	不明	1.11	2.43	0.11	中世	土師器片・須恵器片・陶器片	炭、焼土を多量に含んだ部分あり
ＳＤ117	－	下	G9.G10.G11	溝	6.96	1.25	0.26	古代	土師器片	埋土は黒色土
ＳＫ118	－	下	H11	土坑	1.60	0.93	0.10	？	－	
ＳＤ119	－	下	F12.F13	溝	3.40	0.49	0.09	？	－	
ＳＨ120	－	下	H12.H13	竪穴住居	1.71	2.62	0.29	古代	土師器皿	埋土は黒色土
ＳＫ121	－	下	F13	土坑	0.45	0.51	0.24	古代	土師器甕片	
ＳＢ122	－	下	F10～H10.F11～H11	堀立柱建物	9.09	4.24	-	中世	－	検出した関連ピット12個　建物固有のPitナンバーあり
ＳＫ124	－	上	C5	土坑	0.92	0.70	0.10	中世	土師器片・須恵器片・瓦器片・鉄滓	
ＳＤ125	－	下	H8.I8	溝	3.00	0.20	0.06	中世？	－	
ＳＫ126	－	下		土坑	1.20	0.95	0.06	古代	－	
ＳＫ127	－	下	I8	土坑	2.11	0.71	検出のみ	中世	土師器片・陶器片・瓦器片	民有地内につき掘削せず

第３表　遺構一覧表(3)

［遺構一覧表　凡例］

報告書に掲載した遺構の一覧表は、以下の規則によって作成した。

1　一覧表報告遺構番号及び調査時遺構番号は、発掘調査における遺構の各種類・内容如何に問わず通し番号である。ただし、調査時遺構番号は、発掘調査中において付したものである。また、本文中において掲載した実測図は、報告番号に基づいて作成している。遺構表示記号は、例言に記載している。なお、遺構番号は遺物の出土如何に係わらず付している場合と付していない場合がある。

2　地区及びグリッドについては、調査区の状況に応じて上地区・下地区で分けた。グリッドについては、４ｍメッシュによって区切られた小地区である。小地区については、前言の調査方法の中で記述している。

3　種類については、遺構の内容によって記述している。

4　規模については、長さ、幅、深さを各メートル単位で記載した。

5　時期については、各遺構の出土遺物等によって判断した。

6　出土遺物については、遺構から出土しているものを記述した。

7　備考については、本文中において記述していない特徴等について記述した。

Ⅳ　遺　物

遺物は、コンテナバットにして約30箱出土した。遺物の多くは、鎌倉時代から室町時代にかけてのものが主である。それら以外で古墳時代及び平安時代にかけてのものが出土している。遺物について以下のとおり遺構ごとに概述する。また、遺物では実測可能な物について掲載したが、須恵器無蓋高杯、土師器皿、志摩式製塩土器、青磁椀、白磁椀、南伊勢系土師器鍋、鉄滓、鉄片など小破片が出土している。なお、遺物の時期等については、愛知学院大学藤澤良祐、三重県埋蔵文化財センター穂積裕昌、川崎志乃、大川操、小林俊之、奥義次各氏のご教示を得た。また、各遺物の詳細な調整等については、遺物一覧表を参照されたい。（第４～６表）

ＳＸ32出土遺物（１～９）

全て棺内からの出土である。１は、鉄剣である。寸法は、全長75.8cm、身部長60cm、身部幅3.85cm、厚さ0.8cm、柄部長15.8cm、柄部幅2.2cmである。関は両側に付くとみられる。また把間部分は、木製の有機質のもので装具が成されていたとみられる。把は二枚合わせ式とみられ、目釘孔は２箇所であろうか。孔の間隔は、非常に狭い。

２は、鉄鉾である。鉾先の寸法は、全長22.5cm、末端から６～７cmのところから下部にあたり、断面円形である。木質部分が残る。上部は、本来鎬は身の中央部にみられるはずであるが銹化著しく確認できない。

３は、ヤリガンナである。木質部分が一部残る。

４～６は、砥石である。４は、円孔が２箇所残る。砥面は２面である。６は一部欠損した状態で出土した。５・６は、共に円孔が１箇所穿たれている。砥面は４面である。円孔の径0.4～0.5cm前後である。全て提砥である。７は、木質部分を残す鉄製品である。銹化しており不明鉄製品である。武器ないし工具にかかわるものであろう。

８は、普通石であるが、砥石などと一緒に出土した。８は砥石の原材料であろうか、もしくは頭位に置かれたものであろうか。４～６の石質は、凝灰岩である。８も同様であろうか。

９は、勾玉である。勾玉の材質は緑色凝灰岩製とみられる。丁字頭で、穿孔部から３方向に放射状に伸びる線刻が施される。遺物の時期は４世紀末葉から５世紀前葉にかけてとみられる。

ＳＨ120出土遺物（10～12）

10・11は土師器杯、12は土師器皿である。全体的に器壁は、厚い。９世紀代とみられる。

ＳＺ90出土遺物（13～15）

土師器皿（13）、鍋（15）などが出土している。土師器鍋は、12世紀中葉から後葉にかけてのものであろう。14は、甑であろうか。口縁部付近のみの残存のため器種不明である。

ＳＨ40出土遺物（16～23）

遺物には、土師器皿（16～19）、瓦器椀（20）、瓦質鍋（21）、羽釜（22）がある。19は、やや厚手のもの。欠損が大きい。20の口縁部の傾きは、もう少し開く可能性が高い。13世紀代のもの。23は鉄製品の鎹の破片とみられる。

ＳＨ41出土遺物（24）

24は、瓦器椀である。13世紀前葉から中葉のものとみられる。内面底部の暗文は１回転だけで、内面体部は、12周巡る。緻密なため、実際はもう少し多いかもしれない。

ＳＨ31出土遺物（25～28）

26は、陶器擂鉢、25は、陶器皿である。26は、信楽のもの、25は、瀬戸美濃の大窯Ⅰ期であろう。27は、鉄製品の釘もしくは鎹であろう。28は、刀子の中茎から刃元の部分とみられる。

ＳＤ34出土遺物（29）

陶器椀（29）が出土している。天目茶椀の口縁部である。室町時代末のものであろう。

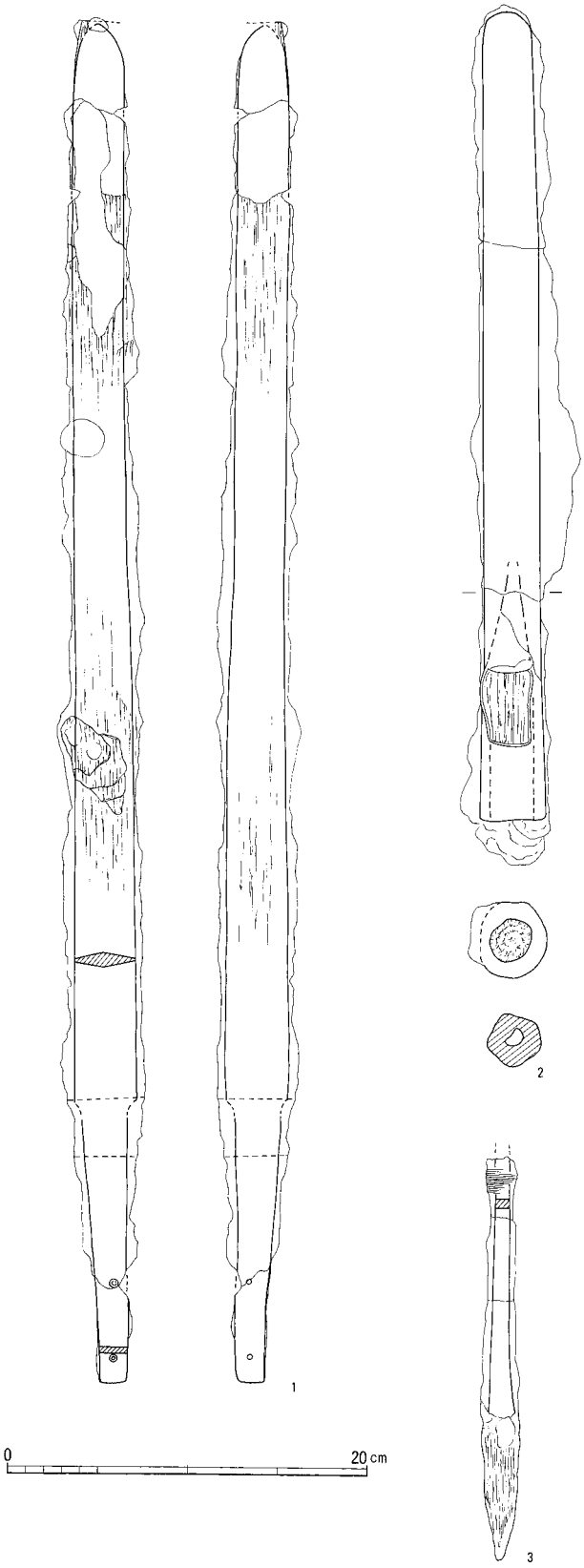
ＳＫ44出土遺物（30～31）

土師器皿（30）、土師器羽釜（31）が出土している。遺物の時期は、15世紀後葉のものとみられる。

ＳＫ72出土遺物（32～34）

出土したものは、すべて土師器皿である。34は、全体的に厚みのあるもの。15世紀後葉から16世紀初

ＳＸ32



頭のものとみられる。

ＳＫ78出土遺物（35～36）

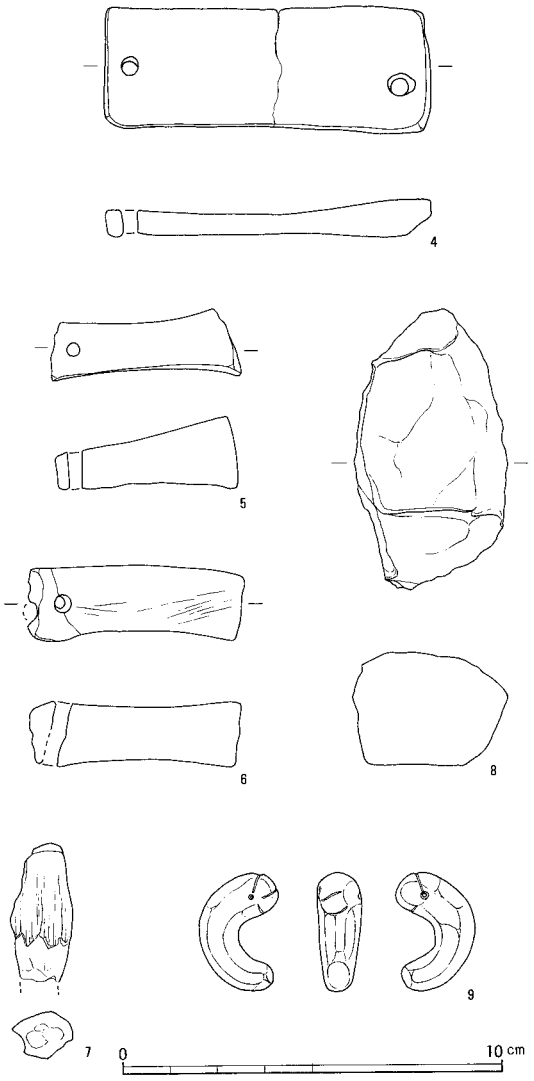
遺物には、灰釉陶器の椀（35）と古式土師器壺の口縁部（36）が出土している。灰釉陶器椀は平安時代のもの。

ＳＫ86出土遺物（37～38）

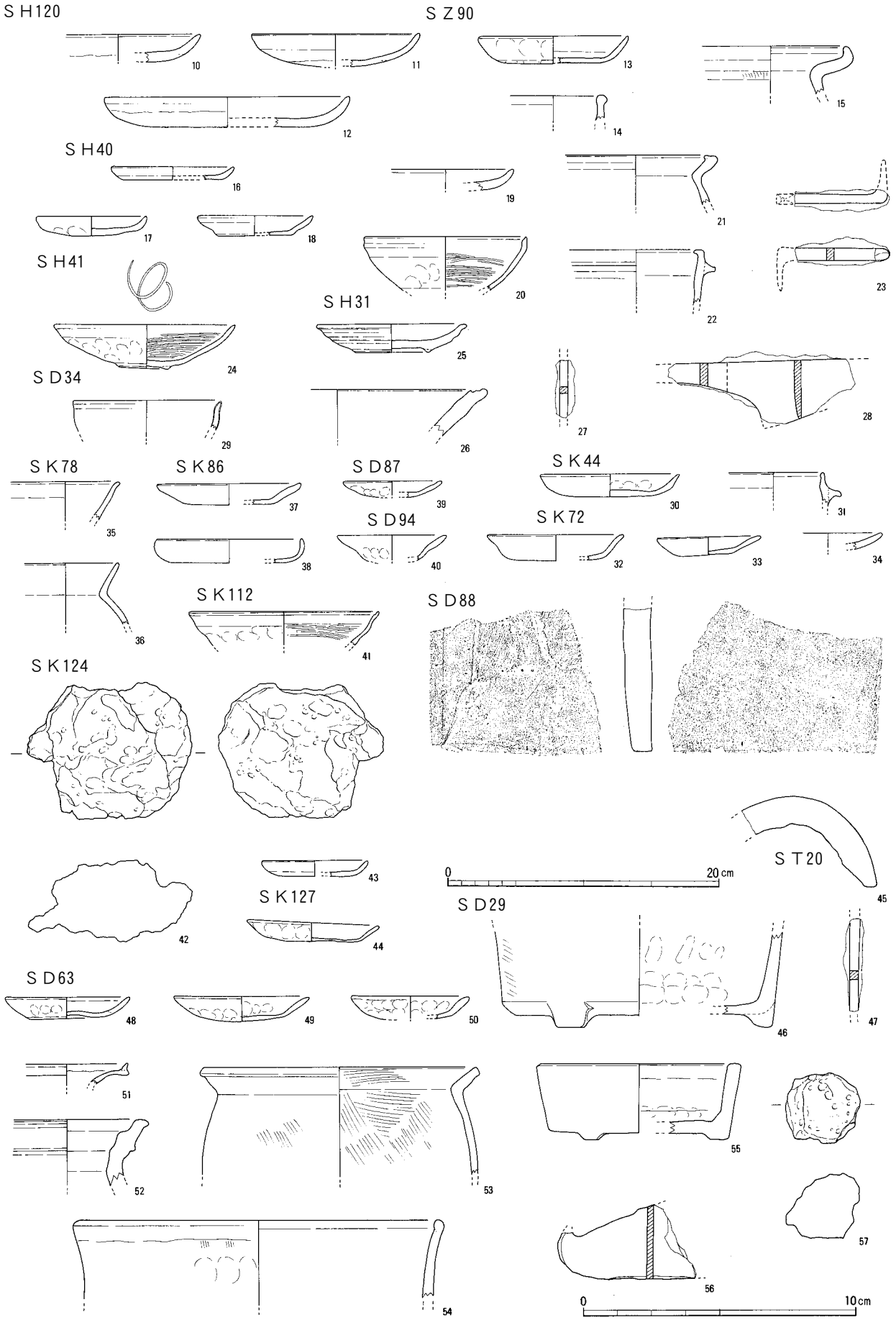
共に土師器皿、38は、器壁が薄く、接地面より直気味に立ち上がる。15世紀後葉から16世紀前葉のものとみられる。

ＳＤ87出土遺物（39）

土師器皿である。底部は、欠損している。15世紀後葉から16世紀前葉のものとみられる。



第28図　出土遺物実測図(1)（１は1/4、２～９は1/2）



第29図　出土遺物実測図(2)(23・27・28・42・47・56～57は1/2、その他1/4)

ＳＤ94出土遺物（40）

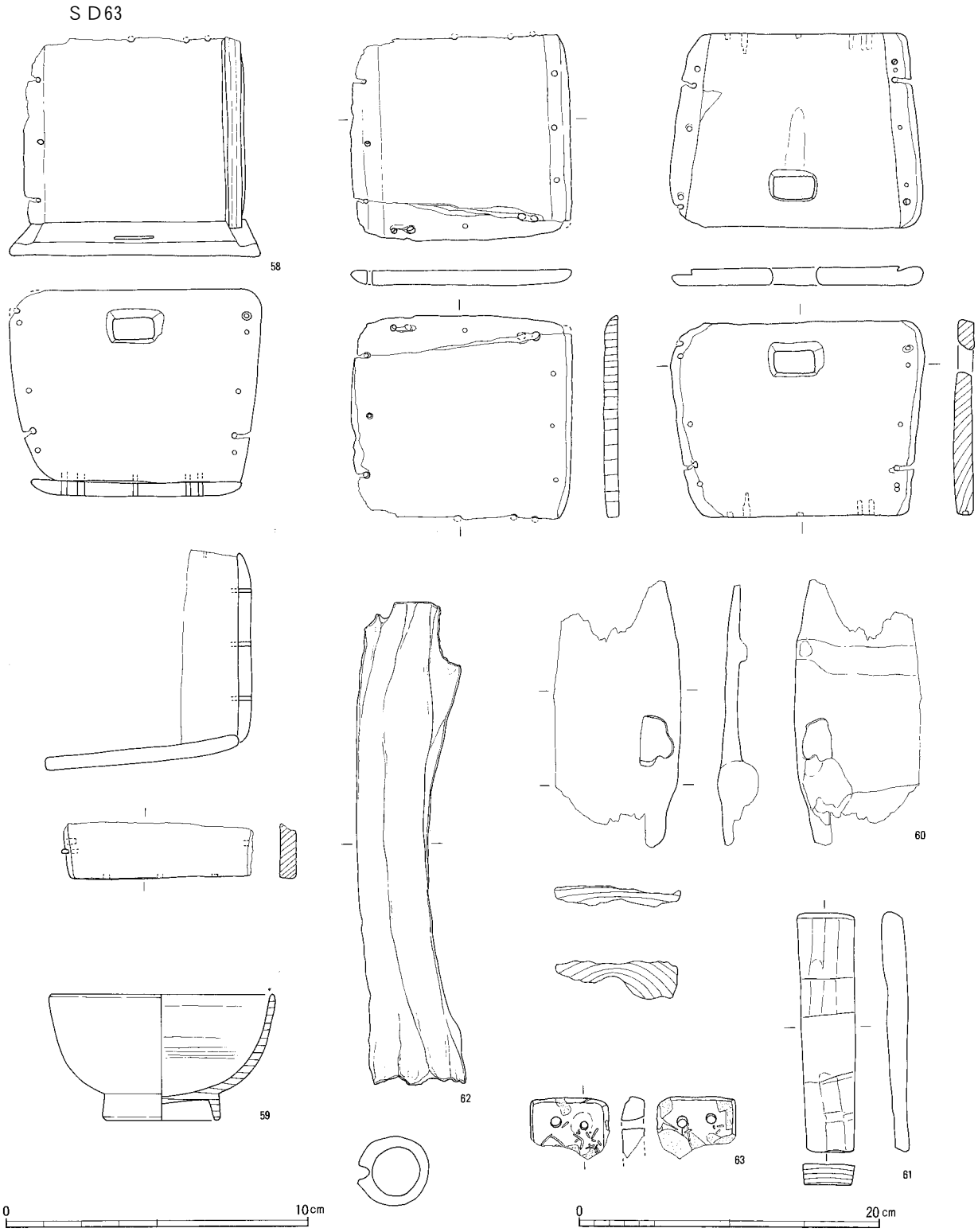
土師器皿である。口縁部は厚みをもち、底部は薄くなっている。

ＳＫ112出土遺物（41）

遺物は、瓦器椀である。高台部を含め底部が欠損している。13世紀代のものであろう。

ＳＫ124出土遺物（42～43）

土師器小皿がある。口縁部は、段々状に広がる。43は、鉄滓である。土師器皿は、15世紀後葉から16世紀前葉のものとみられる。



第30図　出土遺物実測図(3)(62は1/2、その他1/4)

ＳＫ127出土遺物（44）

土師器小皿がある。全体的に薄手のつくりである。15世紀後葉から16世紀前葉のものとみられる。

ＳＤ88出土遺物（45）

丸瓦である。全体の１/３程度残存している。15世紀後葉から16世紀前葉のものとみられる。

ＳＤ29出土遺物（46）

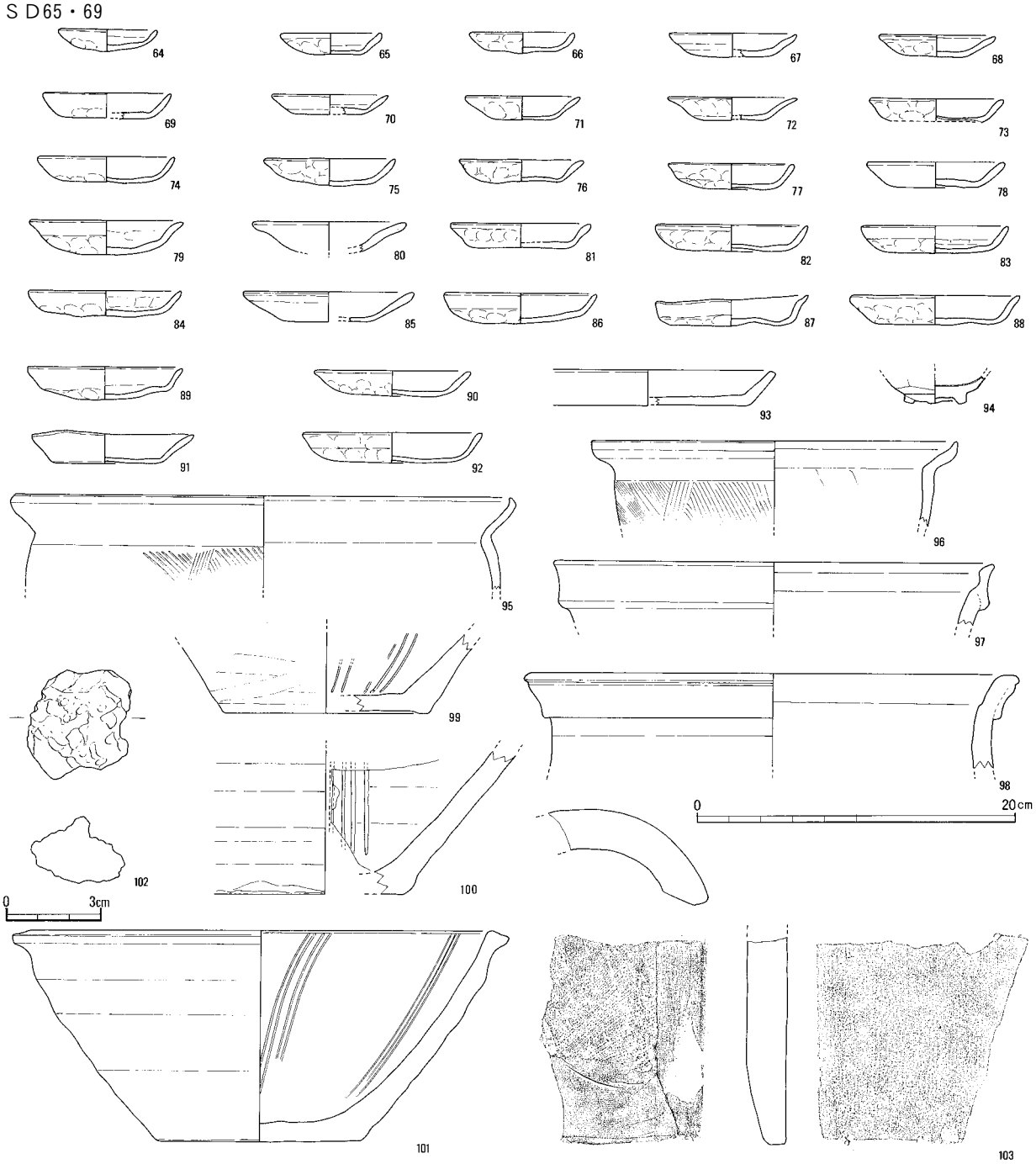
46は、瓦質浅鉢である。15世紀後葉のものであろう。

ＳＴ20出土遺物（47）

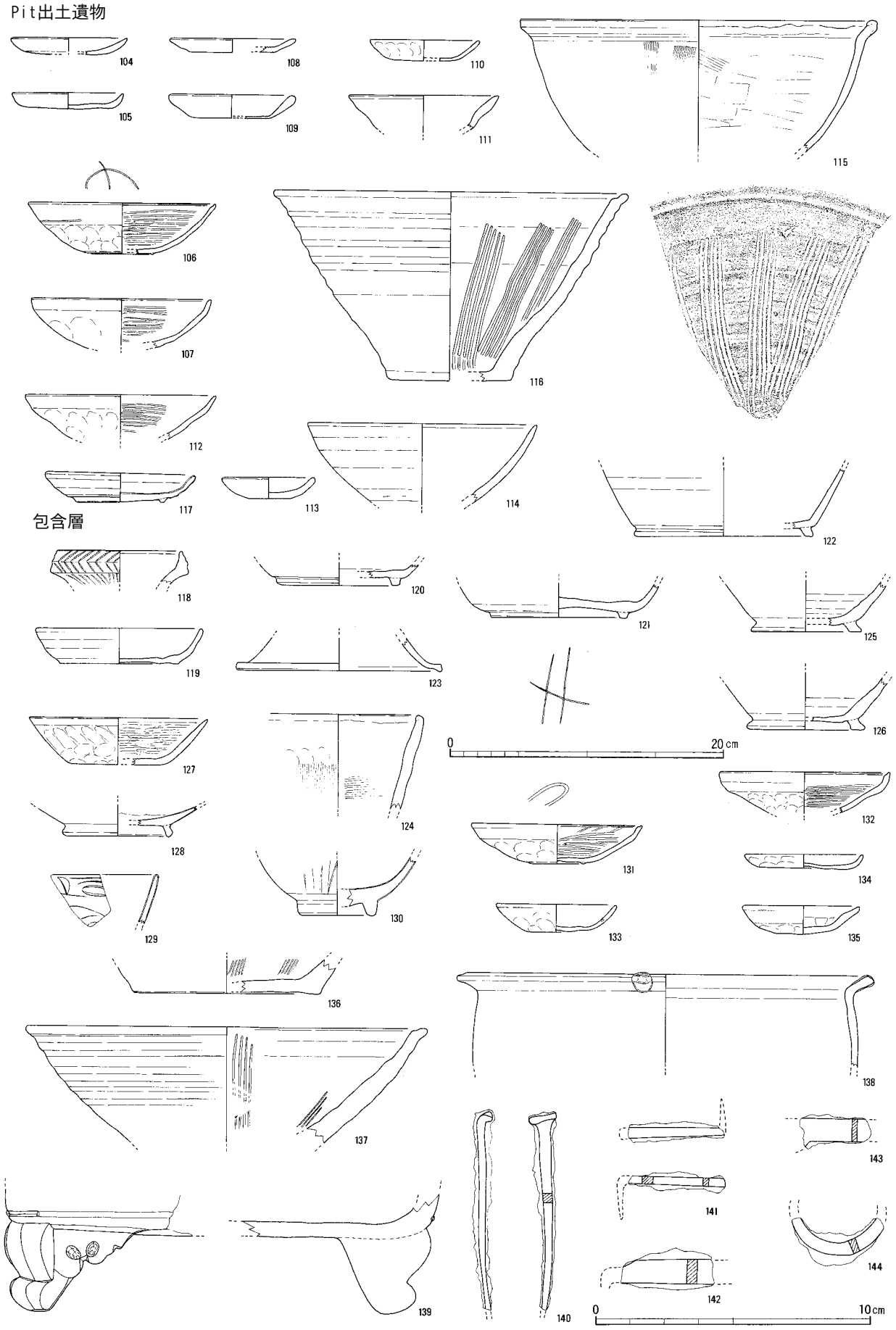
鉄製品の釘か鎹とみられる。ＳＴ20は、水田跡と判断されるため下層遺構からの混じり込みと思われる。中世末期のものであろうか。

ＳＤ63出土遺物（48～63）

遺物には、箱状木製品（58）、漆器椀（59）、下駄（60）、楔（61）などがあり、土器では、土師器皿（48～50）、鍋（51）、甕（53）、甑（54）、陶器甕（52）、瓦質火鉢（55）、それ以外に動物骨（62）、土符（63）、鉄製品火打金（56）、鉄滓（57）が出土し



第31図　出土遺物実測図(4)(102は1/2、その他1/4)



第32図　出土遺物実測図(5)(140～144は1/2、その他1/4)

ている。

箱状木製品は、底及び側板１枚分と一方の下半部だけ残る。側板の一部に口が残る。箱状木製品として記載したが枡と考えられる。内法寸法は、12cmの立法体である。開口部が15cm前後とやや開く。

下駄は、かなり使用されたとみられ、歯の部分は、磨耗している。また鼻緒を通す孔についても欠損しており廃棄されたものであろう。59の漆器椀は、刳物である。内面が赤色の漆、外面が黒色のものによって塗布されている。楔は、長さ８cm、幅1.6～1.9cm、厚さ0.4～0.7cmである。

動物骨（62）は、シカの大腿骨である。骨自体には、加工痕跡は一切ない。この部位だけが出土したことは、この時期の食文化の一環を示しているのかもしれない。

48～50は、土師器皿である。全体的に器壁は薄い。51は、南伊勢系土師器鍋の口縁部で４型式Ｃ段階とみられる。15世紀代のもの。55は、15世紀末から16世紀初頭にかけてのものとみられる。52は、陶器甕である。信楽のものである。15世紀前葉のものであろう。53は土師器甕で９世紀代のものであろう。54は口縁部である。９世紀代であろうか。63は土符である。土符は、途中から割れており文字全体を読めないが、表面の「人」「馬ないし銭」であろうか。裏面は、判読できない。年号を読み取ることができないため凡そ15世紀代であろう。

56は、切断面が鋭利でありスクラップとして二次利用されるものであろう。

ＳＤ65・69出土遺物（64～103）

64～92は、土師器皿、須恵器盤（93）、白磁角鉢（94）、土師器鍋（95）、甕（96）、陶器擂鉢（99～101）、甕（97～98）、鉄滓（102）、丸瓦（103）が出土している。

土師器皿は、多種に及ぶものがある。93の須恵器盤は、内外面が研磨されており、硯に転用されていた可能性もあろう。遺構の時期とは、合致しないため混入遺物であろう。鍋は、口縁部から体部にかけてのものであるが、図化できなかった体部下半がある。体部外面は、ケズリによって調整されており、全体的に器壁は、厚い。遺物の時期は、15世紀後葉と考えられる。擂鉢は、全て信楽産のもの。15世紀中葉から末にかけてのものとみられる。陶器甕も信楽産のものであろう。時期は、15世紀中葉を前後するものとみられる。

ピット出土遺物（104～117）

瓦器椀（106～107・112）、土師器皿（104～105・108～111・113）、陶器平椀（114）、瓦質鍋（115）、陶器擂鉢（116）がある。

106～107・112は、口縁部外面にはミガキがなく、107、112は高台部を欠損している。３点とも13世紀代であろう。114は、志野のもの17世紀代とみられる。115は口縁端部を内面に折り返すように成形している。擂鉢は、信楽産のものである。

包含層出土遺物（118～144）

出土遺物は、多種多様である。弥生土器壺（118）、須恵器杯（119～122）、高杯（123）、壺（125～126）、土師器甑（124）、黒色土器椀（127）、灰釉陶器皿（128）、青磁椀（129～130）、瓦器椀（131～132）、土師器皿（133～135）、陶器擂鉢（136～137）、瓦質土器鍋（138）、瓦質浅鉢（139）、釘（140）、鎹（141～142）、刀子（143）、不明鉄製品（144）が出土している。

118は、弥生土器壺の口縁部片である。全体的に風化著しい。119～122は須恵器杯である。119は、腰部から緩やかに立ち上がる。122は、鋭く立ち上がる。121は、底面にヘラによって文字が書かれている。「廾」であろう。125～126の須恵器壺は、全て底部のもの。長頸壺であろうか。124の土師器甑は、口縁部のみ。123の須恵器高杯は、脚部の一部だけである。127の黒色土器は、内面内黒でミガキが成されている。所謂Ａ類であろう。高台部は、付けられていないものである。瓦器椀は、口縁部外面には、ミガキが施されていない。青磁椀は、口縁部のものと底部のもの。口縁部のものは、外面雷文状になるものであろうか。底部のものは蓮弁とみられる箇所を残す。擂鉢は、全て信楽産のものである。瓦質土器の鍋は、口縁部から体部にかけてもう少しすぼまるかも知れない。また、口縁端部の浮文状の部分については、製作時における膨らみの可能性が高く、両端部分が削られたようになっている。139は瓦質火鉢の脚部である。径等は不明である。

141・142は、鎹であるが大・小のものであろう。

143は刀子の中茎であろうか。144は、不明品である。環状のものである。　（萩原義彦）

【参考文献】

伊賀市「上野市史　考古編」2005年
福田典明「伊賀地域における瓦器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究ＸＸ』（日本中世土器研究会編　2006年）
山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』（日本中世土器研究会編　1986年）
菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」（国立民俗博物館研究報告第19集　1998年）
畑中英二「信楽焼の考古学的研究」（サンライズ出版　2003年）
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol. 1』（三重歴史文化研究会　1990年）
山田猛「下郡遺跡出土の擂鉢」『Mie history vol. 1』（三重歴史文化研究会　1990年）
尾野善裕・鋤柄俊夫ほか「東海・濃飛」「畿内周辺」『中世食文化の基礎的研究』（国立歴史民俗博物館研究報告第71集　1997年）
山本雅靖「「土符」－考古学的調査の現状と課題－」『三重県史研究　第８号』（1992年）
山本茂貴「土符」（新居地区自治会連合会　1994年）

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	025-01	鉄製品　鉄剣	C3 SX32 主体部	—	—	長さ 75.4	—	—	—	—	—	鞘の木質部分が一部残る。
2	023-01	鉄製品　鉾	C3 SX32 主体部	—	—	残存長 23.8	—	—	—	—	—	取り上げ№.4
3	022-01	槍鉋	C3 SX32 主体部	—	—	残存長 11.3	—	—	—	—	—	繊維質・木質部分残る。 取り上げ№.1
4	023-04	石製品　砥石	C3 SX32 主体部	—	長さ 8.55	厚さ 1	—	—	—	—	—	取り上げ№.3
5	023-03	石製品　砥石	C3 SX32 主体部	—	長さ 5	厚さ 2	—	—	—	—	—	
6	023-02	石製品　砥石	C3 SX32 主体部	—	長さ 5.6	厚さ 1.7	—	—	—	—	—	
7	022-03	鉄製品	C3 SX32 主体部	—	—	残存長 3.7	—	—	—	—	—	木質部分残る。
8	023-05	自然石？	C3 SX32 主体部	—	長さ 7.4	厚さ 4	—	—	—	—	—	
9	013-06	勾玉	C3 SX32	長さ 3.1	幅 2.1	厚さ 1.15	—	—	—	—	完形	重さ6.23g・石質（緑色凝灰岩）
10	021-02	土師器　皿	SH120 周溝	—	残高 2	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	—	にぶい黄橙色　10YR7/3	口縁部小片	
11	020-07	土師器　小皿	SH120 周溝	12.4	残高 2.4	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	—	橙色　5YR6/6	約30%	
12	017-07	土師器　皿	H12 SH120	18	2.1	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	—	浅黄橙色　10YR8/3	約30%	
13	020-05	土師器　小皿	H8 SH90	11	2	—	内面：ナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	密	—	にぶい黄橙色　10YR7/3 灰黄褐色　10YR5/2	約20%	
14	016-07	土師器　羽釜	H9 SH90	—	残高 1.8	—	内外面：ナデ	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	—	明褐色　7.5YR5/6	口縁部小片	
15	021-01	土師器　鍋	H8 SH90 周溝	—	残高 3.4	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、ハケ	密	—	黄灰色　2.5Y5/1 灰白色　2.5Y7/1	口縁部小片	
16	017-04	土師器　小皿	D5 SH40	9	0.95	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	密	—	浅黄橙色　10YR8/4	約30%	
17	017-03	土師器　小皿	D5 SH40	8.2	1.5	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	—	橙色　5YR7/6	約50%	
18	017-05	土師器　小皿	D5 SH40	8.5	1.45	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	粗（1～2㎜の砂粒含む）	—	灰白色　10YR8/2	約30%	
19	017-06	土師器　小皿	D5 SH40	—	残高 1.5	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	やや密	—	浅黄橙色　10YR8/3	口縁部小片	
20	016-03	瓦器　椀	D5 SH40	12	残高 4	—	内面：ミガキ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、オサエ	密	良	灰色　N5/0	約20%	
21	016-05	瓦質土器　鍋	D5 SH40	—	残高 3.6	—	内外面：ナデ	密	良	灰色　N4/0 断面：灰白色　N8/0	口縁部小片	
22	016-06	瓦質土器　羽釜	D5 SH40	—	残高 3	—	内面：ナデ 外面：ナデ、鍔部貼り付け後ナデ	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	やや良	暗灰色　N3/0 断面：灰白色　2.5Y8/2	口縁部小片	
23	024-08	鉄製品　錠	D5 SH40	—	—	残存長 3.5	—	—	—	—	—	
24	016-02	瓦器　椀	B6 SH41	13.3～13.6	3.25	高台径 3.6	内面：ミガキ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、オサエ、高台貼り付け後ナデ	密	良	灰色　N4/0 灰白色　N8/0	約90%	
25	017-02	陶器　皿	B4 SH31	11	2.05	高台径 5.6	内面：ロクロナデ後施釉 外面：ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ	密	良	内外面（釉薬）：灰白色　2.5YR 8/2 外面（素地）：灰白色　5Y8/2	約20%	
26	015-08	陶器　播鉢	A4 SH31 南周溝	—	残高 3.5	—	内面：回転ナデ、口縁部ヨコナデ　外面：回転ナデ	やや密（～3㎜の砂粒含む）	良	外面：灰白色　10YR8/2 内面：灰白色　2.5Y8/1	口縁部小片	
27	024-07	鉄製品　角釘	C4 SH31	—	—	残存長 2.1	—	—	—	—	—	
28	022-02	刀子	A3・B3 SH31	—	—	残存長 6.3	—	—	—	—	—	鉄鏃の可能性もある。
29	012-03	陶器　椀	C4 SD34	約11	残高 2.3	—	内外面：鉄釉	密	良	内外面（釉薬）：黒褐色　7.5YR 3/2 外面（素地）：灰白色　5Y8/1	口縁部約20%	
30	012-08	土師器　小皿	A8 SK44	2.15	残高 4.9	—	内面：ナデ 外面：ナデ	やや密（金雲母含む）	—	外面：褐灰色　10YR6/1 内面：にぶい黄橙色　10YR7/2	約20%	
31	012-07	土師器　羽釜	B8 SK44	—	残高 2.2	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ヨコナデ、鍔部貼り付け後ナデ	やや密	—	浅黄橙色　10YR8/3	口縁部小片	
32	014-02	土師器　小皿	E11 SK72	10	1.9	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密（～1㎜の砂粒含む）	—	外面：淡橙色　5YR8/4 内面：にぶい黄橙色　10YR7/3	約20%	
33	014-06	土師器　小皿	E12 SK72	7.6	1.4	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	—	にぶい黄橙色　10YR7/4	約90%	
34	015-07	土師器　小皿	E11 SK72	—	残高 1.2	—	口縁部ヨコナデ	密	—	にぶい黄橙色　10YR7/3	口縁部小片	
35	021-03	灰釉陶器　椀	F12 SK78	—	残高 2.9	—	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	密	良	灰黄色　2.5Y6/2	口縁部小片	
36	008-06	土師器　甕	F12 SK78	—	残高 4.5	—	内面：ナデ、口縁部横ナデ 外面：ナデ	密（微砂粒含む）	—	にぶい黄橙色　10YR5/4	約20%	
37	014-05	土師器　小皿	F9 SK86	10.6	1.6	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密（～2㎜の砂粒含む）	—	にぶい橙色　7.5YR7/4	約50%	
38	015-03	土師器　小皿	F9 SK86	10.8	1.75	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	—	にぶい黄橙色　10YR7/3	約20%	
39	019-08	土師器　小皿	H9 SD87	7.3	残高 1.2	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	密（～0.5㎜の砂粒含む）	—	浅黄橙色　7.5YR8/4	約30%	
40	011-06	土師器　小皿	H10 SD94	8	残高 1.8	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	やや密	—	灰白色　2.5Y7/1	口縁部小片	
41	019-06	瓦器　椀	D5 SK112	13.8	残高 2.5	—	内面：ミガキ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、オサエ	密	不良	外面：灰白色　5Y8/1 内面：灰色　N4/0 灰白色　N8/0	口縁部約20%	
42	024-10	鉄滓	D5 SK124	—	—	重さ 107g	—	—	—	—	—	
43	019-09	土師器　小皿	D5 SK124	7.8	1.1	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	密（雲母含む）	—	浅黄橙色　7.5YR8/4	約30%	

第４表　出土遺物観察表(1)

No.	登録番号	器種	出土位置遺構	口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
44	019-04	土師器　小皿	I 8 SK127	9.7	1.4	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	密（～２㎜の小石含む）	—	外面：浅黄橙色　10YR8/3 内面：浅黄橙色　7.5YR8/3	約30%	
45	006-03	丸瓦	F10 SD88	残長 10.6	残高 6.6	—	内面：ナデ、布目痕跡留める 外面：ナデ	密（～2.5㎜の砂粒含む）	良	灰色　N4/0	約20%	
46	011-02	瓦質　火鉢	C 3 SD29	—	残高 6.9	底径 18	内面：オサエ、ナデ 外面：工具ナデ、脚部削り出し	密（金雲母を含む）	良	灰色　N4/0	約30%	
47	024-06	鉄製品　角釘	C 7 SX20	—	—	残存長 3.4	—	—	—	—	—	
48	013-02	土師器　小皿	F12 SD63	9.2	1.6	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	やや密	—	にぶい黄橙色　10YR7/2	完形	
49	013-03	土師器　小皿	E11 SD63	10	1.8	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	やや密	—	にぶい黄橙色　10YR7/2	約30%	
50	013-04	土師器　小皿	E11 SD63	8.6	1.6	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	やや密（～0.5㎜の砂粒含む）	—	黄灰色　2.5Y6/1	約30%	
51	013-05	土師器　鍋	E13 SD63	—	残高 1.5	—	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ	やや密	—	外面：褐灰色　7.5YR4/1 内面：灰黄褐色　10YR6/2	口縁部小片	
52	011-04	陶器　甕	E10 SD63	—	残高 5	—	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ	やや密	良	にぶい橙色　2.5Y6/4	口縁部小片	
53	011-03	土師器　甕	F12 SD63	約10.4	残高 8	—	内面：ハケ、口縁部ヨコナデ 外面：ハケ	やや密（～2㎜の砂粒含む）	—	明褐灰色　7.5YR7/2	約20%	
54	013-01	土師器　甑	F12 SD63	27.2	5.8	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ、ハケ	やや密	—	外面：にぶい黄橙色　10YR7/2 内面：灰白色　10YR8/2	約20%	
55	011-01	瓦質　火鉢	F 9 SD63	約15	5.6	底径 13.2	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、脚部削り出し	密（金雲母を含む）	良	褐灰色　10YR4/1	約30%	
56	022-04	火打金	E13 SD63	—	—	残存長 5.1	—	—	—	—	—	
57	022-05	鉄滓	E13 SD63	—	—	重さ 28g	—	—	—	—	—	
58	001-01	枡	SD63	幅 14.5	高さ 13.8	底径 16.7	—	—	—	—	—	
59	003-03	漆器椀	SD63	15	8.4	底径 7.8	—	—	—	—	—	
60	003-01	下駄	SD65	残存 17.4	残存幅 8.4	残存厚 0.5～2.6	—	—	—	—	—	
61	003-02	楔	SD63	長さ 8	幅 1.6～1.9	厚さ 0.4～0.7	—	—	—	—	—	
62	023-06	獣骨	E12 SD63	—	—	約16	—	—	—	—	—	
63	017-09	土符	E 9 SD63	残長 4.1	幅 5.25	厚さ 1.5	—	やや密	—	灰白色　10YR8/2	約40%	篦書きによる文字有り
64	005-05	土師器　小皿	H9 SD65	6.1～6.5	1.4	—	内面：オサエ、ナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	にぶい橙色　7.5Y6/4	完形	
65	004-01	土師器　小皿	E11 SD69	6.4	1.4	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～2㎜の砂粒含む）	—	にぶい橙色　7.5YR7/4	口縁部約70%	取り上げ№.1
66	005-06	土師器　小皿	H9 SD65	6.5	1.3	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～6㎜の砂粒含む）	—	にぶい橙色　7.5Y6/4	約60%	
67	007-03	土師器　小皿	H9 SD65	8	1.5	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密	—	浅黄橙色　7.5YR8/4	約30%	
68	004-02	土師器　小皿	E11 SD69	7.4	1.4	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	にぶい黄橙色　7.5YR7/3	約80%	取り上げ№.4
69	014-03	土師器　小皿	E 9 SD65	8	1.6	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	やや密（～1㎜の砂粒含む）	—	にぶい橙色　7.5YR7/4	約20%	
70	007-05	土師器　小皿	E11 SD69	7.2	1.2	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密	—	にぶい橙色　7.5YR7/4	約30%	
71	007-01	土師器　小皿	E11 SD69	7.2	1.5	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密	—	にぶい橙色　7.5YR7/4	約50%	
72	007-04	土師器　小皿	E11 SD69	8.1	1.4	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密	—	にぶい黄橙色　10YR7/4	約30%	
73	005-03	土師器　小皿	G9 SD65	8.4	1.4	—	内面：オサエ、ナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	にぶい橙色　2.5Y6/4	約40%	
74	005-10	土師器　小皿	H9 SD65	8.6	1.7	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	にぶい橙色　7.5Y6/4	完形	取り上げ№.8
75	005-01	土師器　小皿	G9 SD65	8.2	1.8	—	内面：オサエ、ナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	にぶい黄橙色　10YR6/3	完形	
76	005-02	土師器　小皿	G9 SD65	7.7～8.2	1.5	—	内面：オサエ、ナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	にぶい黄橙色　10YR7/3	完形	
77	004-07	土師器　小皿	F9 SD65	7.8～8.6	1.7	—	内面：オサエ、ナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～５㎜の砂粒含む）	—	灰白色　2.5Y8/2	完形	取り上げ№.7
78	014-07	土師器　小皿	H9 SD65	8.7	1.6	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	密	—	灰黄色　2.5Y7/2	約30%	
79	005-08	土師器　小皿	H9 SD65	9.6	2.1	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1㎜の砂粒含む）	—	灰白色　10YR8/2	約30%	取り上げ№.6
80	015-02	土師器　小皿	H9 SD65	9.6	残高 1.9	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	—	灰白色　10YR8/2	約30%	
81	014-08	土師器　小皿	H9 SD65	8.8	1.5	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	やや密（～1㎜の砂粒含む）	—	黄灰色　2.5Y4/1	約30%	
82	006-01	土師器　小皿	H9 SD65	9.6	1.7	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	灰白色　2.5Y8/1	約50%	取り上げ№.10
83	004-03	土師器　小皿	E11 SD69	9.1～9.5	1.8	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	灰白色　10YR8/2	完形	取り上げ№.9
84	005-07	土師器　小皿	H9 SD65	9.6	1.7	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1㎜の砂粒含む）	—	灰白色　2.5Y8/1	約80%	取り上げ№.3
85	014-04	土師器　小皿	H9 SD65	10.6	1.9	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密（～2㎜の砂粒含む）	—	灰白色　2.5Y8/2	約80%	
86	005-04	土師器　小皿	G9 SD65	9.3～9.7	1.9	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5㎜の砂粒含む）	—	浅黄橙色　10YR8/3	完形	

第５表　出土遺物観察表(2)

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
87	005-09	土師器 小皿	H9 SD65	9.6	2	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1mmの砂粒含む）	—	浅黄橙色 7.5YR8/3	約50%	取り上げ№7
88	004-06	土師器 小皿	F9 SD65	10.6	1.9	—	内面：オサエ、ナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1mmの砂粒含む）	—	にぶい黄橙色 10YR7/3	約80%	取り上げ№6
89	012-02	土師器 小皿	H9 SD65	9.8	2.1	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	やや密（金雲母含む）	—	灰白色 7.5Y8/2	約90%	
90	006-02	土師器 小皿	H9 SD65	9.8	1.8	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～3mmの砂粒含む）	—	にぶい橙色 5YR7/4	完形	取り上げ№11
91	007-02	土師器 小皿	E11 SD69	10	2	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密	—	浅黄橙色 7.5YR8/4	約80%	
92	004-04	土師器 小皿	F9 SD65	11.2	1.9	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密（～1.5mmの砂粒含む）	—	灰白色 10YR8/2	約20%	取り上げ№2
93	008-05	須恵器 杯	I9 SD65	—	2.3	—	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	密	良	灰色 N6/0	約20%	
94	015-06	陶器 椀	H9 SD65	—	残高1.8	—	内面：ロクロナデ、施釉 外面：ロクロナデ、削り出し高台	密	—	素地：灰白色 2.5Y8/2 釉：灰白色 5Y8/1	約60%	
95	018-02	土師器 甕	H9 SD65	31	残高5.8	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ハケ	密（～1mmの砂粒・雲母含む）	—	外面：N3/0 内面：灰黄褐色 10YR6/2	約30%	
96	008-04	土師器 甕	F9 SD65	23	残高5.2	底径4.6	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ヨコナデ、ハケ	密	—	黒褐色 2.5Y3/1	口縁部約20%	取り上げ№3
97	008-03	陶器 甕	G9 SD65	27.6	残高3.9	高台径13.8	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ナデ	密（～4mmの小石・砂粒含む）	良	外：橙色 5YR6/6 内：にぶい赤褐色 5YR5/4	口縁部約20%	
98	014-01	陶器 甕	H9 SD65	31	残高4.9	—	内面：ロクロナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ロクロナデ	密（～6mmの砂粒含む）	—	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 7.5YR8/3	口縁部約20%	
99	008-02	陶器 擂鉢	E9 SD65	—	残高5	底径13	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ナデ	密	良	外：橙色 2.5YR6/6 内：淡赤橙色 2.5YR7/4	底部約30%	
100	004-05	陶器 擂鉢	F9 SD65	—	残高8.5	—	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ナデ	密（～2.5mmの砂粒含む）	良	にぶい黄橙色 10YR6/3	約20%	取り上げ№4
101	008-01	陶器 擂鉢	H9 SD65	31	13.2	底径12.7	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ナデ	密（～5mmの砂粒含む）	—	灰白色 10YR8/2	約30%	
102	024-09	鉄滓	G9 SD65	—	—	重さ19g	—	—	—	—	—	
103	007-06	丸瓦	H9 SD65	残長13	6	—	内面：ナデ、布目痕跡留める 外面：ナデ	密	良	灰色 N5/0	約20%	
104	020-04	土師器 小皿	C6 Pit5	8.4	残高1.2	—	内面：ナデ 外面：ナデ	密	—	灰白色 10YR8/2	約50%	
105	020-06	土師器 小皿	C6 Pit5 SK39内	8	1.2	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	—	にぶい黄橙色 10YR7/3	約30%	
106	020-01	瓦器 椀	C6 Pit5 SK39内	13.7	3.7	高台径4.5	内面：ミガキ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、オサエ、高台貼り付け後ナデ	密	良	灰白色 N8/0 灰色 N4/0	約30%	
107	020-02	瓦器 椀	C6 Pit5 SK39内	13.1	残高3.6	—	内面：ミガキ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、オサエ	密	良	灰色 N6/0	約20%	
108	015-01	土師器 小皿	B10 Pit10	9.1	1	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	—	浅黄橙色 10YR8/4	約20%	
109	014-09	土師器 小皿	E10 Pit2	9.2	1.7	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	—	浅黄橙色 7.5YR8/3	約20%	
110	011-05	土師器 小皿	E10 Pit4	8	1.1	—	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	やや密	—	にぶい黄橙色 10YR5/4	約20%	
111	015-04	土師器 小皿	B8 Pit5	10.9	残高2.5	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密（～1mmの砂粒含む）	—	外面：灰黄褐色 10YR6/2 内面：にぶい黄橙色 10YR7/3	約20%	
112	020-03	瓦器 椀	C4 Pit9	13.8	残高3.3	—	内面：ミガキ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、オサエ	密	良	灰色 N5/0	約20%	
113	015-05	土師器 小皿	E9 Pit4	6.8	1.55	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密（～1mmの砂粒含む）	—	外面：にぶい黄橙色 10YR7/4 内面：灰白色 2.5Y8/2	約20%	
114	012-01	陶器 椀	B8 Pit5	16.7	残高6	—	内面：施釉 外面：底部ロクロケズリ	密	良	内外面（釉薬）：灰オリーブ色 7.5Y6/2 外面（素地）：灰白色 5Y7/1	口縁部約20%	
115	016-01	瓦質 鍋	C2 Pit2	26	残高9.5	—	内面：工具ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：工具ナデ	密	良	外面：褐灰色 10YR5/1 内面：灰色 N6/0	約30%	
116	018-01	陶器 擂鉢	G11 Pit1	25.8	13.7	底径9	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底部ナデ	密（～2mmの小石含む）	—	外面：にぶい橙色 5YR6/3 7.5YR7/4 内面：にぶい橙色 5YR6/3	約30%	
117	019-01	陶器 皿	H10 Pit2	11	2.1	高台径6.4	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、ケズリ	密	良	釉：灰白色 N7/0 灰白色 N7/0	約70%	
118	019-10	弥生土器 壺	H12 上面掘削	9	残高2.4	—	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ハケ	密（～1mmの小石・砂粒含む）	—	外面：にぶい黄橙色 10YR7/4 内面：にぶい黄褐色 10YR5/3	口縁部約20%	
119	017-01	須恵器 杯	B7 検出面整地土	12.2	2.55	—	内面：ロクロナデ 外面：底部ヘラ切り痕	やや密（1～2mmの砂粒含む）	良	灰白色 N7/0	約40%	
120	012-05	須恵器 杯	下地区 重機掘削	—	残高1.6	高台径約9	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、高台貼り付け後ナデ	密（～0.5mmの砂粒含む）	良	灰色 N7/0	底部約30%	
121	010-01	須恵器 杯	C5 包含層	—	残高2.5	高台径9.9	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、高台貼り付け後ナデ	密	良	灰色 N6/0	底部約80%	
122	019-05	須恵器 杯	D4 東壁	—	残高4.8	高台径12.8	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ	密	良	灰白色 N7/0	底部約20%	
123	010-03	須恵器 高杯	C4 包含層	—	残高2.4	台径15	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	密	良	灰色 N6/0・5/0	脚部約20%	
124	012-06	土師器 甑	下地区 重機掘削	—	残高5.8	—	内面：ハケ、口縁部ヨコナデ 外面：ハケ	やや密（～1mmの砂粒を含む）	—	外面：浅黄橙色 7.5YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	口縁部小片	
125	012-04	須恵器 壺	G11～H11 包含層	—	残高3.8	底径約8	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、高台貼り付け後ナデ	密	良	内面：灰色 N5/0 外面：灰色 N4/0	底部約30%	
126	019-03	須恵器 壺	G11 上面掘削	—	残高3.8	高台径8.6	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ	密（～0.5mmの砂粒含む）	良	外面：灰色 N5/0 内面：灰色 N6/0	底部約30%	
127	019-07	黒色土器 椀	H12 上面掘削	13	3.4	—	内面：ナデ、ミガキ、口縁部ヨコナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	密（～0.5mmの砂粒・雲母含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR6/3 褐灰色 10YR5/1 内面：灰色 N4/0	約20%	
128	019-02	灰釉陶器 皿	G11 上面掘削	—	残高2.2	高台径7.7	内面：ロクロナデ後施釉 外面：ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ	密	良	釉：オリーブ灰色 10Y6/2 素地：灰白色 5Y7/1	底部約20%	
129	010-05	青磁 椀	H11 遺構検出	—	残高3.6	—	内面：ロクロナデ後施釉 外面：ロクロナデ後施釉	密	良	灰白色 N8/0	口縁部一部	

第6表　出土遺物観察表(3)

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径(cm)	器高(cm)	その他(cm)	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
130	010-04	青磁 椀	下地区 重機掘削	－	残高 4.3	高台径 5.7	内面：ロクロナデ後施釉 外面：ロクロナデ、削り出し高台	密	良	灰白色 N8/0	底部 約40%	
131	016-04	瓦器 椀	D5 包含層	12.4	2.8	高台径 4	内面：ミガキ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ、オサエ、高台貼り付け後ナデ	密	良	灰色 N5/0	約30%	
132	010-02	瓦器 椀	C5 包含層	12.4	残高 3	－	内面：ミガキ、口縁部横ナデ 外面：ナデ、オサエ	密	良	灰色 N5/0	約20%	
133	010-07	土師器 小皿	E10 落込埋土	8.8	2	－	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密	－	浅黄橙色 10YR8/4	約90%	
134	010-06	土師器 小皿	C5 包含層	8.6	1.1	－	内面：オサエ、ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：オサエ、ナデ	密	－	浅黄橙色 10YR8/3	約60%	
135	017-08	土師器 小皿	H10 包含層	8.5～8.7	2.05	－	内面：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	やや密	－	浅黄橙色 10YR8/3	約80%	
136	009-03	陶器 播鉢	D4 包含層	－	残高 2.5	底径 13.7	内面：回転ナデ、底部ナデ 外面：回転ナデ、底部ナデ	粗（1～2㎜の砂粒含む）	－	浅黄橙色 10YR8/3	底部 約20%	
137	009-02	陶器 播鉢	D2 トレンチ 北壁	29.2	残高 8.5	－	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	－	橙色 5YR7/6	約10%	
138	021-04	土師器 甕	D4 包含層	30.3	残高 6.7	－	内面：工具ナデ、口縁部ヨコナデ 外面：ナデ	密	良	灰色 N5/0	口縁部 約20%	
139	009-01	瓦質 火鉢	下地区 重機掘削	－	残高 8.9	－	内面：ナデ 外面：ナデ、脚部貼り付け後ナデ	密	やや良	灰色 N4/0	脚部 約20%	
140	024-05	鉄製品 角釘	C7 包含層	－	－	残存長 7.3	－	－	－	－	－	
141	024-01	鉄製品 鎹	C6 包含層	－	－	残存長 3.5	－	－	－	－	－	
142	024-02	鉄製品 鎹	B3 包含層	－	－	残存長 3.4	－	－	－	－	－	
143	024-04	鉄製品 刀子	H11 包含層	－	－	残存長 2.6	－	－	－	－	－	
144	024-03	鉄製品 環状片	F12 包含層	－	－	残存長 3.3	－	－	－	－	－	

第７表　出土遺物観察表(4)

［遺物観察表　凡例］

報告書に掲載した遺物の観察表は、以下の規則によって作成した。

1　観察表左端の番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号をふっていない。したがってこの番号が遺物の全てでない。

2　実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの３桁は用紙の番号で、後側の２桁は用紙内での実測した順序の番号である。

3　出土遺構は上段に地区番号を表し、下段に遺構番号を示している。地区・遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされたい。

4　器種については、判明しているものについて記載した。

5　計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値をとっている。また、「－」は、計測できないものを表している。単位は、記載のとおりcmである。さらに遺物によっては、長・幅・厚・重・高台径・底径・つまみ径などを表すこともある。

6　調整技法の特徴については、あくまでも成されている調整について記述しており調整順序によるものでない。

7　胎土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。

8　焼成については、良・並・不良の３段階に分けて、その中間に位置する場合は「やや」を付記している。

9　色調については、『新版　標準土色帖』（小山・竹原編19版　1997年）に基づいて表記した。

10　残存については、遺物の残りの割合を％で表記している。「－」は、表しきれないものである。

11　備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載しているか、遺物取り上げの際の番号などを表記している。

Ⅴ　自然科学分析

はじめに

森庵遺跡は、柘植川右岸の段丘上に位置する。発掘調査により、古墳時代の円墳、奈良～平安時代の掘立柱建物跡、溝、竪穴住居、鎌倉～室町時代の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土坑、溝、柱穴等が検出されている。

本報告では、木材利用及び植物利用状況に関する資料を得るため、鎌倉～室町時代と考えられる遺構から出土した木製品や種実遺体の同定を実施する。

1. 木材の樹種

(1)試料

試料は、出土した木製品7点（試料番号1-4,6-8）と炭化材1点（試料番号5）の合計8点である。

(2)分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(3)結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹3種類（クリ・モクレン属・カツラ）に同定された。また、炭化材はマツ属複維管束亜属に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・スギ（Cryptomeria japonica（L. f.）D. Don）スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・アスナロ（Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.）ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・カバノキ属（Betula）　カバノキ科

番号	器種	R-	遺構	樹種
1	箱状木製品	002-01	SR63上層	スギ
2	下駄	003-01	SD65	スギ
3	楔？	003-02	SR63上層	スギ
4	漆器椀	003-03	SR63上層	カバノキ属
5	炭化材		SH90側溝内	マツ属複維管束亜属
6	柱根		G9P2	スギ
7	薄板		南壁サブトレ(SR63)	アスナロ
8	杭		SD65	マツ属複維管束亜属

第８表　樹種同定結果

散孔材で、管孔は放射方向に2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、1-4細胞幅、1-30細胞高。

(4)考察

木製品は、箱状木製品、下駄、楔、漆器椀、柱根、薄板、杭である。針葉樹3種類、広葉樹1種類に同定され、スギが多い。器種別に見ると、箱状木製品、下駄、楔、柱根がスギであり、木理が通直で割裂製が高く分割しやすいスギ材が幅広い用途に利用されていたことが推定される。一方、薄板はアスナロであった。アスナロは、スギと同じく木理が通直で割裂性が高い材質を有し、スギよりも耐水性に優れる。また、スギに比較して晩材部の幅が狭く、より均質である。杭は、複維管束亜属であった。複維管束亜属は、いわゆるニヨウマツ類であり、本地域ではアカマツまたはクロマツと考えられる。いずれも針葉樹材としては比較的強度や保存性が高く、杭材として適した木材を選択していることが推定される。

漆器椀はカバノキ属であり、今回の木製品の中で唯一広葉樹材が利用されている。カバノキ属は、比較的重硬で強度が高い。また、道管径が小さく、早晩材部の密度の違いもほとんどないため、全体的に緻密で均質である。漆器椀の木地としては、ブナ属、ケヤキ、トチノキ等が一般的であり、カバノキ属の利用例は少ないが、今回の分析結果から本遺跡ではカバノキ属の漆椀が利用されていたことが推定される。

炭化材は、杭にも認められた複維管束亜属であった。遺構内から出土していることから、何らかの人間活動により火を受けて炭化したことが推定される。

2. 種実の種類

(1)試料

種実同定は、E13区のSR63下層から出土した種実3個(種実1)と、F9区のSD65から出土した種実3個(種実2)の、計2試料6点について実施する。

(2)分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)等との対照から、種実の種類と部位を同定する。分析後の種実標本は、70%エタノール溶液と共に瓶に入れて返却する。

(3)結果

・種実1(E13区 SR63下層)

スモモ(Prunus salicina Lindley: バラ科サクラ属)の核(内果皮)に同定された。完形1個、破片2個。灰褐色、レンズ状広楕円体でやや偏平。基部には丸い臍点があり、一方の側面には縫合線が発達する。内果皮は厚く硬く、表面には浅い凹みが散在する。長さ1.2-1.6cm、幅1.1-1.2cm、厚さ8.5mm程度。破片2個は、縫合線に沿って割れた半分個体で、内部には仁(種子)が入る広楕円形(長さ8-12mm、幅7-9mm程度)の窪みがある。

・種実2(F9区 SD65)

トウガン(Benincasa hispida (Thunb. ex Murray) Cogn.: ウリ科トウガン属)の種子に同定された。完形2個、破片1個。淡灰褐色、倒卵形でやや偏平。長さ11-12mm、幅6-7mm、厚さ1.5mm程度。種子基部は切形で楕円形の臍がある。種子両面の全周の縁には段差があり薄くなる。種皮は厚くやや堅い。

(4)考察

スモモ、トウガンは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種で(南木,1991)、スモモは観賞用の他、果実が食用、薬用等に広く利用され、トウガンは果実が食用に利用される。

これらの栽培植物の可食部である種実が、各遺構から検出された状況を考慮すると、本遺跡近辺で栽培もしくは持ち込まれ利用されていたものが、生活残渣として遺構内に廃棄された等の人為的行為が推定される。(パリノ・サーヴェイ株式会社　高橋敦・松元美由紀)

【引用文献】

林昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研

究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
南木睦彦,1991,栽培植物,古墳時代の研究　4　生産と流通Ⅰ,　石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編,雄山閣,165-174.
中山至大・井之口　希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
RichterH.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部久・内海　泰弘（日本語版監修）,海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
島地　謙・伊東　隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

Ⅵ　ま　　と　　め

今回の発掘調査の成果にもとづいてそれぞれ各時代の検出遺構及び出土遺物から検討し、若干の考察を加えて遺跡の位置づけを行い、まとめとしたい。

１　古墳時代

１）古墳について

上地区では、古墳を１基確認した。調査の結果からは、直径約10mの円墳とみられる。埋葬主体部は、木棺直葬である。遺物は鉄製品・石製品が出土している。埋葬主体部は、古墳の近辺の後世の遺構から須恵器片が出土していることや墓壙の一部が削平を受けているにも関わらず墓壙全体がやや深く掘削されていたことや遺物の遺存状況から判断して、盗掘の被害に遭わなかったとみられる。この古墳の造営時期は、遺物から５世紀前葉とみられる。また、調査地から南方約200～300mに所在する北門遺跡では、５世紀代の直径25mの円墳が存在していたことが調査によって判明していることから、本古墳以外にもこの丘陵地近域に存在していた可能性が高いとみられる。仮に地形的な制約を受けていたとしても多くの古墳が造営されたことに変わりはないであろう。また、調査地から北方には浅古谷古墳群があり、東側には、三角縁三神二獣鏡等が出土した直径約30m前後と推定される円墳の山神寄建神社古墳が所在している。北門遺跡では、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての集落が確認されており、この集落を形成した人々の後裔が当調査地の古墳を造営した可能性があろう。よって、今後も周辺域において古墳が確認される可能性があるため、今回検出した本墳は、森庵１号墳としておきたい。

２）被葬者像について

森庵１号墳の被葬者について主体部から出土したものから考えたい。出土したものは鉄剣、鉄鉾、砥石、勾玉である。まず、砥石について見てみると県内出土例が少ない提砥である。津市六大Ａ遺跡、津市（旧安濃町）平田古墳群（35号墳）からの出土例があり、県外では園部岸ヶ前古墳群の出土例がある。過去の調査事例や副葬品の組み合わせから想定できそうな点は、渡来系要素を持っていると言えそうである。なお北門遺跡含め集落の形成の関係者という要素も付加されよう。また、提砥の材質は凝灰岩であるため、本遺跡より北側の琵琶湖層群の可能性もあり、琵琶湖周辺域から流入したものと考えられるのではなかろうか。

２　平安時代

１）集落跡について

調査では、平安時代と明確に判断できる遺構は、少ないが遺物は出土している。まず遺構では、竪穴住居の一部分が確認している。出土遺物では、志摩式製塩土器などが含まれており、この時代において集落が営まれていたと言えよう。

２）ＳＺ90について

ＳＺ90は、出土遺物から12世紀中葉から後葉にかけての遺構と判断できそうである。検出した平面プランは、長方形である。当初竪穴住居を考えたものの礫層が南北方向に敷き詰められた状況が現れ、その下には炭が詰められ、その下には、溝が中央部から遺構の周囲を巡る周溝状になるように造作されていた。また、礫層の周囲には２間×１間相当になるように柱穴が存在しており何らかの建物状のものがあったと推定される。

この遺構は、過去の発掘調査例からみて類例がないものである。似たような類例では、昭和45年度発掘調査を実施した東庄内Ｂ遺跡の火葬址であろうか。東庄内Ｂ遺跡のケースでは、被熱痕跡を留めているが、この遺構では礫層に被熱したとみられる痕跡は全くない。また、炭層においても蔵骨器のような容器や人骨片と思われる遺物は、一切なかったため、墓として考えるのは無理がある。

なお、この遺構の西側にまで浅く広がる状況及び中央部からぐるり周囲を巡るように溝が掘削されていることや溝から炭が点々と埋土に混ざっている状況から水が溢れて流れていたような状況が想定でき

そうである。前述したように集落の存在が考えられることから水を自然に浄化するような施設であった可能性が高く、トイレという可能性も考えられる。トイレでの類例として時代は下るが北部九州における木村重隆陣屋跡の便所遺構と平面的形態は、類似するものがある。遺構の時期が出土遺物から12世紀中葉から12世紀後葉と考えたが、もう少し下る可能性も否定できない。また、トイレ遺構とすると汲み取り式の初源にあたる可能性もあろう。

3　鎌倉時代

遺構・遺物とも森庵遺跡の中心となる程多い。鎌倉時代からまとめについて述べたい。

１）集落跡について

ＳＨ40は、竪穴住居である。遺構そのものは、調査区の状況によって西側半分だけの検出である。遺物には、土師器皿（16～19）及び瓦器椀（20）、瓦質土器羽釜（22）、鍋（21）が出土している。竪穴住居が13世紀においても住居形態としてこの地域には存在していたとみられる。

また、ＳＨ41は、ＳＨ40の上層において検出した遺構である。ＳＨ41は、竪穴建物と推測できそうである。遺物は、瓦器椀（24）が出土している。瓦器椀は、建物のコーナー隅に伏せた状態で出土しており建物の建築時期を示すものと判断される。遺物の時期は、ＳＨ40出土のものより後出のものとみられる。13世紀において竪穴住居や竪穴建物が調査によって検出でき、集落が存在したことを示している。

4　室町時代

遺物及び遺構の比較的多い時期である。その状況についてみておきたい。

１）区画施設について

調査区下地区では、「コ」の字状に展開する溝（ＳＤ65・69）がある。また、ＳＫ72として捉えた遺構も一連の続きの可能性がある。遺物は、上記した遺構から土師器皿を中心に陶器擂鉢や土師器鍋が出土している。また、出土遺物から15世紀後葉前後に廃絶したものとみられる。さらにこの区画内に遺構が多く検出されている。このような状況からこれらの遺構は、屋敷地ないし館跡的な要素を汲み取れる。序においても記しているように旧伊賀国では、館跡が600に及ぶほど存在している。遺構の展開状況から館跡の一角と推測できるのではなかろうか。よってＳＤ65・69は、本来全周していたと推測される。なお、過去の調査事例より郭内の建物配置について「逆Ｅ字」形に表わされる配置が考えられている。この遺跡内で確認された範囲では、そのような建物配置が成されていない。おそらく建物配置は、規模的な要素によってその有り方が異なっていた可能性が強いと考えられる。

２）宅跡として

現在、伊賀市大谷地内では、宇津賀大谷氏館跡が確認されている。しかしながら、旧伊賀国について記された『三国地誌』によるとこの大谷地内には、「佐治玄蕃宅址」があったことが判明しており、所在不明となっている。今回のこの区画施設は、不明城館として記されている「佐治玄蕃宅址」に比定しうるのではなかろうか。また、宅址となれば規模も比較的小規模と推測され、比定にも問題がないであろうと考えられる。

さらに、遺物の時期を含めこの区画施設は15世紀末以降には溝（ＳＤ63）によって寸断されており、ＳＤ63が掘削される段階には、廃絶していたと考えられる。現在も土塁等が残り館跡の痕跡を留める城館跡が多い中で、この時期に廃絶したことは、不明城館にならざるを得ない要素の一つであったことに違いなかろう。

３）竪穴建物について

鎌倉時代における竪穴住居から竪穴建物への発展については、考察編において後述する。ここでは、その後の竪穴建物について述べる。

調査区上地区で確認した竪穴建物は、２棟である。１棟（ＳＨ41）は鎌倉時代、もう１棟（ＳＨ31）は室町時代と判断される。ＳＨ31は、周囲に石列を巡らしていた可能性が高い。建物内には周溝が巡っており、何らかの建物であることが想定される。遺物については、擂鉢（信楽）、南伊勢系土師器鍋、鉄釘などが出土しており、遺物の時期から15世紀末から16世紀初頭のものとみられる。また、遺構床面が

踏み締められて硬化しており、生活していたとみられる。したがってこの竪穴建物は、住居に使用されていた可能性もある。遺構の構造としては、時期的な差があるが山梨県西田町遺跡のものに類似する。

ＳＨ41では、柱穴が壁際周囲に存在して、大壁造建物の竪穴建物であったが、ＳＨ31は、周囲に礫石を巡らし、それを建物基礎とした竪穴建物とみられる。従って、時期的にみても14～15世紀代の建物を検出していないが、竪穴建物という建築が15世紀後葉から16世紀初頭に至る時期まで存続していたことに間違いはないと思われる。また、こうした半地下式的建物が伊賀国の独特の忍者屋敷の源流となっていった可能性もあろう。

４）ＳＤ63について

下地区において検出したＳＤ63は、調査区の中程から始まっており南側調査区外へと続く。この溝からは木製品をはじめとして多くの遺物を含む。前述した区画施設であろう宅跡の溝を掘削しており宅跡廃絶後のものである。また、調査区東側に存在する宇津賀大谷氏館跡にほぼ併行する様にある。従って宇津賀大谷氏館跡の規模の拡大に伴い掘削された堀とも考えられる。つまり推測の域に入るが宇津賀大谷氏館跡の領主に吸収された痕跡の可能性が高い。

５）自然科学分析からの出土遺物について

この時期の食文化についてみていきたい。自然科学分析において判明した植物の種類については、果実種が出土している。果実種は、スモモ及びトウガンである。また、調査時においてＳＤ63掘削時に自然木などといっしょに栗の実が出土している。動物の種類などでは、シカの大腿骨（62）が出土している。これらの遺物だけで遺跡全体の食生活を言い表わすことができないが、食用に給するような植物を栽培する一方で、狩猟で得られる動物を捕っていた状況が垣間見える。つまり本遺跡では、自給自足的な食料様相であったとみられる。

5　小結

各項目にそれぞれの発掘調査成果を記述した結果、重要な点は、古墳時代において集落に対する墓域であること、またその被葬者像に特徴がみられることが言える。平安時代においては、集落跡であり志摩式製塩土器などが流入しており、東海道という陸上交通の要衝であるかたわら木津川を利用した河川交通の要衝として重複した意味をもつ遺跡であることである。中世では、前半期において集落内部において住居形態に変化がみられる。後半期では、宅跡の廃絶状況について述べた。それは15世紀後半から16世紀初頭にかけて領主構造の中でも、衰退する領主層と興隆する領主層の状況が窺え、権力構造について垣間見ることができるのではなかろうか。旧伊賀国においてもこういう状況が判明した点は、従来捉えられているような一揆的領主構造だけでなかったということは非常に重要ではなかろうか。最後に全般的に中世とういう時代は、我々が考える以上に怒涛かつ疾風のように大きく変容してきた社会であり、汎日本的にいずれの人々もこの時代の荒波を乗り越えて、形成された社会と言えるであろう。

「補記」

ここで記載した竪穴建物は平面形が方形及び長方形のものも同列に扱い記述している。よって一律に竪穴建物と呼称する。また、竪穴建物には一辺において出入口と判断されるような突出部を持つものがあるがそれらも含めた上での判断である。

また、本文中において宅跡として捉え記述した。その理由は、調査で検出した規模的な要素、機能的な問題から城館跡として呼称するにはいささか問題があるように判断したので宅跡とした。（萩原義彦）

【参考文献】

上野市教育委員会「北門遺跡（第１次）発掘調査報告」（上野市文化財調査報告31　2004年）
三重県埋蔵文化財センター「北門遺跡（第３次）発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財調査報告237　2004年）
伊賀市「上野市史　考古編」2005年
佛教大学校用地調査委員会『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』2001年
三重県埋蔵文化財センター『六大Ａ遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告115-16　2002年）
安濃町遺跡調査会『平田古墳群』1987年
三重県教育委員会・日本道路公団名古屋支社「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告５　1970年）
黒崎直編「トイレ遺構の総合的研究　－発掘された古代・中世トイレ遺構の検討－」（奈良国立文化研究所　1999年）
森川常厚「伊賀地域中世城館の郭内区画と遺構配置」『研究紀要第４号』（三重県埋蔵文化財センター　1995年）
山梨県東八代郡一宮町教育委員会『西田町遺跡発掘調査報告書』1997年
上野市古文献刊行会編「定本　三国地志　下巻」（上野市　1987年）

考察編

竪穴建物の示す可能性について

萩原義彦

1　竪穴住居から竪穴建物へ

近年調査例が増え各地で中世における竪穴建物が確認されている。類例としては、関東地方で神奈川県鎌倉、栃木県下古館遺跡、東北地方で戦国時代の青森県浪岡城跡、岩手県鳥越館跡、九州地方博多など広く全国的に存在している。これら多くは、方形竪穴建物跡と称されている。県内の場合では、松阪市三雲町松本権現前遺跡、松阪市（旧嬉野町）東野遺跡、斎宮跡、小牧北遺跡の例があるが類例は少ない。大まかに全国的にみても時期的な要素は、古代から中世にかけて遺構と思われる。

今回の検出した竪穴建物は、遺物の時期から13世紀前葉から中葉にかけての遺構と推測される。また、重複関係及び遺物の時期の両方から竪穴住居（ＳＨ40）及び竪穴建物（ＳＨ41）の関係は、竪穴住居が竪穴建物の前段階に存在していたことを示している。つまり、竪穴住居から竪穴建物に発展していった可能性が強く、森庵遺跡ではこの時期に建物構造を変化させるようなことがあったことを示していると考えられる。

2　竪穴建物の分類

竪穴建物について簡単に県内の類例で分類してみる。平面形態から分類してみると斎宮跡、小牧北遺跡は、ほぼ竪穴住居に近い状況であるのでＡ類とする。また、松本権現前遺跡、東野遺跡は土坑の周囲に柱穴が巡るものであり、Ｂ類とする。時期的な要素でみるとＡ類は古代に属し、Ｂ類は中世において見られるものである。なお、森庵遺跡のＳＨ41は、壁周溝の中に柱穴が見られＢ類の範疇内に納まると考えられる。

3　竪穴建物の性格

方形竪穴建物跡の研究は、先学により多くなされてきており高橋與右衛門、大庭康時、飯村均、馬淵和雄、宗臺秀明、堂込秀人等各氏によって鎌倉幕府の御家人関連に伴い全国的に普遍的に存在し、職業に伴う建物として捉えられつつある。今回の遺構においても本遺構から出土しなかったが鉄滓および鉄製品が各所で出ており鍛冶工房に関わる建物として捉えることができそうである。なお、竪穴建物ＳＨ31からは、刀子・釘が出土しており時期差はあるものの竪穴建物が工房跡と考えられる。さらに、時期的な差異があるものの当遺跡から東側400～500m前後に位置する火山遺跡では、鍛冶跡とみられる遺構を調査によって検出している。火山遺跡は尾根上に城館跡が立地し、それの周辺部の地域での調査事例である。当遺跡と非常によく似た状況であった可能性が高いのではなかろうか。

おそらくこの地域一帯に鍛冶に関わるものが存在していたとみられる状況は、竪穴建物が職能民の住居・工房跡として捉えられるのではなかろうか。

4　竪穴建物が有する政治性について

先学の研究から方形竪穴建物跡は、鎌倉幕府との関わりが指摘されてきている。当遺構も直接的な関わりを示すものは存在していないが関わりがあった間接的な要素を示すことのできる遺跡であろう。まず、竪穴建物とういう遺構そのものが存在すること、鍛冶工房に関わり鉄滓などの遺物が存在することなどの傍証を含め、本遺跡が交通路上、京都と繋がる東海道に近いことをあげることができる。さらに眼下には柘植川が東西に貫流しており、下っては木津川に合流することから京奈地域との水陸両面の交通

の要衝地であったことである。従って本遺跡は、内陸部の「河川津」や「泊」といった要素を持っていた可能性があろう。こういったことから鎌倉幕府は、この地域を重要視していた可能性が高く、当初から有力御家人を配置し、森庵遺跡をはじめその周辺域の遺跡は、その所領に関わる遺跡であると推測できるのではなかろうか。さらに時代が下るにつれて北条一門ないし得宗被官層などの所領となっていた可能性も考えられるのでは、なかろうか。

5　竪穴建物への転換

本遺跡では、竪穴住居から竪穴建物への変遷が確認できた。その変遷について成立する背景について考えたい。竪穴建物は、初現は奈良時代で史跡斎宮跡において確認される。11世紀代は、博多から東北地方にかけて、13世紀代には鎌倉などほぼ、この時期までに全国的に確認されるようになる。

この遺構について前川要氏は、晩唐・五代から北宋の穴蔵との関連を指摘する見解を持たれている。ただ、中国の風土に根ざしたものが流入したと考えられなくはないが、何らかの技術的な要因が持ち込まれた結果、各時代の一部分的に順次変化をもたらした可能性が高いのではなかろうか。

6　竪穴建物への転換要素

次に竪穴建物へ転換するについても考えてみてみたい。竪穴住居から竪穴建物に変遷するにあたって建物基礎に変化があったことから上屋構造にも大きな変化がもたらされたと推測できる。すなわち主柱穴が確認できなくなる一方、周溝内に柱穴痕跡が確認できることがあげられる。その原因には、建物の上屋構造に変化があったことによると考えられる。この様な変化をもたらす原因となったことの要因に船の船底構造をあげることができるのではなかろうか。両者に共通するものは、水が浸透してこないことにある。なかでも船底構造は、北国船から弁才船にかけてのものや中国のジャンク船の船底の造船技術を建物の屋根構造に技術応用していた可能性があるのではなかろうか。その可能性は、第１に遣隋使・遣唐使の隋・唐との外交交渉にあって使節派遣に造船が行われていたことが上げられる。第２に平安時代末における日宋貿易船が上げられる。第３に鎌倉時代であるが『吾妻鏡』の建保四年及び建保五年の条に宋人陳和卿が鎌倉において唐船の建造にあたっている。本来陳和卿は、奈良東大寺大仏の再建に関わる人物であるが、他方で造船にも関わりの深い人物である。陳和卿は、多才なテクノラートと言う事もできよう。すなわち建物と造船の間に技術的な繋がりが人物を介して認めることができる。最後に室町時代前期の日明貿易船があげられる。つまり７世紀からの竪穴住居の変化と遣隋使及び遣唐使船の時期、建物の構造の進化、２階建建物への発展と和船の構造変化が軌を一にしているとみられる。最後に船底の構造用語についてみてみると一般的に使用される竜骨（キール）部分は、「航」と書かれる。「航」の読みは、「かわら」である。竜骨は、船構造において重要な部位である。その部位を「かわら」という読みに宛てられていることから屋根構造と船底構造は、一体的であったと推量できるのではなかろうか。よって建物の上屋構造は、船の船底構造の進歩と共にあったと仮定することもできるのではなかろうか。

7　家と船の構造変化が示す可能性

家の上屋構造の変化と船の構造変化の軌跡が同一性を示していることは、上述した。ここでは古墳時代における掘立柱建物においてもその変化が現れている可能性を示しておきたい。中国の正史『宋書』などに見える倭の五王が中国南朝に朝貢していたことが判明している。掘立柱建物の変化では、特徴的な高床倉庫群に県外で和歌山県鳴滝遺跡、大阪府法円坂遺跡、群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡の主屋とみられるものが出現する。県内では城之越遺跡Ｂ地区ＳＢ１をあげることができよう。これらの様な特徴的で巨大な掘立柱建物群は、倭の五王が中国との交流上において使用した船の構造の技術利用の延長線上すなわち造船技術の進歩、準構造船形式の成立という点から遺跡としても技術の渡来系の要素も多分に含まれていたと推察される。

さらに弥生時代においても中国大陸との交流があったことがわかる。なかでも『三国志』『後漢書』などの正史に邪馬台国などの諸国の記事があり、大陸との交通があったことが窺える。国内においては近年、大型掘立柱建物が発掘調査によって確認されるようになり、佐賀県吉野ヶ里遺跡をはじめ近畿域で池上曽根遺跡、中部域での朝日遺跡などがあり、県内では菟上遺跡があげられる。これらは単材刳船から大型のゴンドラ形の複材刳船への変化と共にあるのではなかろうか。この時代においても掘立柱建物と造船技術の両方の進歩が認められる。したがって両者の関係性の深さを示しているのではなかろうか。

8　まとめ

竪穴建物について広く考察してきた。その結果、その性格や政治的関係、竪穴住居からの発展、家と船の関係について相互技術利用の可能性があることがわかってきた。とりわけ家と船の関連性は、汎日本的にみて、海洋性の高い民族であることの一つの証左ではなかろうか。また、森庵１号墳の出土遺物にみられる様に渡来文化を広く受け入れきたことの証明ではなかろうか。

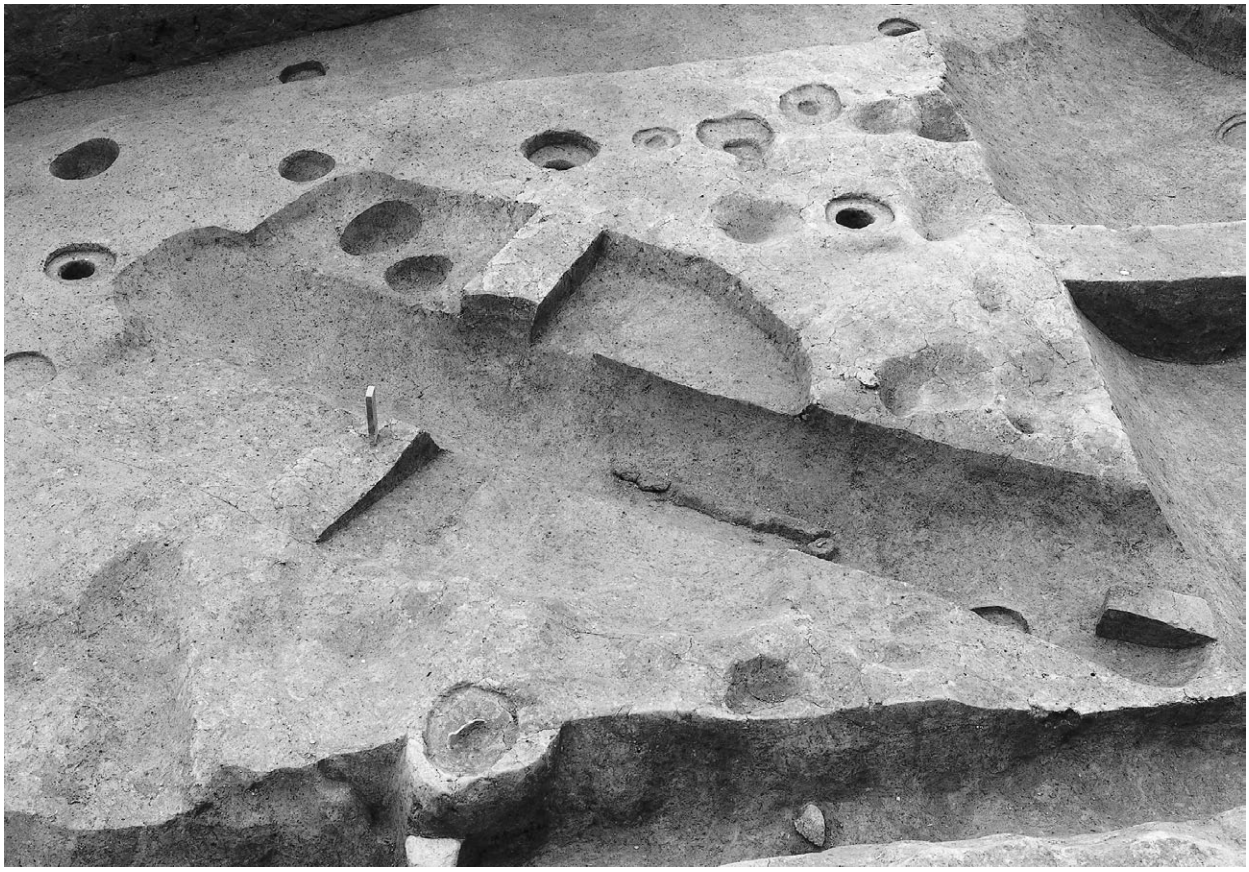
【参考文献】

堂込秀人「竪穴建物」『季刊考古学第85号　中世前期の都市と都市民』（雄山閣　2003年）
宗臺秀明「方形竪穴建物の機能と変遷」（考古学研究第46巻第３号　1999年）
斎木秀雄「方形竪穴建築址の構造」「庶民の建物－方形竪穴建物址の性格－」『よみがえる中世３－武士の都　鎌倉』（平凡社　1989年）
飯村均「陸奥南部の竪穴建物跡を主体とする集落」『中世都市研究第３号　津泊宿』（新人物往来社　1996年）
馬淵和雄「都市の周縁，または周縁の都市－いわゆる方形竪穴建築址による中世都市論の試み－」『青山考古第９号』（青山考古学会　1991年）
高橋與右衛門「発掘された中世の建物跡」『北の中世』（日本エディタースクール出版　1992年）
高橋與右衛門「中世の建物跡」『戦国の考古学』（高志書院　2003年）
鈴木弘太「中世「竪穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学　第21号』（日本考古学協会　2006年）
馬淵和雄「得宗・大仏・都市」（帝京大学山梨文化財研究所報告第８集　1997）
小野正敏編「図解・日本の中世遺跡」（東京大学出版会　2001年）
宮本長二郎「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間　関口欣也先生退官記念論文集』（中央公論美術出版　1999年）
浅川滋男ほか「埋もれた中近世の住まい」（同成社　2001年）
玉井哲雄「絵巻物の住宅を考古学発掘史料から見る」『絵巻物の建築を読む』（東京大学出版会　1996年）
前川要「六　中世の家族と住居」『考古学による日本歴史15　家族と住まい』（雄山閣　1996年）
第６回北陸中世土器研究会「中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり」（北陸中世土器研究会　1993年）
長野県埋蔵文化財センター「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書８　北栗遺跡」1990年
宮城県教育委員会「中ノ内Ａ遺跡・本屋敷遺跡」1987年
栃木県文化振興事業団「下古館遺跡」『自治医科大学周辺地区　昭和63年度埋蔵文化財発掘調査概報』1988年
会津坂下町教育委員会「古館遺跡」『福島県営ほ場整備事業阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書』（1992年）
宮城県教育委員会「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書－Ⅳ－』1980年
中・近世研究班「中世の竪穴遺構について」『研究ノート　創刊号』（茨城県教育財団　1991年）
福島文化センター「古宿遺跡」『栂畑地区発掘調査報告』1988年
千葉県「22　文脇遺跡」『千葉県の歴史　資料編　中世（考古資料）』1998年
山梨県東八代郡一宮町教育委員会「西田町遺跡発掘調査報告書」1997年
三雲町教育委員会「松本権現前遺跡第２次発掘調査報告」2002年
三重県教育委員会「Ⅲ．一志郡嬉野町　東野遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』（三重県埋蔵文化財調査報告79　1989年）
斎宮歴史博物館「史跡斎宮跡」（平成17年度発掘調査概報　2007年）
三重県埋蔵文化財センター「小牧北遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財調査報告284　2007年）
須藤利一「船」『ものと人間の文化史１』（法政大学出版局　1968年）
石井謙治「和船Ⅰ・Ⅱ」『ものと人間の文化史76-Ⅰ・Ⅱ』（法政大学出版局　1995年）
石井謙治「図説和船史話」（至誠堂　1983年）
宮本長二郎「日本原始古代の住居建築」（中央公論美術出版　1999年）
三重県埋蔵文化財センター「火山遺跡・山神遺跡・良福寺跡・高寺南遺跡」（三重県埋蔵文化財調査報告133-8　1996年）
三重県埋蔵文化財センター「三石代遺跡発掘調査報告　－三重県伊賀市下神戸所在－」（三重県埋蔵文化財調査報告279　2007年）
三重県埋蔵文化財センター「城之越遺跡　－三重県上野市比土－」（三重県埋蔵文化財調査報告99-3　1992年）
都出比呂志編「古代史復元６　古墳時代の王と民衆」（講談社　1989年）
大阪府立弥生文化博物館編「平成13年春季特別展　弥生都市は語る　－環濠からのメッセージー」（大阪府立弥生文化博物館図録22　2001年）

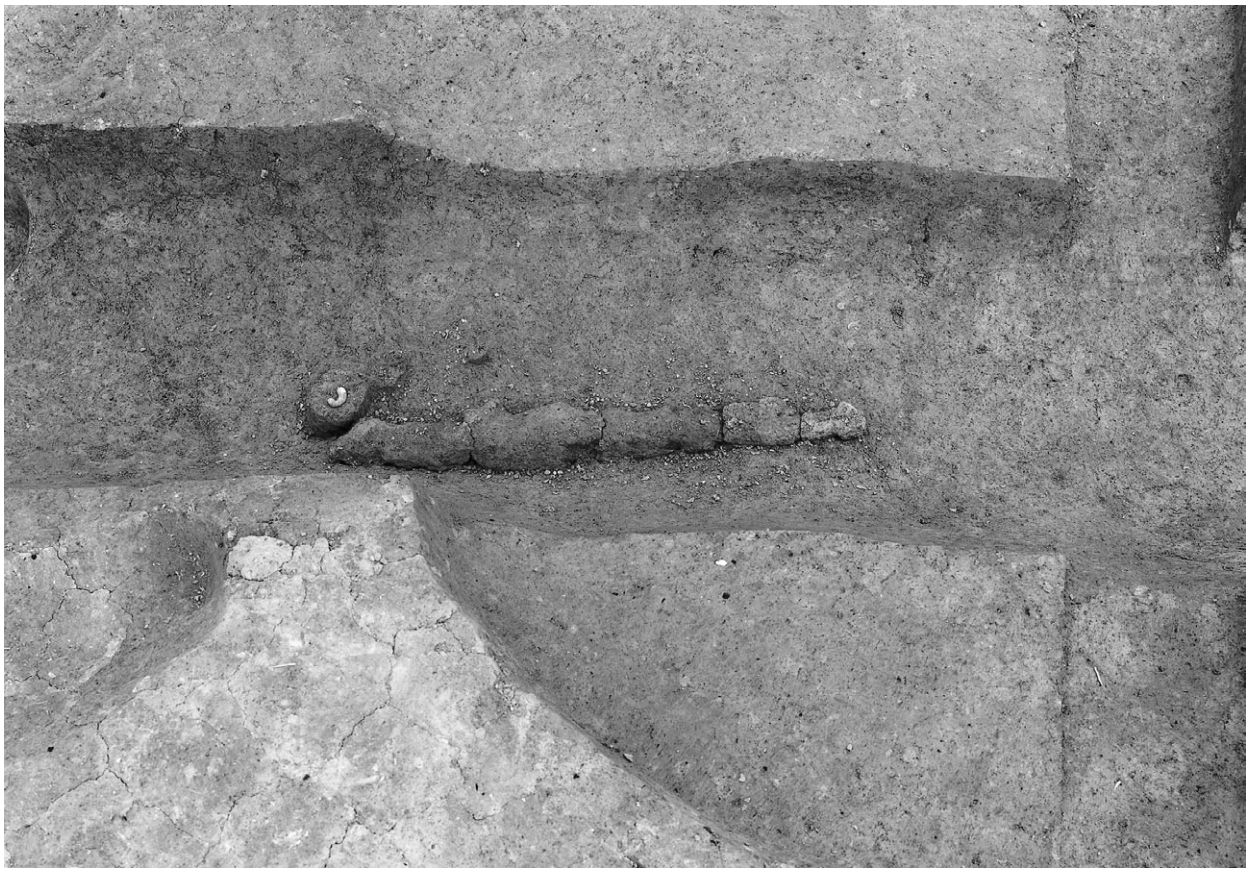
調査前風景（南から）

調査前風景（北から）

図版２

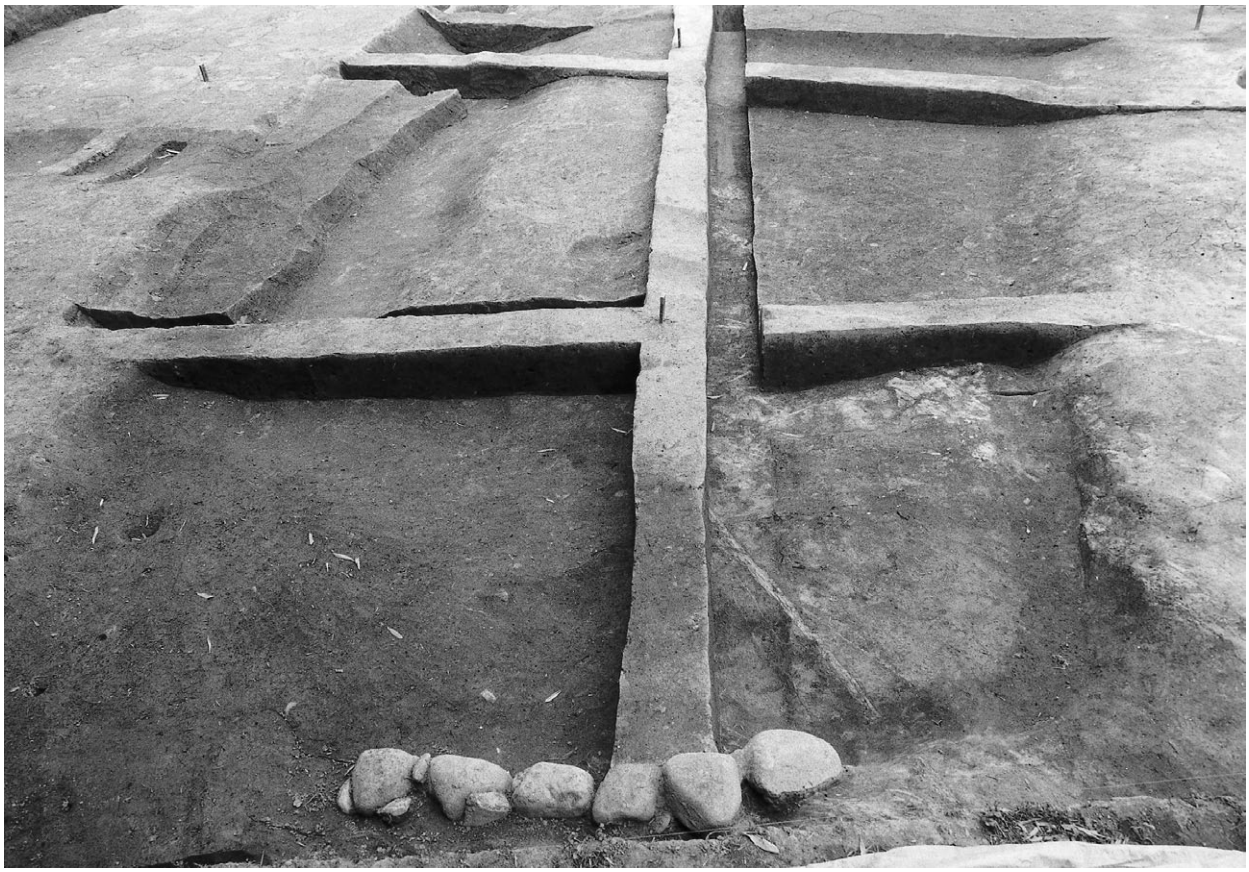


ＳＸ32遺物出土状況（西から）



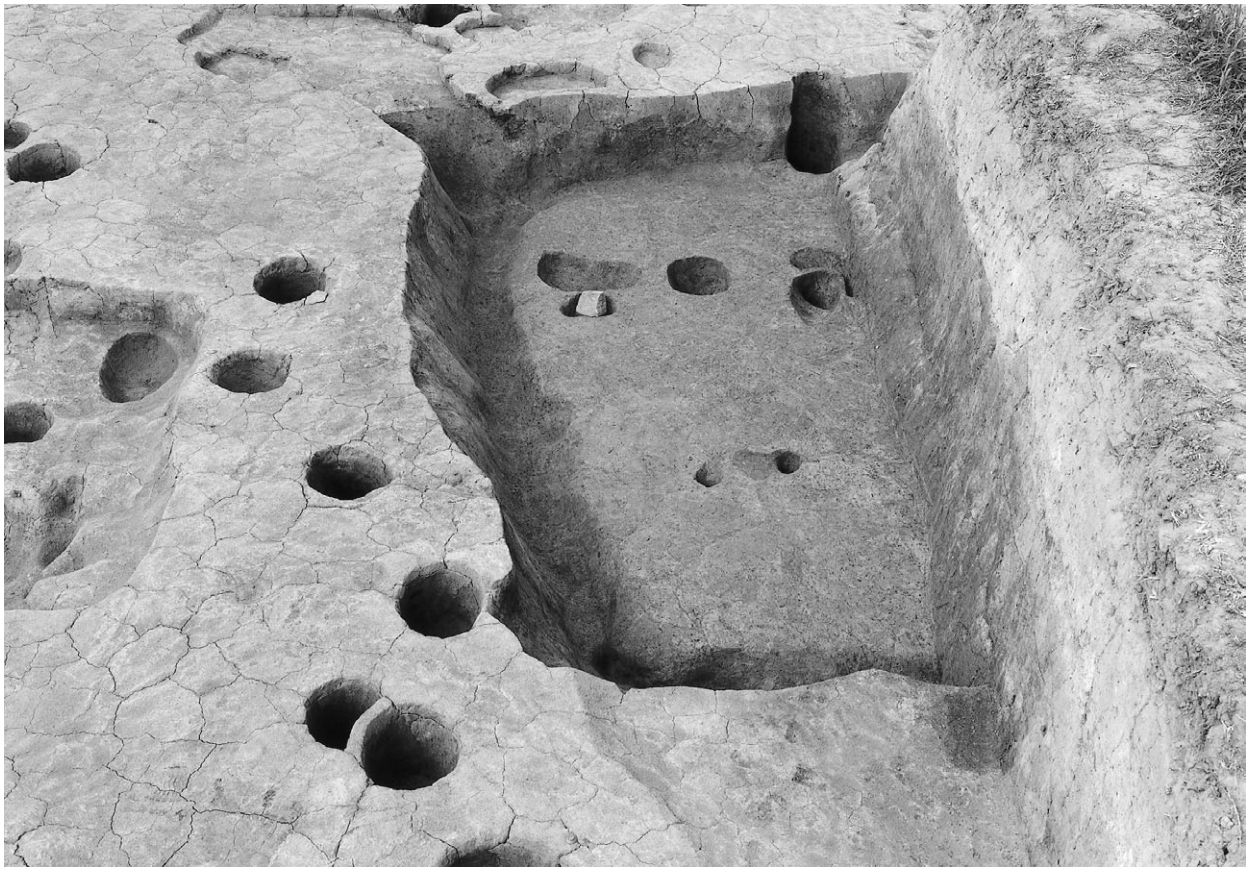
ＳＸ32遺物出土状況（東から）

上地区完掘状況（南から）



ＳＨ31完掘状況（西から）

図版４



ＳＨ40完掘状況（南から）

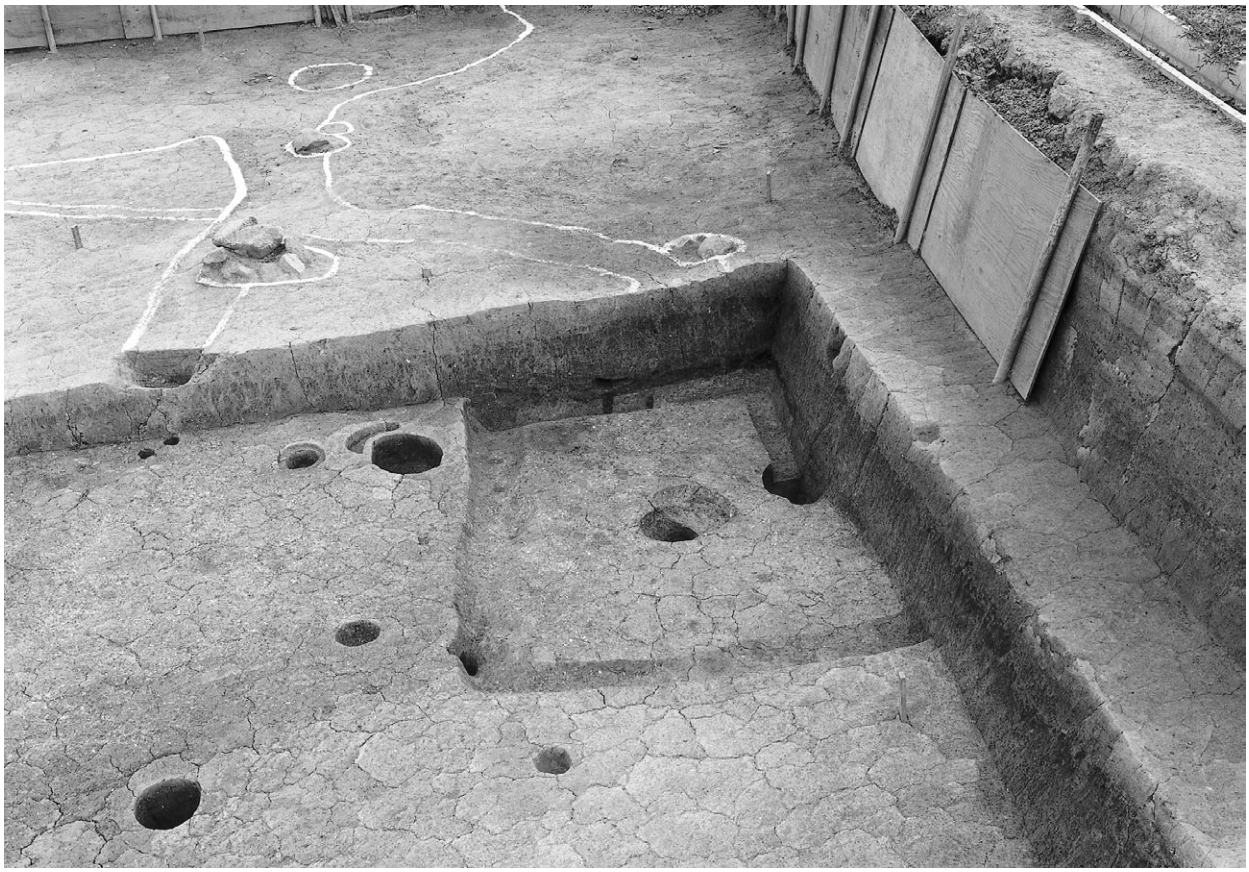
ＳＨ41断割状況（東南から）

下地区完堀状況（北西から）

下地区遺構掘削状況（南西から）

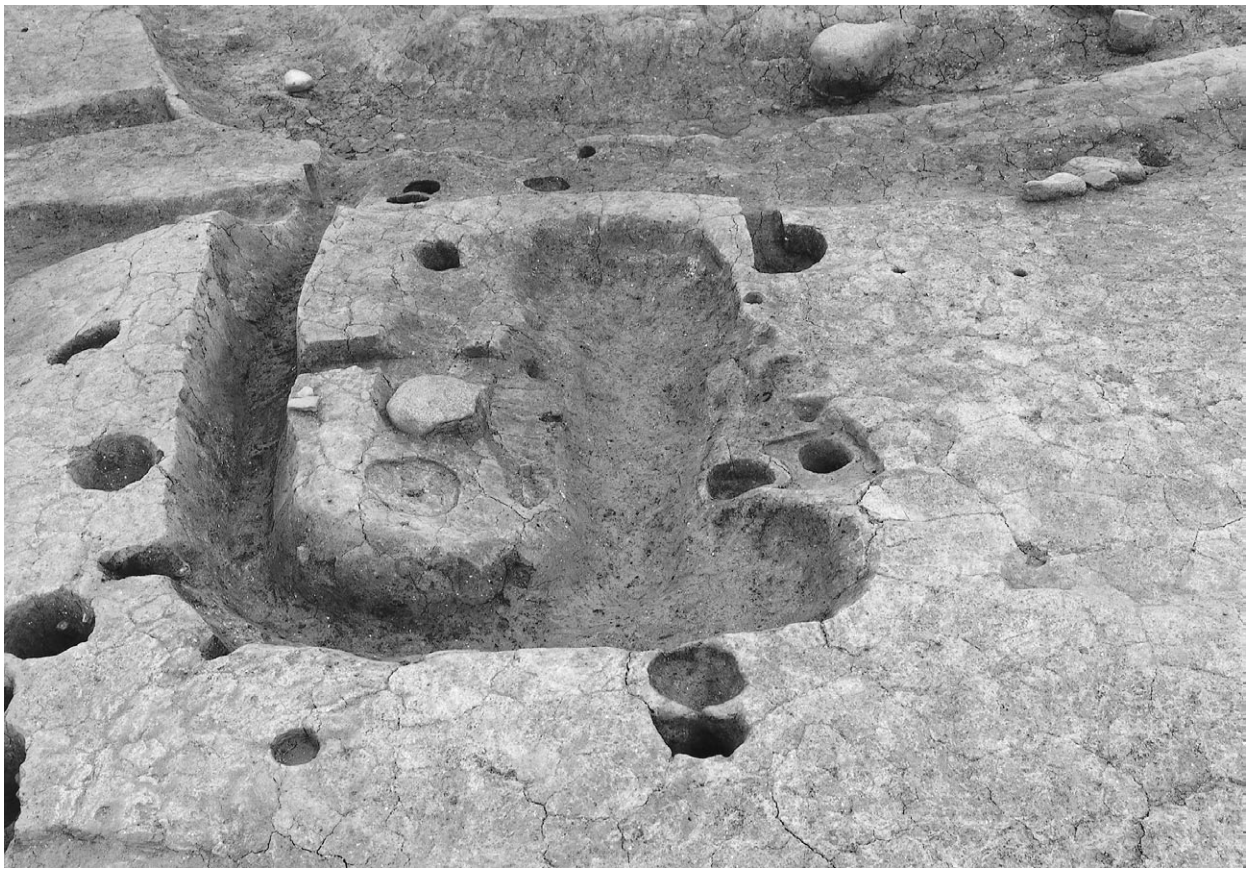
図版６

下地区下層完掘状況（北西から）



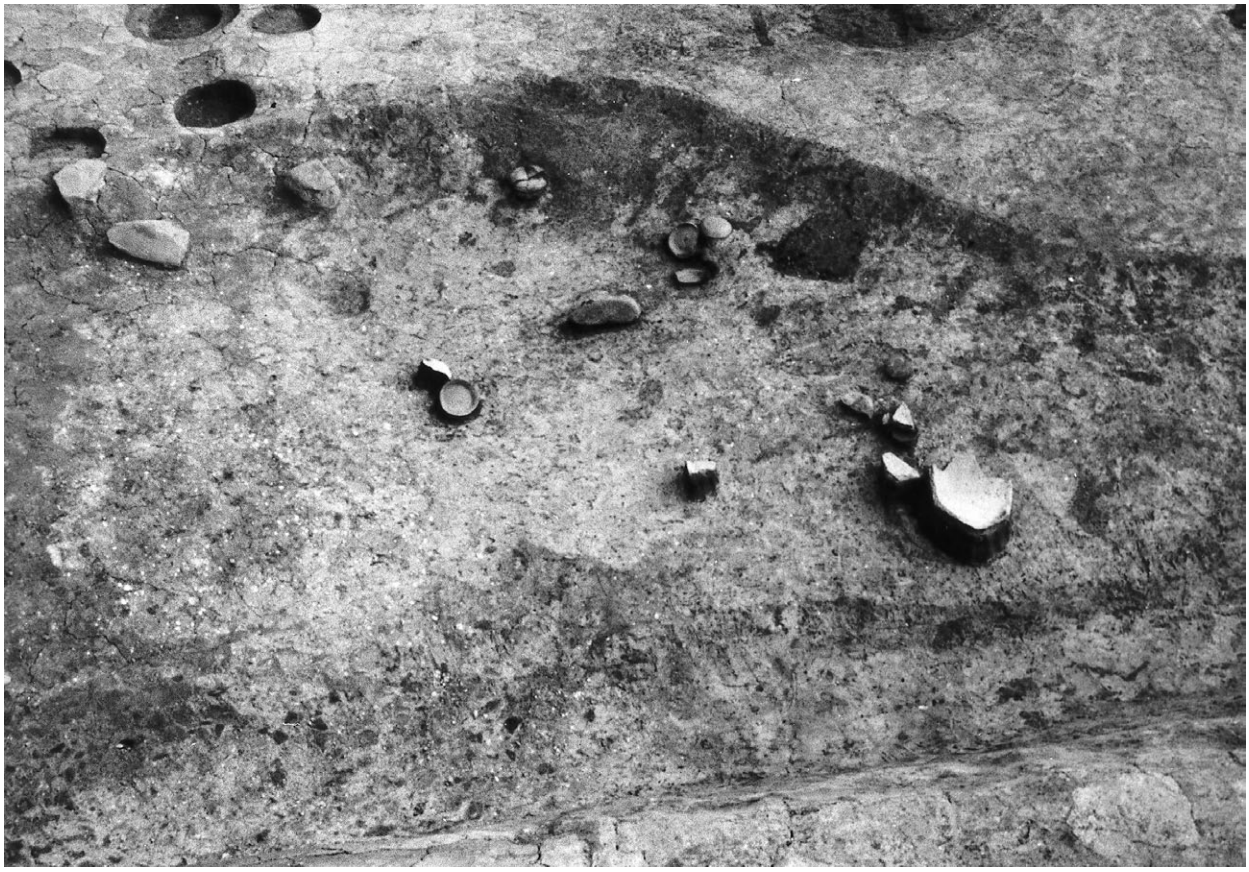
ＳＨ120完掘状況（西から）

ＳＺ90礫層出土状況（北から）



ＳＺ90完掘状況（北から）

図版８



ＳＤ65遺物出土状況（南から）

ＳＤ65遺物出土状況（西から）

ＳＤ65遺物出土状況（西から）

ＳＫ86遺物出土状況（西から）

図版10

ＳＫ86遺物出土状況（南から）

ＳＫ86遺物出土状況（南から）

箱状木製品(SD63)出土状況(南から)

漆器椀(SD63)出土状況(北から)

図版12

ＳＺ100完掘状況（南から）

ピット遺物出土状況（南から）

水田跡検出状況（北から）

水田跡検出状況（北西から）

図版14

出土遺物(1)

33

42

46

48

55

56

64

74

75

76

出土遺物(2)

図版16

出土遺物(3)

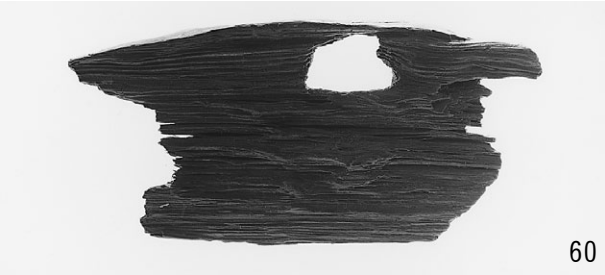
116

133

135

139

140


60

63

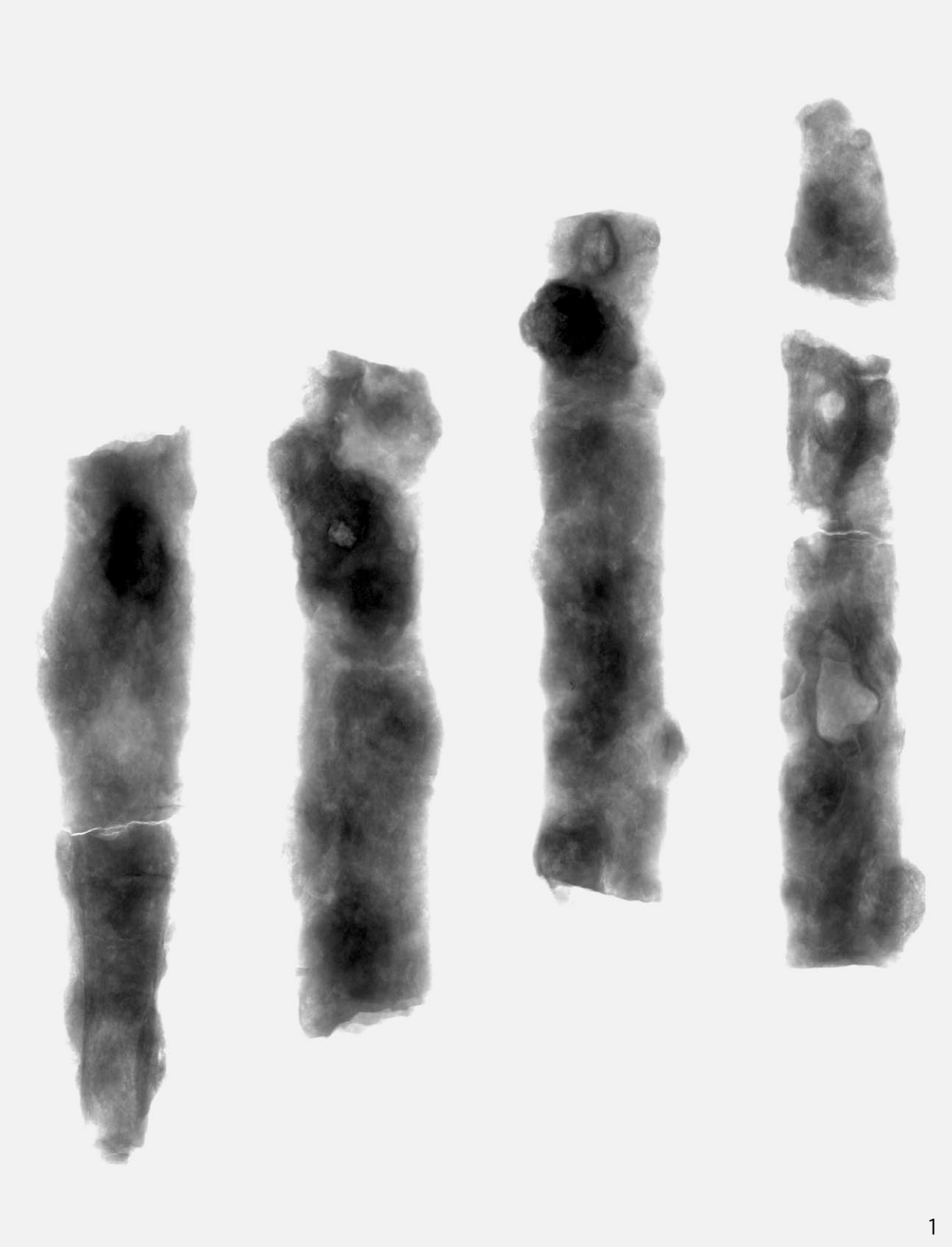
60

63

61

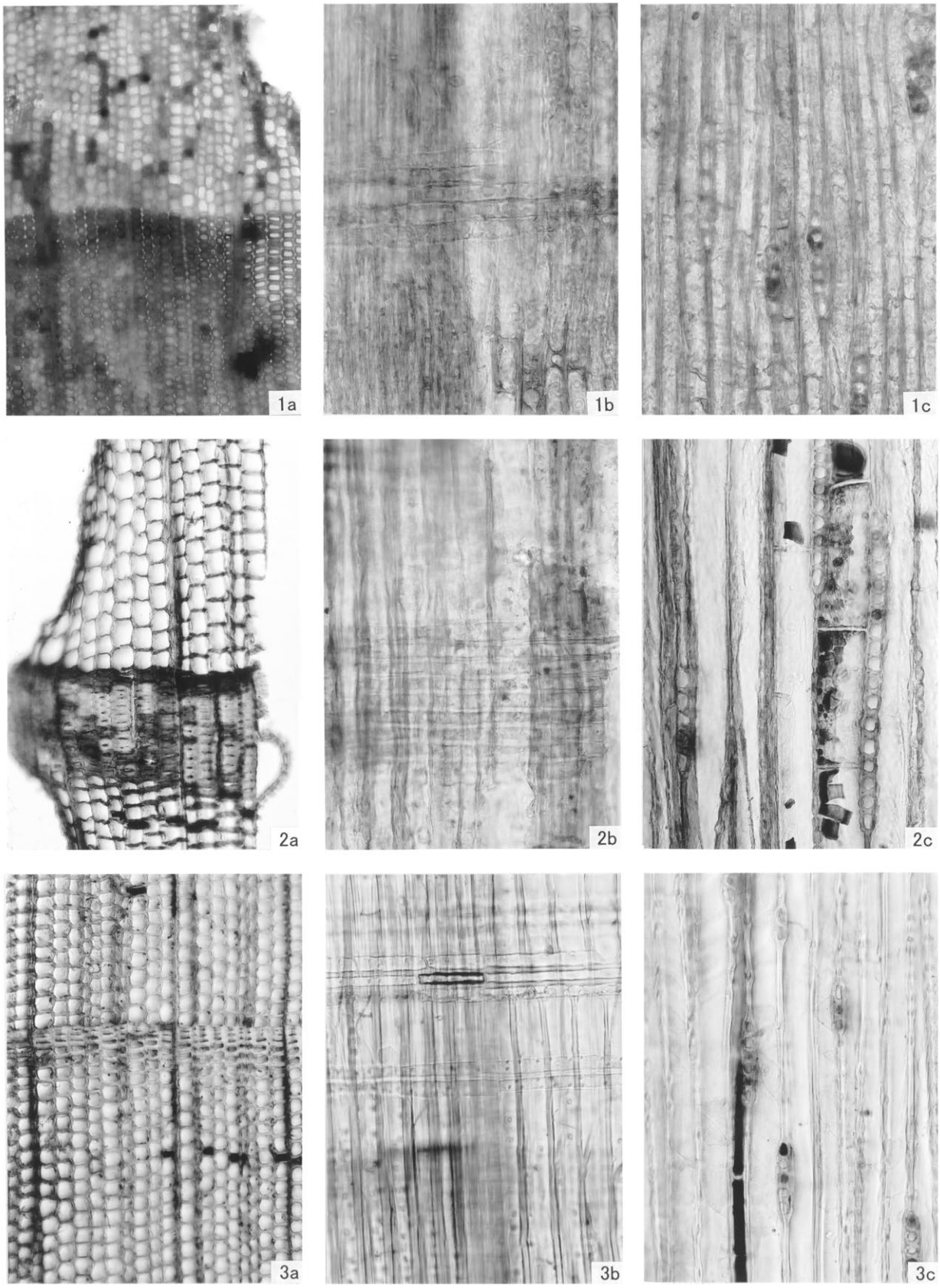
出土遺物(4)

図版18



出土遺物(5)

木材(1)

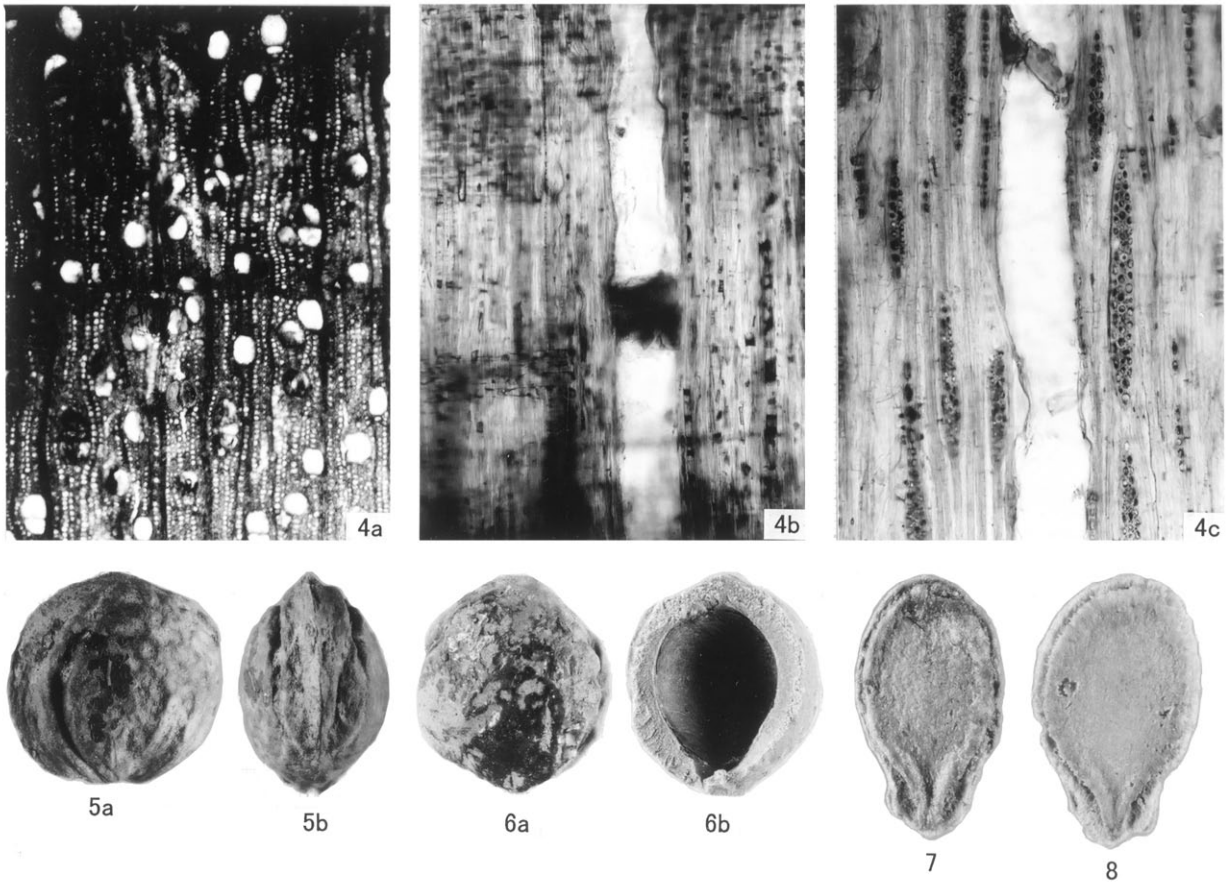


1．マツ属複維管束亜属(試料番号8)
2．スギ(試料番号3)
3．アスナロ(試料番号7)
　a:木口，b:柾目，c:板目

200 μm:a
100 μm:b,c

図版20

木材(2)・種実遺体



4．カバノキ属(試料番号4) a:木口, b:柾目, c:板目
5．スモモ 核(種1)
6．スモモ 核(種1)
7．トウガン 種子(種2)
8．トウガン 種子(種2)

200μm:4a
200μm:4b,c
5mm:5,6
5mm:7,8

報　告　書　抄　録

ふりがな	もりあんいせきはっくつちょうさほうこく
書 名	森庵遺跡発掘調査報告
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告
シリーズ番号	291
編 著 者 名	萩原義彦
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡0596－52－1732
発行年月日	西暦2008年２月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりあんいせき	みえけんいがしおおたに	216	A1244	34° 47′ 32″	136° 8′ 15″	2006.5.16 ～ 2006.8.23	1,400㎡ （内下層 380㎡）	平成18年度道路改良事業（国）422号（三田坂ＢＰ）
森庵遺跡	三重県伊賀市大谷							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森庵遺跡	墳墓	古墳時代	古墳	鉄製品（武器・工具）、石製品（砥石・勾玉）	総重量53.2kg
	集落跡	平安～室町時代	掘立柱建物・竪穴住居・竪穴建物・土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・瓦器・陶器擂鉢・甕等	

概要	森庵１号墳は、削平を受けているものの径10mの円墳である。主体部からは鉄剣、鉾、砥石、勾玉等が出土した。平安時代では、竪穴住居があり集落跡とみられる。鎌倉時代では竪穴建物を含む集落跡。室町時代は、宅跡とみられる区画施設が確認できた。

三重県埋蔵文化財調査報告291

森庵遺跡発掘調査報告

～伊賀市大谷所在～

２００８（平成２０）年２月

編集発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　（有）山　文　印　刷